

CAMINOS-5 (*michi* : 道)
(*Ensayos sobre la cultura de la peregrinación*)

Aiko Arai*
Bernardo Villasanz**

ÍNDICE GENERAL

1. 「中米およびカリブ海諸島への巡礼の道 (その二)」

CAMINO DE PEREGRINACIÓN AL CARIBE Y AMÉRICA CENTRAL.

Por Aiko Arai : (新井 藍子).

2. **EN EL CAMINO DE LA VERDADERA IDENTIDAD CRISTIANA.**

(Ensayo sobre creencias y valores cristianos) (II)

Por Bernardo Villasanz.

* *Aiko Arai*. Ex profesora de la Universidad de Fukuoka (Japón).

** *Bernardo Villasanz*. Catedrático Emérito (名誉教授) de la Facultad de Humanidades. Universidad de Fukuoka (Japón).

1. 「中米およびカリブ海諸島への巡礼の道（その二）」

CAMINO DE PEREGRINACIÓN AL CARIBE Y AMÉRICA CENTRAL.

(Título en el original japonés: *Chūbei oyobi karibukai shotō e no junrei no michi*)

Por Aiko Arai : (新井 藍子).

(7) 第7日目、船は、パナマ運河へひたすら進んでいく 2月5日（火）

1) コロンブス、パナマへ航行する

クルージングの合間にパナマにおけるスペイン人の征服者の足跡をたどってみたい。1502年、コロンブスが第4回目の航海で立ち寄った所がイサベル女王への書簡で述べられている。その少し前には、スペイン人による計8遠征隊がコロンブスが第3回航海で探検したベネズエラ・パリア湾海岸へ向けて出発している。コロンブスの跡を追ったことになる。また、それらの船隊は南のブラジル方面、西のパナマ地峡方面を航海した。その内の一隊、ロドリゴ・デ・バステーダスは1501年、パナマのカリブ海沿岸のポルトベロに上陸した。

コロンブスに話を戻すと、前述したように、第4回目の航海の様子は同行した14歳になる息子エルナンドとコロンブス自身の書簡によって知ることができる。1502年5月9日、スペインのカディス港を出港したコロンブス一行は、コスタリカのリモン港に9月25日に到着している。その地に10月5日まで滞留していた。そこで、金や鉱山のある海岸の地名をインディオによって情報を得た。その一つがベラグアであった。ベラグア地方は現在のパナマ西部およびコスタリカ東部にあたる。正確な区割りは分からない。コロンブスは、この地をアジア大陸の一部と考えていたので、金を求めてさらに南の方へと下っていった。カラバロー港（エルナンドによると、パナマの西部）に着いた。そこ

では、原住民から交換で値打ちものの金の鏡を手に入れた。本土には、もっと金が大量にあるという情報をつかんだので、10月半ば過ぎにパナマのアルミランテ湾からチリキ湖を通過してカリブ海沿岸沿いに航行し、3日後には、パナマ西部のベラグア地方に着いた。そこでは、交易によって純度の高い金の鏡を十数個手に入れることができた。その後もパナマ地峡部を航行し、11月初旬にポルトベロに着いた。

ポルトベロ (Portobelo) は、イタリア語で美しい港という意味で、停泊中に命名された。やがて、この港は、新大陸の豊かな富をスペイン本国に運ぶための重要な拠点になっていく。ペルーなどからパナマ・シティに集められた金や財宝は、陸路と水路をたどってポルトベロに運ばれ、ここでガレオン船 (15 - 19 世紀に貿易船として用いられた大型帆船) に積み替えられて大西洋を横断していった。スペインからの物資や人もこの港から新大陸への一歩を踏み出したのである。パナマ地峡部における要の港町に発展した。16 世紀末には、海賊の攻撃に備えて強固な要塞、サン・ヘロニモ砦 (Fuerte San Jerónimo)、および、財宝を一時保管するための倉庫、税関が築かれて繁栄した。しかし、17 世紀末にイギリス人の海賊の攻撃を受けてポルトベロの町は 15 日間にわたって、徹底的に奪略された。この要塞は、1980 年に世界遺産に登録された。

コロンブスは、嵐のせいで、ポルトベロを出港したり、戻ったりを繰り返して、現在の港市のコロン付近 (コロンはコロンブスのスペイン語名) の入江に入ったのは、12 月半ば過ぎであった。

ポルトベロの近くにあり、パナマ運河のカリブ海側の玄関で、現在、パナマ第 2 の都市である。香港について世界第 2 の規模を誇る自由貿易港である。カリブ海に突き出た岬には、植民地時代 (1597 - 1601 年) に築かれたサン・

ロレンソ要塞が残っている。先のイギリス人の海賊に度々襲撃されている。サン・ヘロニモ要塞とともに1980年に世界遺産に登録された。

コロンブスが探し求めていたアジアの香料諸島への海（太平洋）は、今、彼がいる港の内陸奥にあったことになる。スペイン人探検家による太平洋発見は、もう少し先になる。コロンブスは、入江から出ようとしたが、またもや、悪天候のためパナマの海岸地帯を行ったり来たりを繰り返した。そして、とうとうここで、年を越す事態になり、1月3日まで停泊した。ロス・モスキートス湾（Golfo de los Mosquitos）の東側に位置するベラグアの地、イエブラ川の河口に錨を下したのは、1503年1月6日、東方の3博士の祝日であった。そのため、コロンブスは、この川をベレン（ベツレヘムのスペイン語名、キリストの生誕地）川と命名した。ボートで西方に少し進んだベラグア川の上流には、キビオ（エルナンド・コロンによると、キビオは酋長の称号）という名の集落があった。先記の金鉱に近いという情報を得ていたコロンブスは、ベラグア川での金の採取の了承を酋長に求めた。天候が回復した2月6日に、同行していた弟のバルトロメとその一行は、酋長が遣わした案内役に導かれて金鉱地帯に到着し、金を掘り出すことができた。ベラグア川を更に西へ進み、金の鏡を入手した。この後、ベレン川の河口に金鉱開発のための部落が建設された。この時点で、スペインのカディス港を出港してすでに9カ月が経ったことになる。金を採取する体制が整ったところで、コロンブスは両陛下に報告するために、弟とその一隊をここに残して、いったんスペインに帰国することにしたが、雨期が終わり、ベレン川の水かさが一挙に下がり、外海にでられなくなってしまった。1503年3月30日、キビオ（キビアン）の酋長に不穏な動きが見られたので、バルトロメが先手を打って勝負は、あっけなくついてしまったが酋長は逃亡に成功した。バルトロメは、戦果として、かなりの黄金を持ち帰った。

4月初旬、逃亡したキビオと400名以上のインディオの襲撃によって部落に残ったバルトロメ配下にいた20名の中の半数以上が死亡した。たまたま、引き返していたコロンブスは、河口に孤立したバルトロメたちを救出し、ひとまず、ここを撤退することにした。こうして、1503年4月16日、一行はベレンの地をあとにした。それとともに、おおいに期待していたベレンの金鉱は、コロンブスの手からすべり落ち、第5回航海への道も、また、閉ざされてしまった。

その後、ベレンから海岸沿いに西へ進んでポルトベロ（バル・プエルト）に入り、エルナンドによると、そこから、海岸に沿い北進し、5月10日、亀の無数にいる2島を発見、これをトルトゥーガス諸島と命名、嵐に悩まされながら、キューバの少し手前の地に到達するころには、ほんの少量の食料しか残っていなかった。コロンブスの書簡によると、「5月13日、カタヨ州（コロンブスはマルコ・ポーロの書からカタヨ州のことを知り、この地方がアジア大陸であると考えていた）と境をするマゴ州（エルナンドによると、キューバのマカカ村）に到着いたしました。そしてその地からエスパニョーラ島（コロンブスが第1回目の航海で着いた島の一つで、ここにナビダーの要塞を築いた。現在、ドミニカ、ハイティ両共和国のある島。エルナンドによると、この島の風物や樹木や魚などがエスパーニャのものに似ていたから、エスパニョーラ島となづけた）へ向けて出帆し、……」

エルナンドによると、逆風と逆潮、および船の悪条件から、エスパニョーラ島へは直航できず、ジャマイカへ向かった。そして、ジャマイカで約1年間、滞在しなければならなかった。

滞在中にベラグアの地の出来事を含めた、この第4回目の航海、すなわち、最終航海に関しての模様を書きあげたものの中に、1503年7月7日、国王に宛てて書いた書簡がある。

上記のパナマ地峡部の海岸沿いの探検は、この書簡、およびこの度の航海に

同行していた息子エルナンドの記録に基づくものである。

さて、ここらあたりで、コロンブス探検隊とお別れをして、その後、パナマ地峡に植民地支配をする別のコンキスタドールの話に移りたいと思う。

2) 初めて、南の海、すなわち太平洋を発見する

探検家およびコンキスタドールの名前は、バスコ・ヌニェス・デ・バルボアという。1513年9月に初めて太平洋を発見した。この発見により、南米大陸のインカ帝国は征服された。太平洋と大西洋につながり、南米大陸の黄金、富がスペイン本国に運ばれる陸路と水路を使った重要なルートが建設されるのである。

スペインの多数のコンキスタドールたちの中でも、重要と思われるヌニェス・デ・バルボアの足跡を少し詳しく、見ることにしたい。

1510年12月、コロンビアとの国境近くのパナマ地峡の東に植民地を創設した。これが、ヨーロッパ人によって初めてアメリカ大陸に創建されたダリエン地峡(コロンビアとパナマの国境に広がる熱帯雨林におおわれた広大な湿地帯、現在、パナマ側にはダリエン国立公園があり、世界遺産に登録されている)のサンタ・マリア (Santa María de la Antigua del Darien) 植民地である。1511年12月には、このダリエン地峡の総督および隊長に国王によって任命された。

1512年の終わりから1513年の初旬にかけてベラグアの地に到着した。その先住民の或るカシーケ(首長)と友好関係を結び、キリスト教の洗礼を受けさせた。カシーケは、この地方のスペイン人による植民と食料の供給を保証した。その代償として、まだ、アメリカ大陸では知られていなかった鉄を受け取った。その後、鉄は、先住民にとって非常に価値あるものとなっていった。この地に滞留していた時、バルボアは、初めて山脈の向こう側に大西洋とは別

の海があることを耳にした。それは、こういういきさつによるものである。バルボア配下の男たちが、この地方における金が少量しかないことで争いが始まった。それを目撃していたある地位の高い先住民が、「あなたがたは、自分たちの国を捨ててまでこのような遠いよそ者の国に来て、黄金を見つけようとしている。そのような強欲なあなたがたをいっばいの黄金で満足させるような別の場所がある」と教えてくれた。その先住民によると、「南の方に別の海がある、そこから内陸に入っていくと、食事のときの器に黄金を使っている住民がいる。しかし、その者たちに勝利するためには、少なくとも千名の人数が必要である」

スペイン人がインカ帝国についての情報を初めて得たのは、まさに、この時であった。思いもしなかった別の海の存在と黄金についての情報をバルボアは重く受けとめた。それらの発見のための準備を十分にしないとはならないと考え、国王に応援を求めたが、その頃、バルボアのスペイン人のライバルたちによる内紛状態が続いていたので、それを得ることができなかった。

1513年9月1日、バルボアは僅かな資金と190人のスペイン人を連れてサンタ・マリア植民地を出発した。そして、新世界へのルート、重要な食料、水の確保、野営地の場所などの情報を熟知している何人かの先住民をガイドに連れていくことに成功した。国王に見放されたバルボアは、熱帯雨林の秘密を隅から隅まで知っているこれらのガイドに頼るしかなかったのである。

しかし、この遠征は難儀を極めた。途中、多くの異なった部族の大人数の先住民たちと出会い、闘い、打ち負かし、その度に、何人ものカシーケたちと友好関係を結んでいった。20日には、鬱蒼としたジャングルに入ってしまった。

バルボアは、今や友人となった多数のカシーケたちの情報をたよって彼に残されたわずか67人のスペイン人と先を進んで行った。その中には、フランシスコ・ピサロ（1533年、インカ帝国の都クスコを占拠。1535年に「諸王の都」

リマ市を建設)もいた。

カリブ海沿岸からダリエン地峡を(現在の太平洋側にある)横断しているバルボアたち一行は、パナマ側にある現在、ウルカジャラ(Urrucallala)山脈と呼ばれている山の一つの麓に着いた。その時、先住民から、この山の頂上から海が見えると聞いたバルボアは、胸の高まりを抑えることができなかった。彼につき従っていた男たちに先立って昼頃には、いちばん最初に頂上に到達した。遠い水平線の向こうに今まで見たことがなかった海がぼうっと霞んで眺められた。下方には、鬱蒼とした熱帯雨林が広がっていた。1513年9月23日、こうしてバルボアは太平洋を発見したのである。従軍司祭が、ラテン語で「Te Deum laudamus- 神に祝福あれ」と叫んだ。バルボアの後に続いた男たちがそこらへんにあった石ころを集めてピラミッドを作り、樹皮に発見のしるしとして十字と国王夫妻の頭文字を剣で刻みつけていった。すぐに山から下りた探検隊は、この地域の先住民を征伐しながら、2日後に現在、ブエナビスタ海岸(Playa de Buena Vista)と呼ばれている海に到達した。

バルボアは、膝まで海につかって、右手の剣と左手のマリア様が描かれた隊旗を高々と上に掲げて、カスティーリャ国王夫妻(フアナとフェルナンド)の名によってこの場所の領有宣言をした。

バルボアは、その後、1519年に自ら発見した太平洋岸に都市を建設した。大太平洋岸に築かれた最初の植民地である。現在のパナマの首都、パナマ・シティの中心の街から北東へ約6キロの所にあるのが、そのパナマ・ビエホである。十数年後に別のスペイン人によって征服されたインカ帝国の黄金など太平洋岸で獲得された富は、ここを經由して地峡を通り、大西洋岸のポルトベロに運ばれてスペインへ送られた。これら2つの大洋がつながり、中南米諸国とスペイン本国間の多数のものの輸送をより短期間にする事ができたのも、バルボアの功績によるものである。

パナマ・ビエホ (Panamá la Vieja) は、建設当時から暫くの間、おおいに繁栄したが、1671年にイギリスの悪名高い海賊が内陸から侵攻し、炎に包まれた町は廃墟となってしまった。スペインは、その地での再建をあきらめ、この廃墟から多くの建築資材を持ち出し、現在のパナマ・シティの中心にカスコ・ビエホ (Casco Viejo) を建設する。ここには、スペイン植民地時代に繁栄した歴史あるコロニアル建築が並んでいる。スペイン様式のカテドラルや教会、国立劇場など、現在、パナマ歴史地区として知られている。2003年に世界遺産にも登録されている。ちなみに、先記の廃墟と化したパナマ・ビエホも修復や整備が進んで遺跡公園のようになり、1997年に世界遺産に登録されている。

パナマでのバルボアとは、いったんお別れして、別の地で再び会うことにしよう。まだ、パナマ運河が建設されていない1500年代、スペイン人はどうやって大西洋と太平洋間の物資や富の輸送をしたのであろうか。

3) 黄金の道、カミーノ・デ・クルセス (Camino de Cruces)

パナマ運河が開通するのは、1914年である。それ以前、太平洋と大西洋を結ぶ道として、16世紀にスペインが築いた全長10キロメートルの街道がカミーノ・デ・クルセスである。インカ帝国の黄金や太平洋岸で収奪された財宝を輸送する重要な道である。まず、それらは、当時、栄えた(先記の)植民地パナマ・ビエホに集められた。そこから、パナマ地峡がもっとも細くなる部分を通っているチャグレス川の河口あたりまで陸路で運ばれた。その陸路がこの黄金の道である。その後は、島々の間を通れる水路を船により大西洋に出て、本国スペインに運ばれた。

ロバや黒人奴隷が黄金や財宝を運んだ熱帯雨林の中にあるこのカミーノ・

デ・クルセスは16 - 18世紀間に使われたが、初期には、毒矢を持った先住民が、後には、強盗などが出没したりしてとても危険な街道であった。

現在、この道は、パナマ・シティから北西へ約15キロの所にあるソベラニア国立公園（Parque Nacional de Soberanía）内に残っている。歴史的に重要なこの旧街道の大部分は熱帯雨林の中にある。重い荷を運んだロバの足跡が残っている場所もあるそうである。まだまだ、ここを歩くハイカーは少ないようである。

4) 太平洋側のパナマ湾で停泊中

さあ、夕食のレストランへ急がなくては.....だんだん、いつものように海上には残光がきらめき始めている。まばゆい昼から夕方にかけてのいちばん厳かで、美しいはざまの時刻である。

1500年代のパナマ地峡の密林の中を探検家たちと一緒にあえぎながら分け入っていた私は、やっと2019年のパナマ湾に戻ってきた。ああ、疲れた。しかし、今回は、実際には、パナマのどこの場所にも下りなかった。スペインのコンキスタドールたちが残したたくさんの重要な足跡を辿れなかった。一時は、栄華を極めた植民地時代の都の廃墟やカミーノ・デ・クルセスをこの眼で確かめ、歩いて当時の危険を身体で感じとりたい、と願った。

楽しい夕ごはんもすませて、ロビーでジャズピアノを1時間ぐらい聴いてから船室に戻った。バルコニーに出ると、真っ暗であった。その時、気がついた。船がとまっていた。暗い海上の遠くの方のあちこちに灯りが瞬いている。まるで、以前、歩いた真っ暗なオーストラリアの山道のあちこちで光っていた蛍火のようだ。夜の10時は過ぎていた。いつ頃から船はこの場所に停泊していたのだろうか。「船がとまっているよー」と連れに声をかけて、ひとり15階の最上階のデッキに上っていった。何人かの見知った人たちによると、今、パ

ナマ湾（太平洋側にある湾）にいること、たくさんの船舶がここに集結して、明朝、パナマ運河を通過するために待機していること、などが分かった。それらの船が放つ灯りが海上にちかちかと、きらめいていた。太平洋上をこんなにも多くの船が昼間、波間を分けて進んでいたとは.....まるでパナマ湾は特別な祝祭日のようだ。こんなに光をふんだんにまき散らした船舶で賑わっているのが、日常の風景なのかと思うと、気持ちが弾んだ。後で聞いた話だと、毎日40隻を越える船が運河を越えるそうである。

(8) 第8日目 パナマ運河をとおってカリブ海へ、大西洋へ 2月6日(水)

船は、予定通り、朝8時過ぎに、しずしずと運河の入口まで進み、しばらくの間、そこにとどまっていた。右舷にパナマ・シティの近代的な高層ビルが、朝の薄もやの中に林立しているのが見えた。パナマ湾は混雑すると、何十艘もの行列で数日間、順番待ちというケースもあるらしい。

太平洋側と大西洋側を結ぶパナマ運河は、南北アメリカ大陸を結ぶパナマ地峡がもっとも細くなる部分に、1914年築かれた。パナマは、内陸に海拔26メートルの山があるので、運河を階段状につなげるロック（閘門—高低差のある水面に船を進めるため、水位を調節するための装置）式が採用された。船は、水門（水の流量を調節する門）を通り、そこで水位を調節したあと、次の水路に進む。全長80キロをおよそ9時間かけてゆっくり進む。海面と標高差のあるガトゥン湖（Gatun Lake）が造成されたのは、1907年から1913年にかけてからである。川をせきとめて出来たその人造湖を利用して運河は、高さの異なるいくつもの水路を築いた。湖水面の海拔は26メートルである。パナマ運河の全長の43,5キロメートルを占める広大な湖である。もとは、丘陵であった

島々とその間を抜ける水路があった。それは、まさに、16世紀のスペインが、南米からの黄金や財富を大西洋に運んだルートだった。

現在、山頂や尾根だった所が半島や島になって点在していて、船のデッキからの眺めは素晴らしかった。ガトゥン湖からカリブ海、大西洋へとつながっているのがチャグレス川である。スペインのコンキスタドールだちが黄金を見つけるために、命をかけて未知の土地を探検し、無事に本国スペインへ運びたいという情熱が、このようなもっとも短い輸送ルートを発見したのであろう。現在の運河とそれがおり重なって目の前に広がっている景観は、大航海時代の壮大なロマンにみちた白昼夢を見せるのに十分であった。

14階の前方には、すでに大勢の人たちが、船がロックに入る様子を見ようと群がっていた。二重にも三重にもなっている人たちの後ろについた。しかし、その人たちは、かなり早くから準備していたらしく、デッキチェアに座っているのによく前方が見える。暫くゆっくり進んでいた船が水門の前で止まってからかなりの時間が経った。それから、目の前の水門（壁の厚さ、基底部15m、頂上部3m）の鋼鉄の扉がゆっくり開き、船を水門の中へ導き入れた。船がすっぽり入ってからその扉がびったり閉じられる。船尾にいた人たちは、それを見ることができただろう。プール状になったところで水位を上げ、水が徐々にたまってくるにつれて、船ごと持ち上げられた。そして、水門の上まで水位が上がると、船はまっすぐ前方に進み始めた。目線が少し高い感じがした。俯瞰するように目の前には、青々とした運河が、左舷には、ミラフローレス湖が眺められた。青い湖が透明で美しかった。湖上には真っ白な雲がたなびいていた。しばらくの間、青々と重なり合って茂った樹木の間を航行していく。雲からも、湖からも透明な力が立ち昇るのを感じた。

10時頃には、同じように水位を上げて、次の水門に入ってしまった。水門の壁ぎりぎりを通り抜けていく。ここを過ぎると、海拔26mを維持して航行し

ていく。目の前にセンチニアル橋が見えてきた。南北アメリカを繋ぐパン・アメリカンハイウェイが通っている橋である。その橋の下をくぐり抜けて11時ころに太平洋と大西洋の分水嶺に達した。ここは、クレブラ(ゲイラード)カットと呼ばれる工法が、山を削り取って造った水路のために使われた。運河建設の最難関所である。もろい地質のせいで現在、コンクリートで補強されている。

昼少し前に、パナマを代表する河川のひとつであるチャグレス川の河口に位置するガンボアの街を右舷に眺めて、船はガトゥン湖上のキャナルを航行していく。そこから、上流に向かって間隔をおいて7つのターン(湾曲部—Turn)がある。それを次々と曲がっていく。このターンは水量を安定に保つ機能を果たしているのである。ガトゥン湖には、大小さまざまな島、半島が点々としている。樹木によって隙間なくびっしりおおわれて蒼々としている。

大西洋入口近くにある2つのロックに入り、海拔0mへと一気に水位を下げてリモン港に入ったのは、4時を過ぎていた。右舷に先記のパナマ第2の都市コロロンが見えてきた。ついに、パナマ運河のカリブ海側の玄関までやってきたのである。長い意味のある1日だったと、ふーと、深く息を吸いこんだ。デッキから船がロックに入る様子や、右舷や左舷に行っては、湖や森林、島などの景観に感嘆し続けていた1日でもあった。食事以外は立ちっぱなしだった。ああ、疲れた。でも、今までにない楽しい体験だった。

リモン港を出てカリブ海に船が滑りこんだ時は、本当に胸が高鳴った。ああ、憧れのカリブ海である。まだまだ、明るかった。おかしいが、カリブ海上を飛び交っている鳥たちにも新鮮な感じがした。風に吹かれて自由に飛翔している海鳥の後について、デッキから私も飛び立っていきたくなる。

日がすっかり沈む前の神秘的なはざまの時刻、5時半頃、次の寄港地、コロンビアに向けて、いまや、船は、名前を聞いただけで、わくわくするカリブ海を勇みよく進んでいた。

(9) 第9日目　カルタヘーナ (Cartagena) へ、コロンビア

2月7日 (木)

しのめの空には、まだ、かすかな見えるか見えないかの金いろが漂っていたが、カルタヘーナ港にだんだん近づいていく頃には、近代的な真っ白い高層ビルの上に広がっている空は、透明な明るいブルーだった。予定の入港時間の9時には、もう少し間があった。デッキを吹き抜けていく風が今日いちにちの幸せをつたえにきてくれた。

カリブ海に面した、コロンビア北部にあるポリバル州都のこの港町は、世界遺産に登録(1985年)されているだけのことはある。真っ白に統一された景観は清澄であり、海と突きぬけるような空の青のなかに優雅なたたずまいを見せている。

スペイン植民地時代のさまざまな歴史的建造物、コロニアル様式の旧市街が残っているので外国から大勢の人たちが訪れてくる観光スポットになっている。現在でも、コロンビアにおける重要な港のひとつである。

1) スペイン人のコンキスタドール、バスティーダスのコロンビア発見

正式名、カルタヘーナ デ インディアス (Cartagena de Indias) に最初に到達したのは、隣国パナマの港町、ポルトベロに1501年に上陸した探検

家バスティーダスである。初期のコロンブスの航海にも参加したという真の海の男である。それだけではなく、いつかは、自分もどこかの植民地の総督になる野望を抱いていたし、運の強い男でもあった。

先記したように、コロンブスの第3回航海後には、コロンブスが探検した跡を追ってベネズエラ、バリア湾海岸へ向けて続々と計8隻が航海している。その一団のなかにロドリゴ・デ・バスティーダスもいた。1501年、1502年にカリブ海沿岸を探検している。

1502年、コロンブス第4回目の航海時に、サント・ドミンゴ（現ドミニカ共和国）沖にコロンブス一行が停泊していた。そこから、7月1日、29隻の船隊がカスティーリャへ向けて出港した。その一隻には、パナマ地峡部を航海してきたロドリゴ・デ・バスティーダスもいた。途中、猛烈なハリケーンに襲われて、ほとんどの船は大破、もしくは沈没して、ほとんど全員500名が死亡した。それとともに両国王宛ての多額の黄金と金塊が海底に沈んだ。バスティーダスの乗っていたただ一隻だけが本国スペインに帰着した。その船に積まれていたコロンブスの財産は、無事に長男のディエゴの手に届いた。

その後、コロンブスは、当初の予定を変更してキューバの南岸から針路を南西に直してホンジュラス沖のグアナハ島に到着（7月27日）した。この急遽、予定を変更した理由に、バスティーダスの航海について何か重要な情報を入手したという見方がある。その情報によれば、バスティーダスが真珠や黄金を手に入れたベネズエラのバリア海域の西方、つまり、パナマ地峡部に別の海があるらしいというのである。どうも、コロンブスはその辺りに探し求める香料諸島（アジア）への通路があると考えたようである。この大航海時代における男たちの熾烈な闘いが垣間見えてくる。いちばん最初にどこを、何を発見するかを命をかけていた勇猛果敢な男たちの壮大な物語である。

さて、バスティーダスは、1502年、4か月間にわたってカリブ海沿岸を遠征

してコロンビアを発見した。1503年にイサベル女王の許可を得てカルタヘーナと命名された。スペイン南東部の地中海にのぞむカルタヘーナ湾に似ていたからであった。後に、このスペインのカルタヘーナと区別するためにカルタヘーナ デ インディアス (Cartagena de Indias—インディアスのカルタヘーナ) となづけたのは、この地に1533年に植民地を建設したペドロ・デ・エレディア (Pedro de Heredia) とその配下たちであった。エレディアはスペインのカルタヘーナ出身であった。

バスティーダスは、その地域に居住している戦闘的な先住民カラマリ (Kalamari) 族の強い抵抗および飲料水の不足で植民地を建設できなかった。バスティーダスは、その後、1525年にカルタヘーナから少し東方へ位置するサンタ マルタの港町に植民地を建設し、そこの総督となった。

2) スペインのコンキスタドール、ペドロ・デ・エレディアとインディオカタリーナの物語

カルタヘーナは、カルロス1世治世の下、1533年ペドロ・デ・エレディアにより建設された。港から近いポパの丘の麓には、先住民カラマリの村があった。エレディアがこの地を選んだのは、堅固な居住地区として適切だと考えられたことにもよるが、1500年以來ずっとカリブ海の南の沿岸は、スペインの入植者にとって魅力があった。この1533年には、ピサロがインカ帝国の都クスコを占拠したということもあり、カルタヘーナの港は、徐々にスペイン帝国にとって重要な基地となっていった。

当時の記録によると、この沿岸部に住んでいたカリブ族に属する先住民のカラマリの意味は「カニ-Cangrejo」だが、エレディアと入植者は、彼ら先住民を発音が似ているスペイン語のカラマル「Calamar-イカ」と呼んでいた。

2006年刊行のインディアスの文書総合版 (16世紀以降の年代記録文書にカ

タリーナについては、すでに記されている)によると、エレディアがカルタヘーナの建設に成功したのは、インディオの女のカタリーナ (Catalina) の協力があつたからだとされている。彼女は、かなめな人物なのである。

スペインの征服以前ずっと昔から、カリブ海沿岸、および内陸にはいろいろな先住民が住んでいた。モカナ (Mokana) 族は、その一つである。数多くの首長たちが、それぞれの村を治めていた。ある首長の姪に際立って愛らしい女の子がいた。すでに、その頃は、コロンブスによってバハマ諸島のグアナハニ島 (コロンブスによってサン・サルバドル島と命名される) 到達が果たされ、いわゆる新大陸が発見された。

ボリバル州のモカナ族の村落にもスペインのコンキスタドールたちがやってきて、その一人が、前述の伶俐そうな美しい瞳を持ち、どこか気品の漂っている14歳の少女をさらって、エスパニョーラ島のサント・ドミンゴ市に連れていった (1535年の村落の調査による)。幼少だったことと、もともと賢い彼女は、そこで教えられたスペインの言葉、習慣、伝統、宗教などを習得するのが速かった。そして、洗礼名カタリーナを与えられた彼女は、すらりとした美しい娘に成長していった。32歳 (1527年) の時、カリブ海の南の沿岸に戻ってきていた。そして、インディオに対するキリスト教の普及活動につとめていた。エレディアがカルタヘーナを創設するのが1533年1月なので、その6年前である。この創設にあたり、カタリーナの協力が不可欠であった。初めは、カタリーナを単に通訳として扱っていたが、やがて、コンキスタドールは、ほとんど同年代の従順で美しく成熟したカタリーナを愛人とした。コロンビアには、スペイン人とインディオの間のメスティソが多いが、それは、この時期からである。

カタリーナは、多くの異なった種族の先住民たちとスペイン人の間における和平交渉を遂行してきた。たとえば、ずっと以前、スペインのコンキスタドー

ルを戦闘で打ち負かした好戦的な現トゥルバコス族 (Turbacos) は、彼女のおかげで平定された。また、スペイン人のために黄金や財宝のありかをおしえもした。黄金の値打ちを知っていたカタリーナだが、スペイン人が持参してきたあまり価値のない鏡と交換させたりした。このような、先住民には、不利になるようなことをしてきたカタリーナの心情はどうだったのだろうか。当時の少ない文書を基に、私なりの物語を語ってみることにしよう。

エレディアは、マドリッドで富裕なスペイン人女性と結婚し、2児までもうけていたが、妻をおいて 1522 年にスペインの植民地であるサント・ドミンゴにやってきた。まだ、30 歳前だった。14 歳の時にコンキスタドールのディエゴ・デ・ニクエサ (Diego de Nicuesa) にここに連れてこられたカタリーナもまだ、コロンビアには戻っていなかった。当時、スペインの入植者や、インディオの奴隷たちで賑わっていたサント・ドミンゴ市で、エレディアはカタリーナを認識することはなかったであろう。インディアスへ渡ったスペインの入植者たちが、最初に足を踏み入れたサント・ドミンゴ市のあるエスパニョーラ島では、インディオから女性や子どもを奪って、かしくさせるのが当たり前だったからである。カタリーナもそのちのひとりだったのである。カタリーナが仕え、スペイン風教育も受けていたディエゴ・デ・ニクエサの屋敷には、大勢のひとたちが出入りしていた。黒人奴隷の売買の商人たちも来ていた。新大陸では、インディオは、重労働をするには、体力的に脆弱と思われていたので、アフリカから盛んに黒人が連れてこられるようになったのである。

眼光鋭く、瞳の奥に冷酷さをたたえている若ものにじっと見つめられてカタリーナは怖いと感じた。テーブルにワイングラスを置くと、さっとサロンから退いた。後で、その若ものに通訳者として仕えるとは思ってもみなかった。それ以降も何回か、当時、奴隷商人だったエレディアを見かけた。カタリーナがサント・ドミンゴを離れた翌年、1528 年および 1529 年にエレディアはコロン

ビアのサンタ・マルタ植民地の総督の下で中佐となっていた。いつかは、自分もこのような美しいカリブ海の南の沿岸地で総督となる野心をぎらぎらと燃やしていた。

前述のとおり、カタリーナは、エレディアとその配下の利益を常に優先してインディオとの仲介をつとめてきた。多感な少女期に生まれ育った村と両親に引き離されて遠い島に連れてこられた、可憐で賢いインディオの少女は、キリスト教の洗礼を受けてカタリーナの名前を与えられ、スペイン風の教育を受けた。マリア様の前に跪くと母のいない寂しさが慰められた。たびたび、そんなカタリーナの姿を見てきたスペイン人の主人たちは、彼女にやさしくしてくれた。カタリーナの信仰心は厚かった。島から戻ってインディオにキリスト教を広めてきたのは、強制されたからではなく、心からそれを願ったからである。

しかし、エレディアの通訳になってから、スペイン人のために働いてきたのは、恐怖心のためである。おとなしく従順な性格のカタリーナは、サント・ドミンゴでエレディアに対して抱いたあの怖いという思いを決して忘れていなかった。大多数のコンキスタドールたちは当時、征服してきたあちこちでインディオに対して乱暴にふるまっていた。その実態を子どもの頃から目の当たりにしてきたカタリーナは主人に逆らうことなど考えられなかった。

しかし、半分スペイン人になっていたカタリーナにインディオへの帰属意識を目覚めさせるようなことが起こったのは、1533年4月であった。

エレディアは、北方に黄金を探すための遠征をした。カタリーナもいつものように探検隊につき従っていた。深い森林を抜けると、開けた村にでた。

いくつかの藁でふいた丸屋根のインディオの住まいが広場を取り囲むように点々と建てられていた。カタリーナは、ふらふらと見覚えのあるひとつの小屋に向かって歩き出していた。エレディアの静止の命令も聞かずに中に入ってしまった。薄暗い中でも、どこに両親がいるのかがすぐ分かった。すっかり年老

いた母親が、まずカタリーナを抱きしめて耳元でささやいた。「娘よ、いつか帰ってくると思っていたよ。」それから、次々と家族に抱きしめられて再会のよろこびを分かちあった。この村は、カタリーナの生まれたサンバ（Zamba）であった。

家族にプレゼントされたカタリーナの黄金を見て征服者がとった行いはいつものおりである。

1537年および1538年にカタリーナは、黄金強奪の罪で総督エレディアを訴えた。

1538年には、カルタヘーナの植民地でも、王室の許可を得てレパルティメント（Repartiniento- スペイン人入植者への土地やインディオ分配授与）制とエンコミエンダ（Encomienda- 征服者たちに徴税権と労役権を与えた）制が敷かれるようになった。この制度によって、農園や鉱山でインディオは酷使され、カリブ海諸島では、16世紀前半にインディオの数は激減した。

ここは、コーヒー、砂糖、ジャガイモの農産物および石油、世界の8割を占めるエメラルド、金、銅、ニッケルなど鉱物資源が豊富な地域なのである。

現在では、花栽培も盛んでバラ、カーネーションなども輸出している。

さて、そろそろカタリーナの物語も終わりに近づいてきた。「通訳のインディオ」および「和平交渉者」という呼び名がカタリーナに2006年までの精査な研究によってつけられていた。しかし、今では、善意に解釈した「和平交渉者」とカタリーナを呼ぶことを歴史学者は批判している。なぜなら、カルタヘーナ地方に居住していた先住民カラマリ族は、当時のスペイン人によって完全に絶滅させられてしまったからである。

カルタヘーナにある「インディオ カタリーナ公園」、「カリブの海軍美術館」には、すらりとした美しい彼女の像が立てられている。そこを訪れる観光客に

は、一般的に、従順でおとなしいというイメージが与えられている先住民族のシンボルとして紹介されている。

3) 現在のカルタヘーナを見てまわる

(1) フェリペ2世の城壁

港近くにあるサン・ラサロの小高い丘の麓から要塞の遺跡が眺められた。堂々と頑丈そうな要塞であったことが分かる。頂上までは、ぎらぎらと照りつける太陽をさえぎるものが何にもない。そんな観光客目当ての物売りたちが何人もいた。ひとりの黒人男性からつばの広いパナマ帽を買った。汗をふきふき30分もかからず上に着いた。要塞をぐるっと囲んでいる高い壁を覗きこむと、カルタヘーナ港と街が遠くまで一望できた。統一のとれた白い高層ビルが雲ひとつない紺碧の空の下にりと立ち並んでいる街は、目をみはるほど美しかった。太平洋、カリブ海そして大西洋に面した百万都市である。1533年6月1日に建設されてから485年の間、都市であり続けた。眺望のきいたここからなら、敵の襲来やどんなわずかな動きでも捉えることができたにちがいない。いろいろなことを考えめぐらしながら、右から左へと視線を移していく。カリブ海が、空より碧く憂愁すらたたえてまぶしく光って動かずにいる。

植民地が出来てから、カルタヘーナ港は、重要な港となっていく。スペインの巨大なインディアス事業を遂行するため海上ルートをたどって、このカルタヘーナから王室所有の巨額な財宝が、本国スペインの東のカルタヘーナ、カディス、セビーリヤの港へ送られていった。同時に、アフリカ大陸から連れてこられた黒人の奴隷商売の最大の拠点地となっていく。前述のカルタヘーナの建設者及び総督だったエレディアがサント・ドミンゴからカルタヘーナへ奴隷商売を移したことになる。カルタヘーナはアフリカ大陸により近くなったの

である。スペインの莫大な財宝を狙ってヨーロッパの各地から、ぞくぞくと海賊たちが集まってきたのは、当然のなりゆきだった。こうして、カルタヘーナは、スペイン植民地時代の全盛期における南米およびカリブ海における最も堅固な要塞都市へと変貌するのも当然のなりゆきだった。

カリブの海賊たち、およびオランダ、フランス、イギリスの敵軍は、カルタヘーナ港からスペイン本国へ送られる財宝の略奪に奔走した。港は、これらの攻撃によく耐えたが、ここに、ハプスブルグ朝のフェリペ2世（1556 - 1598年）の命令によって、スペイン人兵士とともにアフリカから連れてこられた黒人奴隷たちにより、1536年、城壁建設が始まった。レンガと岩石による城壁の建設には、多くの犠牲者をだした。スペインの最盛期、1656年には、当時のカルタヘーナ総督（Francisco de Murga）の提唱により、翌年1657年、強大なスペイン帝国を象徴する難攻不落の要塞へと再建された。そして、17、18世紀フランス、特に、確執の深いイギリスから何度も攻撃を受け、その度に、再建せざるをえなかった。

要塞は、1697年のフランスの攻撃、1741年の英国から送られた大船団（2万7000人の兵士、186の軍艦、2000の大砲）に対して、大きな効力を発揮し防御につとめた。スペイン側は、わずか3600人の兵士、6軍艦しかなかった。イギリスの指揮官が港から退却していく時、スペインのレソ（Lezo）指揮官に「このくそつたれ野郎」と叫んだのに対して、レソ指揮官がただちに「カルタヘーナへ来るには、英国王はもっと大きな軍艦を造る必要があるな、今の軍艦は、残念ながら、アイルランドからロンドンへ石炭を運ぶ船になってしまったからな」と応酬した、という逸話が残っている。最終的には、63の大砲が据えつけられた。外壁を囲む巨大な岩石は、敵の猛攻撃を効果的に阻止するために、精密な計算によって斜めに積み重ねられた。1798年に完全に再建を終えるまでに王室の巨額の黄金がつかわれたという。しかし、それ以前に財政的

にも疲弊していたスペイン帝国は、オランダ、ナポリ、シチリアなどを失って凋落が始まっていた。

現在は、フェリペ2世の城はなく、当時の栄光を物語るように、幾つかの大砲が残されている要塞の遺跡でしかない。真下に見える強い南国の太陽にさらされてまばゆいばかりの美しい様相のカルタヘーナは、白昼夢で見ている幻のようであった。度重なる激しい攻撃から復活した奇跡の街でもあった。

(2) カルタヘーナ旧市街を散策する

旧市街は、今まで訪れた街と同じようにスペインのコロニアル風な建築物があちこちに見られた。しかし、この街には、より洗練された美しさがあった。

白い壁に黄色のバルコニーをつけたり、茶色の壁に窓枠を赤や緑に塗装した家などが整然と並んでいる景観は観光客の眼を引いた。また、アフリカ大陸から連れてこられた黒人の子孫であろうか、真っ黒い肌をした物売りの豊満な女たちがカラフルな衣装に身をつつみ、熱帯の果物でいっぱい深皿を頭の上のせて行ったり来たりしているのを見るのは、ここが初めてだった。時々、笑顔を見せて両手で裾長のスカートを広げては、人を引きつけている。女たちの前には、しっとりと落ち着いたレンガ色の建物があり、1階の小さな入口の上に、ハード ロック カフェという文字が並んでいる。世界中のあちこちにあるカフェだが、さすがに、このカフェは、街にじっくり溶け込んだエレガントな建築である。カルタヘーナの旧市街全体が統一された美しさで作られていることが分かる。

女の物売りの横には、黒人の男性が両腕に十数個のパナマ帽をかかえて傍をとおる過ぎる観光客に声をかける。その横には、大きな台に立つコロンプス像がある。台も像も真っ白な大理石で造られている。紺碧の空の下にりと輝いている。奇異な思いにとらわれた。中米では、コロンプス像はなかったような

気がする。インディアス事業を興して、その後の中南米諸国征服の発端を切ったのがコロンブスなのに。先記のコロンビアの歴史を見ても、また、ラス・カサスの次の言葉「カルタヘーナ地方は.....1498年か1499年から今日に至るまで(16世紀半ば頃)ずっと奴隷売買の対象となり、苦しめられ、殺され、また、その土地も荒らされ、破壊されつくした。」を読んでも、こんなコロンブス像があっただけなのかと、.....コロンビアの宗主国だったスペインでは、コロンブスの像が撤去されているというのに.....スペイン北東部にあるバルセロナの美しい広々とした海岸を訪れる度に、コロンブス像を憧憬の眼差しで眺めていたものである。大きな台座に立って大西洋に向かって片腕を伸ばしているコロンブス像を下から仰ぎ見ると、まだ、子どもの頃に抱いていたわくわく感を抑えることが出来ないのは、おとなになった今でも少しも変わっていなかった。あの像はあの頃から撤去されると言われていた。

今回、ずっと被征服者たちがたどってきた悲惨な歴史を勉強してきたのに、今、コロンブス像を前にしたら、ああ、なつかしい、ここにコロンブスがいた、という思いに自然にひたされつつ、何枚も写真を撮っていた。マルモルの像は威風堂々としていた。逆さにした大きな錨に左手をかけている。すぐに分かった。カルタヘーナの港は、スペインがインカ帝国を滅ぼして以来、世界の海を制したスペイン帝国の最も重要な投錨地として発達したのである。まさに、その錨である。右の手のひらを広げているコロンブスの前には、豊かな乳房をさらしたインディオの女が膝を曲げて座っている。インディオの征服を意味しているのだろうか、少し胸が痛んだ。正面の台座の上部には、北米、中米、カリブ海の島々そして南米の地図が彫られ、その下には、「カスティーリャ(スペイン王国の一つ) およびレオン(同前)へ、新世界を与えたコロンブス」という文字が彫られている。下部には、もっと大きな文字、カルタヘーナの異名のひとつ、「グラン(偉大なる)カルタヘーナへ」が彫られている。ぐるっと台座を回ると、側面の上部には、コロンブスが率いてきたカラベル船および

航行してきた海原の絵、「ラ・ニーニャー号—LA NIÑA」の文字などが美しく彫られている。これは、精密な彫刻による芸術品であるという印象を受けた。制作した人たちのコロンブスに対する畏敬の念すら感じられた。そうだ、この像のすぐ横で満面の笑みをたたえてパナマ帽を売っている黒人男性に聞いてみよう、「オーラ、コロンブスいいね」と、スペイン語で声をかけると、「イエス、ヴェリ グッド」と英語で答える。「コロンブス好き？」と再び聞く私に「イエス、イエス」と言いながら、さっさと行ってしまった。

散策を続けていくと、真っ白い壁にブルーの日よけのコントラストが美しいホテルの前に置かれている像に出会った。なんと、ペドロ・デ・エレディアと名前が彫られている。さっきの立派なマルモルのコロンブス像とは違い、銅像である。エレディアは、コンキスタドールの衣装を身につけて立っている。台座もさきほどよりかなり小さい。一部マルモルがつかわれている。その下部には、「偉大なインディアスのカルタヘーナの建設者」という文字が彫られている。上部には、鉄によって製作されたスペイン国王の紋章が嵌めこまれている。紋章の中には、裸のインディオの女が見える。確かに、エレディアはカルタヘーナの建設者ではあるが、奴隷売買を推進してきた商人でもある。

今や、ここ、カルタヘーナはすっかり観光都市になってしまったのだ、という強い思いにとらわれた。カルタヘーナの特徴を端的に言い表す異名「偉大な都市、城壁に囲まれた都市、アメリカのロマンティックな都」が観光客を世界中から呼びよせているのだろう。

サン・ペドロ・クラベル (San Pedro Claver - 1580 - 1654) 広場は、近くにあった。ここには、同名のカトリック教会がある。奴隷解放のために尽力したスペイン人の聖職者の名前である。

1610年に、まだ若かったクラベル神父は、苦しんでいる大勢の奴隷たちの魂を救うためにインディアスのカルタヘーナに渡った。ここは、およそ百年が経った当時でも、新大陸における主要な黒人売買の市場であった。毎月、アフ

リカ大陸からおよそ千人の奴隷たちが連れてこられた。やがて、クラベル神父は黒人奴隷に奉仕する誓願を自身にしっかり立てた。そして、全魂をこめた奉仕は、33年間続くことになる。奴隷売買の廃止のために奔走し、彼らに並々ならぬ愛情と労力をそそいだ。カルタヘーナ港に奴隷船が着くやいなや、それに乗こみ吐き気をもよおす地獄の船倉に走っていった。持てるかぎりの食べ物を上げ、病人を治療した。また、死にかかっている者たちをやさしくかいな抱き、耳元で心地よい歌うような声で、安心するようにと、イエスの受難と神さま、および天国の話をしてから、洗礼を授け天国におくりだした。生涯で30万人以上の者たちが神父から洗礼を授けられた。

船倉の中で洗礼を授けられ回復した者たちも大勢いた。その者たちが働かされている農場まで出かけては、彼らを勇気づけ、真のキリスト教徒のように生きるように鼓舞した。また、農場主に対しては、彼らを人道的に扱おうようにと諭した。こうして、常に、彼ら奴隷と主人の間の仲介者としての労を惜しみなく取りつづけた。この奴隷商売で栄えていたカルタヘーナであらゆる人種が、平等であることを説き、活動してきたクラベル神父は、死後、2百年以上経った1888年に聖人の列に加えられた。

サン・ペドロ・クラベル教会の正面入口の上には、左手に十字架を掲げたクラベル神父の像が据えられている。シンプルで素朴なレンガで造られている教会は、生涯を黒人奴隷に捧げた神父にふさわしかった。上部にあるバラ窓から午後の光が柔らかく差し込んでいる教会の中は、ほの暗かった。中央祭壇の前の信者席に座って、しばらくの間、こうべを垂れて神父様の奴隷に対する真のミゼリコルディアに思いを馳せた。少しずつ、明るい気持ちになってきた。こういう神父様がひとりでもおられたことに、ほんの少し、救われた思いがした。

今まで書き記してきたのは、コンキスタドールを始めとするスペイン人たちのインディアスへの遠征探検と征服、それに伴う無法で非人道的な行為ばかりであった。今までも、早い時期に、すでにラス・カサスや彼と同時代の聖職者

たちが、インディオの窮状と救済、奴隷化の廃止を国王に訴え、実情を報告してきた。1543年7月、前年に制定された全40条から成る植民法に6箇条が捕捉され、「新法」が公布された。インディオの奴隷化禁止、インディオの強制労働の禁止など、インディオの保護と正しい統治を目指して制定された。それ以降、インディアス各地でこの「新法」反対運動が激化することになるが、一方で、アフリカ大陸からの黒人奴隷獲得が加速されるようになった。

教会を出ると、隣接した右手に「記念館、サン・ペドロ・クラベル礼拝堂」の小さな入口がある。何人かの人たちが出入りしている。たぶん、先記した神父様の活動が展示物といっしょに紹介されているのであろう。カルタヘーナを訪れる多くの人に知ってもらえるのはうれしい。港に向かう時間が迫っているので、残念だが通りすぎることにした。そんなに遠くない広場にクラベル神父と黒人奴隷の記念像があった。両者はほとんど同じ背丈であり、頭も同じようにアフリカ人の典型的な髪を短く刈った形である。時の流れを感じさせる両者の真っ黒な銅像の違いといえば、黒人奴隷は、下部に布きれを覆っているだけの頑丈そうな若もので裸足である。神父の方は、あまり若くない。ゆったりした当時のイエズス会の衣をまとい、首からキリスト磔刑の十字架をかけている。粗末な靴を履いている。神父の左手は、軽く若ものの背中に当てられ、首を少し傾けて目を見つめて何かを語りかけている。若ものは、口をあけて答えている。神父は、当時、スペイン語の言い回しによると「どれいたちの中のどれい—*Esclavo de los Esclavos*」と呼ばれていた。農場で彼らと一緒に農作業をしていた証のように、真っ黒に日焼けしているし、若もののどれいの手と同じように、ごつごつした手をしている。実にリアルな像で神父の「スペイン人も黒人も平等な人種である」という思想がひしひしと観るものに伝わってくる。

再生した新しいカルタヘーナを表す重要な記念像がある。前述したフェリペ2世の城壁を下りてから、旧市街へ向かう広場に据えられている輝くばかりに

美しい堂々とした大きな像で、かなり遠くからでも人目を引き、自然にそこへすい寄せられていってしまう。1911年、カルタヘーナ独立百周年を記念して、フェリペ・モラティーリャ (Felipe Moratilla) の巧みな技によって成った像である。真っ白いカララ (イタリア北西部の大理石産出の有名な町) 大理石の正面の台座には、ラテン語で「私に触るな—NOLI ME TANGERE, (Touch Me Not)」と刻まれている。「カルタヘーナは常に、自由を守るために立ち上がる」という意味である。

文字の上の立像はカルタヘーナを象徴する美しい若い女性が、髪を長くたなびかせて右腕を上方へ掲げている。1811年、カルタヘーナは独立を宣言した。その時に採用された新しい紋章に女性の左手がのせられている。楕円形の紋章のわくには、「インディアスのカルタヘーナ ステイト—INDIAS DE CARTAGENA DE ESTADO」と刻まれている。「カルタヘーナは、自治権のある独立都市である」と、表明しているのである。紋章には、次のような図柄が彫られている。インディオの女が座り、右手は、ムクドリがついばんでいるザクロの実を持っている。左手に持っているのは、くだかれた鎖である。奥には、ポパの丘、カリブ海の青い空と海、ヤシの木が見える。これらの模様は、全て新しいカルタヘーナを意味している。

ここで、少し説明が必要なのは、「ザクロの実」であろう。ここでは、スペイン語「グラナダー granada」は、「ザクロの実」の意味であるが、同音異義の「グラナダー Granada」がある。これは、「スペイン南部のアンダルシアの県都」を指す。あの有名なアランプラ (Alhambra) 宮殿のある町である。

1539年、大勢のスペイン人のコンキスタドールたちが、サンタ・マルタ (コロンビア、次の寄港地)、およびカルタヘーナの背後の内陸をずっと入ったところに豊穡な素晴らしい地方がいくつもあるのを発見した。そこには、インディオが大勢暮らしており、金やエメラルドが無尽蔵にあった。征服者たちはそれらの地方を「新グラナダ王国」と名付けた。それは、誰よりも先にその土

地に足を踏み入れたゴンサロ・ヒメネス・デ・ケサーダ (Gonzalo Jiménez de Quesada. 1509-1579 年) が、スペインのグラナダ王国の出身者だったからである。いつものように、この新グラナダ王国で強奪が始まり、またたく間に豊穡な土地が荒廃させられてしまった。

上記の新しい紋章の「グラナダ-ザクロの実」は、他国からの完全な独立を高らかに宣言しているのである。「先住民の女」は、自由なアメリカ、自主的市民を意味し、また、足の鎖、つまり、スペインの支配から最終的に解き放たれたことを表している。

「ポパの丘」は、カルタヘーナの代表的なシンボルのひとつである。今回の見学場所でもある。148 メートルの小高い丘の上には、修道院がある。16 世紀末に建設が始まった。地上、海上、および上空の遠くからでも真っ白な修道院が見えるところから、「ガレー船のポパ」(ガレー船一帆船と櫂で進む大型船、ポパー船の艦の意味なので、ガレー船の艦) とよばれてきた。現在のカルタヘーナでは、2月2日、聖母マリアの潔めの祝日ほど賑わっているところはないという。大勢の市民たちがこのポパの礼拝堂から街の中心地まで厳粛に歩いていくらしい。コロンビア人の大多数は、カトリック教徒である。私がここを訪れたほんの数日前に潔めの行列は終わっていた。

先ほどの大理石像には、旧紋章も刻まれている。若い女性像を支える台座の上部にある。1574 年 12 月 23 日と彫られている軍章である。フェリペ 2 世がカルタヘーナへ授けたもので、スペインにとって、当時、カルタヘーナが重要な軍事拠点であったことを意味する。図柄は、後ろ足で立つ 2 頭のライオンが前足で十字架を支えている。十字架の上には、王冠がのせられている。この軍章は、スペイン共和国 (王冠) を支えて勇敢なカルタヘーナの市民たち (ライオン) が、土地を盗もうとする外国の海賊たちや無法者と戦ってきたことを意味する。1574 年 12 月 23 日以来、カルタヘーナの全ての公式行事に用いられてきた。植民地時代のカルタヘーナを表しているコロニアルの軍章として知ら

れている。現在のカルタヘーナの市民たちが、1911年以來、植民地時代のスペインの軍章を異議を唱えずに受け入れているならば、少し違和感を覚える私だが、歴史を忘れないためには、残しておいてもよいのかもしれない。

台座の下部には、大きな文字「グラン カルタヘーナへ、1811 - 1911年、彼らの娘たち」と刻まれている。1811年は、カルタヘーナがスペインから独立宣言をした年である。1911年は、すでに述べたようにその百周年記念の年である。南米独立運動の「解放者-Libertador、シモン・ボリバル」については、次の寄港地サンタ・マルタで述べることにする。

今日も長い1日であった。カルタヘーナに着く前には、こんなに重い歴史がいっぱいつまった港市だとは想像が及ばなかった。実に、よく考えて造られた街である。上記に5つの彫像を詳細に説明してきたのは、理由がある。彫像だけを仔細に眺めれば、カルタヘーナがたどってきた歴史が分かってしまうのである。この他にも、まだまだ、説明してこなかった彫像がいくつもある。選んだ像は、いずれもスペイン植民地時代に関連があるものばかりである。

どこの国でも、どこの街でも彫像が数多く立てられているが、それらには、そこに住んでいた市民の熱い思い、良きにつけ、悪しきにつけ、忘れてはならないという深い思いが込められているのだと、感じた。

カルタヘーナよ、さようなら。6時ころ、船はサンタ・マルタへ向かって出港した。船尾からは、今まで散策していた街の、今や黒い影になった高層ビルの後ろに、金いろにふちどられた白い巨きな玉が眺められた。その周囲はピンクとオレンジ色に染められて何とも表現しようのない美しさだった。息をのむほどの黄昏。夜の時間へと移行する神が与えてくれたいつときの時間。もう、まもなく辺りは暗くなるのだろう。1日でもっとも神秘的な時間は、どうしてこんなに短いのだろう。

カルタヘーナ港に今から入るのだろうか。外国籍の船とすれ違った。さっき

より、黄いろの火の玉は下方にあるが、高層ビルの後ろにまだ、まだ、神々しい美しい姿をさらし、おしげもなく、辺りいぢめんに薄紫の光をおくっている。

(10) 第 10 日目 サンタ・マルタ (Santa Marta) へ、コロンビア

2月8日 (金)

コロンビアの最も古い都市、サンタ・マルタへ入港したのは、まだ、朝8時前だった。前方のデッキからは、広い白浜が長々と伸びているのが一望できた。港街はカルタヘーナよりは、高層ビルが少なかったが、そのすぐ後ろには、高い山脈が白浜に沿って長く伸びていた。また、街も山と海に挟まれて長く伸びていた。

今日も、今までのように長い1日になりそうだった。シモン・ボリバルが最後の17日間を過ごしたスペイン人の別荘やサンタ・マルタの歴史がいっぱいつまった旧コロニアル地区、先住民族のタイロナが作製した洗練された金細工などが展示されている黄金美術館、コロンビアで最も古い真っ白なカテドラルなどを訪れることになっている。そして、運がよければ現地の人と話しがしてみたい。

1) サンタ・マルタ建設者、ロドリゴ・デ・バスティーダス (Rodrigo de Bastidas)

すでに、何回もこのベテランコンキスタドールの遠征探検について述べてきた。スペインのセビーリャ生まれ (1460年)、キューバで死亡 (1527年)。

先記のとおり、1493年に、コロンブスのインディアスへの第2回目航海に

参加した。1501年には、現在のパナマ、コロンビア沿岸の一部を遠征してきた。1500年6月に、スペイン王室から、コロンブスおよび他の航海者たちがまだ足を踏み入っていない島々や大陸を発見するための許可を与えられたからである。1501年には、先記の太平洋を発見した、まだ若かったバスコ・ヌニェス・デ・バルボア（Vasco Núñez de Balboa）と航海を一緒にした。

その後、現在のベネズエラ沿岸を踏査し、サンタ・マルタ、カルタヘーナなどの入り江、マグダレーナ川、ウラバ湾、パナマ沿岸を発見した。

1525年、サンタ・マルタ市を建設するにいたった。この都市は、現在でも存続しているアメリカ大陸にある都市のひとつである。サンタ・マルタ地方およびその周辺部は黄金の埋蔵量が多く、インディオは、莫大な量の黄金を所有していた。そして、その黄金を採取する術を身につけていた。バスティーダス一行もその金鉱を発見した。その財宝の取り分をめぐる、彼らスペイン人の間に争いが起こった。バスティーダスは共謀した部下たちの襲撃を受け、エスパニョーラ島に戻ろうとしたが、1527年7月、キューバのサンティアゴ市で死亡した。

その後、ラス・カサスによると、「1529年から今日（1542年）に至るまでの間に、彼らは、他の地方と同様、かつて大勢の人びとがひしめき合って暮らしていた400レグア（1レグアーおよそ5、6キロメートル）以上にも及ぶあの広大無辺なサンタ・マルタ地方を荒廃させてしまった。」

事実、バスティーダス一行の到着以来、サンタ・マルタの先住民族の80%が消滅し、20%が奥深い山々に逃げ込んだ。

2) シモン・ボリバル（Simón Bolívar）の生涯

まず、バスが向かったのは、サン・ペドロ・アレハンドリーノ（San Pedro Alejandrino）別荘である。1608年に建設された。初代の所有者がスペインの

カディスから聖ペドロ・アレハンドリーノの像をここの礼拝堂に持ってきたことにより別荘が聖人の名前になっている。「南米独立の父」と称えられたポリバルが死亡するまでの最後の17日間を過ごした場所である。1830年当時、病人のポリバルを迎えてくれたのは、スペイン人のサトウキビの大農園（アシエンダー Hacienda）所有者であった。当時のラテンアメリカでは、こういうアシエンダの所有者が多く、インディオや黒人奴隷を労働力に使用していた。わざわざ、ポリバルが17日間、滞在したことにより、別荘の名前が後世にまで残っている。

現在は、広大な庭園が当時の大農園の面影を偲ばせている。その中にポリバル記念館がある。

車窓からは、熱帯の緑の丘と樹木が続き、人の住まいらしい小さな小屋が点々としている。人の姿は見えない。広大な、コーヒー畑、バナナ畑、サトウキビ畑を眺めて、ああ、コロンビアは黄金、エメラルドなどの鉱物だけでなく、豊かな農産物の産地でもあるのだなという思いを強くした。今回のクルージング船の中に、コロンビア出身の乗務員がいた。時々、話しをして親しくなった彼に、スペイン人の連れが、過去にスペイン人がしたことを謝っていたが、全く屈託なげで、スペイン語が話せる客ということで前より親しくなりました。コロンビア産のコーヒーをお土産用につよく勧められた。今まで訪れてきた中南米諸国のラテン系の人、はどうしてこんなに明るく、屈託がないのだろうか、しばしば頭を傾がせてきた。船の乗務員たちはラテン系が多かった。デッキや、食堂でスペイン語でおおいに会話が盛り上がった。スペイン人に対する遺恨など微塵も感じられなかった。

コロンビアでは、その他にも、トウモロコシ、アーモンド、マンゴー、パイナップルなどを生産しているよ、大きなフルーツカンパニーもたくさんあるよ、と乗務員のコロンビア人が誇らしげに語っていた。

あつと言う間に着いてしまった。中心地から4キロと近いので、サンタ・マルタを訪れる人たちは、たいていここに来る。広大な青々とした芝生を敷きつめた庭園の中の散策用の小路を歩いて行く。芝生には、イグアナがのんびりと日向ぼっこをしている。ヤシやタマリンド、バニヤンなど、何百年もの時を経た背の高い大木があちこちに植えられて、太陽が暑い南国の光線を送ってくるのをさえぎってくれる。いちだんと濃い緑に繁茂した樹木の下に大理石のボリバル記念像が立っている。長靴と軍服の上に長いマントを身に着け、サーベルに左手をかけたたりしい立姿である。育ちの良い貴公子の美しさで樹葉から射す光の中で輝やいている。この別荘で1830年12月17日死亡、まだ、47歳であった。

ボリバルは、現在のベネズエラ、カラカスのアメリカ大陸屈指のクリオーリョ（中南米生まれのスペイン人）の名家に1783年に生まれ、生涯をラテンアメリカの解放と統一に捧げた。ラテンアメリカでは、現在でも人気が高く、南米諸国の空港や広場など、多くの場所でボリバルの名前がつけられ、記念像が立てられている。ベネズエラの正式な国名は、ベネズエラ・ボリバル共和国である。また、1825年に独立したボリビア国の名前は、シモン・ボリバルにちなんで命名された。

16歳で修学のため、ヨーロッパを旅行している。そして、フランス啓蒙思想や自由主義思想に親しむようになった。1806年に、ベネズエラ出身の元スペイン軍人フランシスコ・デ・ミランダがベネズエラ解放のための戦争を始めると、ボリバルはこれに興味を抱き、1807年にベネズエラに帰国した。ミランダとボリバルが独立運動を指揮し、1813年にカラカス市参事会から「解放者」（リベルタドール El Libertador）の称号を贈られ、独立軍の最高司令官に就任した。祖国ベネズエラをはじめ、コロンビア、エクアドル、ペルー、ボリビアからスペイン軍を駆逐して、南米5カ国の完全独立に貢献した。ベネズエラ

とコロンビアとエクアドルからなるグランコロンビア（大コロンビア）という連合国家を樹立したが、ボリバルの構想した相互防衛の枠組みは成立しなかった。後にこれら3地域の路線対立が激化するようになった。また、グランコロンビアのベネズエラとコロンビアの間で内乱が起こった。ボリバルは、あくまでグランコロンビアというラテンアメリカ連合の維持を理想としたが、反対派によってそのもくろみは外れてしまった。

1830年に入ると、ベネズエラが正式に完全分離独立を宣言し、エクアドルもそれに続いた。ボリバルは自身の政治的な役割の終焉を悟り、全ての地位を放棄してヨーロッパへ向かうことを決意した。サンタ・マルタまで来たところでボリバルは病が悪化し、ヨーロッパ行きを取りやめた。先記のスペイン人の邸宅で療養生活をしていましたが、同年12月17日に死去した。ボリバルのラテンアメリカ統合の夢は実現されなかった。

それだけではなく、ボリバルが、革命の理念および奴隷解放や土地の再配分、先住民への土地の返還などの、理想主義的な政策を提唱して、有言実行を貫いたことにより、自らの奴隷を解放し、農園や鉱山を売却し、私財のほぼ全てを投じて解放戦争を続けたために、死の直前には、財産はほとんど何も残っていなかった。植民地時代には、アメリカ大陸でも有数の大富豪だったボリバル家は完全に没落した。

その一方で、ベネズエラやペルー、エクアドルのかつてのボリバルの部下だった将軍たちの多くが、ボリバルを裏切り、解放戦争によって得た権力で私財を蓄え、各国の寡頭支配層を形成した。こうして、大農場や大牧場で働く小作人や牛飼いななどの社会の底辺の人々は、政治改革や社会改革から取り残されてしまった。現在にいたるまで、ラテンアメリカ諸国の貧富の差は大きい。

記念館では、ボリバルが短期間の滞在中に使っていた書斎、寝室、浴室などを見て回ることが出来る。それらの場所に置いてある家具、調度品は洗練され

た上等なものばかりであった。最後の日々を過ごすにふさわしい落ちついた壁の色がそれらの品々によくマッチしていた。ポリバルに平和な心持ちで日々を過ごしてもらいたい、というこの別荘の主人のいたわりが、隅々までいきとどいているのが感じられた。ここにきて、ポリバルは初めてやすらぎを得たのだろうか。本当に、ポリバルは平安な気持ちで日々を送っていたのだろうか。財産も、同じ理想の下に一緒に戦ってきた友も部下たちも、何もかも失ってしまった今、何を考えていたのだろうか。礼拝堂の隣にある一室には、臉を閉じて横たわっている大理石製のポリバルがいた。鼻筋がとおっている端正な気品にみちた若い青年の表情は、静謐なやすらぎをたたえていた。少なくとも、最後の時間は、彼を敬愛する人々に囲まれて、平安な気持ちで天国へ旅だったのだろう、と思わせる表情をしていた。

部屋を出た廊下には、何枚かの銘板が壁にある。その1枚の下方にシモン・ポリバル、12月10日とある。亡くなる7日前の日付である。リベルタドールの最後の声明文だった。読んでいくうちにふいと胸がつかれた。コロンビア人よ、と呼びかけている声明文は、最後までグランコロンビア、ラテンアメリカ連合の維持を理想としていたポリバルの気持ちがいっぱいだった。すでに、この時点では、見果てぬ夢だったことが明らかだったのに、まだ、その希望を最後の最後まで捨てきれなかったのだ。ここに、その全文を訳してみよう、

「解放者の最後の声明

コロンビア人よ！

あなた方は、以前、専制政治がおこなわれていたところで、自由を獲得しようと、私が努力してきたことを目の当たりにしてきました。私は財産、更に平安を捨てて私利私欲のためではなく働いてきました。あなた方が、私のそのような気前のよさに疑いを抱いているという確信を持った時、指揮をとることを辞めました。私の敵は、あなた方の誤解を利用しました。そして、私にとって、もっとも神聖なものを踏みにじってしまったのです：私の名誉、自由への

愛を。私は、墓場の入口まで追跡してきた者たちの犠牲者になりました。

私はあなた方を許します。

私があなた方の間に存在していることが消えてなくなる今、あなた方に対する親愛の情が、最後の願いをしなければなりません。私はコロンビアが団結する喜びしか求めません。全ての人が、連帯という計り知れない価値のために力を尽くさなければなりません：国民は、無秩序から解放されるために、現政府に従うこと、礼拝堂のしもべたちは、天国への祈りの言葉を捧げること、軍人たちは、社会保証を守るために刀を使うこと。

コロンビア人よ！

祖国の幸福のために、最後のお祈りを申し上げます。私の死が分裂を終わらせ、連合の強化に貢献するならば、墓場に安らかな気持ちで下りるでしょう。」
シモン・ボリバル

サン・ペドロ アシエンダ

1830年12月10日

上記の声明文は、すでに、死を予感していたボリバルによるコロンビア人だけではなく、全てのラテンアメリカ国民に対する遺言書であると理解したい。

サン・ペドロ アシエンダに到着以来、病人のボリバルに付き添っていたフランス人主治医によると、死の床でボリバルは、次の言葉「世界の大たわけ者は、キリストとドン・キホーテ、そして、この私だ」(Los grandes majaderos del mundo hemos sido Jesucristo, Don Quijote y Yo)を残している。

ボリバルは真のキリスト教徒であり、生涯をとおしての愛読書は「ドン・キホーテ」と言われているので、この別荘での最後の日々を聖書とドン・キホーテを読んで過ごしていたと、容易に推察される。キリストとドン・キホーテの生涯を自身の生涯になぞらえていたのだらう。キリストは愛をおしえ、善行のみを施してきたのに、最後に12使徒のひとりだったユダに裏切られ、十字架

につけられた。キホーテは、意図した正義や善行がことごとく裏目にて、報われなかった。その代名詞として、「ドン・キホーテ」が出版されてから4世紀以上にわたって世界中で「私は、或いは、彼はドン・キホーテである」と、使われている。それほど、数々のユーモアに満ちたエピソードの中のラ・マンチャの騎士は、世間の人々に固定観念として根づいている。それだけではなく、今日まで愛されている理由は、ひとえに、ドン・キホーテの高潔さ、厚い信念、深い知性と底なしの善良さであろう。そして、それは、南米諸国で現在にいたるまで敬愛されているボリバルの徳性と相通じるものがある。

ここに連れてきてくれたバスの運転手に、サン・ペドロ・アレハンドリーノ別荘は、ボリバルのおかげで観光スポットになってしまったのね、と問いかけると、もちろん、そうでなければ、誰もここには来ないよ、と眼を輝かせて熱っぽく別荘について語ってくれる。19世紀末には、1830年当時のアシエンダ風に修復されて国立歴史建造物として認可され、現代美術ボリバル記念館基金によって運営されている。1975年には、サンタ・マルタ市建設450年を祝う式典がここで開催され、コロンビアとベネズエラの大統領がそろって参加した。その時の銘板が、ボリバル最後の声明の銘板の近くにある；

「名誉あるこの場所で サンタ・マルタ建設450年に

アルフォンソ・ロベス・ミッチェルセン コロンビア大統領

(ALFONSO LÓPEZ MICHELSEN)

カルロス・アンドレス・ペレス ベネズエラ大統領

(CARLOS ANDRÉS PÉREZ)

および

オマール・トリホス パナマ首相

(OMAR TORRIJOS)

臣下としての敬意を表す

解放者 シモン・ボリバルを偲んで
サン・ペドロ・アレハンドリーノ別荘

1975年7月29日

ボリバルは、墓石の下で顔をしかめていたのではないだろうか。彼の理想とする社会改革には、ほど遠い政治がこれらの国々で行われていた。祖国ベネズエラでは、大土地所有者などの少数特権階層が、貧困層8割を牛耳っていた。

今でも、独立からおよそ200年近くになるが、ますます、一般市民は混乱を極めているのが現状である。コロンビアでも同様である。ヨーロッパ系のメスティソが大多数を占め、カトリックが95%以上に対して、少数の先住民が未だに、コロンブス到着前の生活をしている。2019年6月のレポートによると、ジェノサイドが行われているという。都会から離れ小さな村落に居住しているナサ(NASA)という先住民に対してである。また、現ブラジル、コロンビアのアマゾン地域が今、破壊の危機に見舞われている。2019年6月のレポートで、ブラジルのボルソナ大統領は「先住民保護区などもう必要ない」と宣言して、アマゾンの森林の伐採を始めている。それに対して先住民の長老アウヤトさんは「森は命の源です。家であり安らぎの地であり、食料を与えてくれる存在でもあります」と訴えている。保護地区の先住民への襲撃が始まっている。もう一人の長老アウグスト・ミラーニャさんの「森林を伐採しようという人が勢いづき、力を増している」「私たち先住民はその昔、虐殺され、奴隷にされました」という発言はとても深刻であり、胸に訴えかけてくる。地球温暖化を懸念している研究者によると、これは先住民の問題だけではなく、地球全体に影響を及ぼす重大な問題であると、警鐘を鳴らす。

ボリバルの解放戦争は、いったい何だったのか。自身が言うように、単なるドン・キホーテだったのか？

3) カテドラルのマリアさま信仰

さあ、アレハンドリーノ別荘にお別れの時間がきたようだ。ぐずぐずしてられない。もう、だいぶ陽が高くなってきた。街の中心にあるカテドラルを訪れよう。真っ青なブルーの空を背景に真っ白で品格のある美しい佇まいを見て、心が洗われる思いがした。コロンビアで最も古い教会であると考えられている。それを証しするように、内部の天井のクロスは典型的なロマネスク様式である。

主祭壇と両側の回廊の間には、ロマネスク様式のアーチが数本並べられている。

建設が完成するのは18世紀末である。内部も真っ白で清らかで、いかにも無原罪の聖母マリアさまにふさわしい礼拝堂である。回廊の白い壁に嵌めこまれた数枚のステンドグラスをとおして柔らかい午後の光線が暗い内部に神秘的な雰囲気醸しだしている。

カテドラルには、ボリバルの遺体が祖国ベネズエラのカラカス市に移される1839年まで安置されていた。ここには、また、サンタ・マルタ市の建設者のロドリゴ・デ・バスティーダスの遺体も埋葬されている。その上には、マルモルの彼の記念像がある。コロンビア国の名誉を捧げられた前線総督、アデランタードのバスティーダスは、両腕に旗をかかげ、片膝をついてスペイン国王の名の下にサンタ・マルタの領有権を宣言しているポーズをとっている。1525年7月29日、サンタ・マルタ建設、1527年7月28日、キューバで死亡と刻まれている。わずか、この港市には2年間居住していたのだ。前述のように黄金をめぐる部下の謀反にあい、ほうほうのていでキューバまで逃げたのであった。

10年近くもスペインからの解放者ボリバルとスペイン人征服者の遺体が同じ場所に埋葬されていたとは、カトリックのコロンビア政府は彼らを同じよう

に重要な人物と考えているらしい。バスティーダスはカトリックをもたらしした征服者より、建設者としてこのカテドラルに名誉と遺体を残したことになる。

主祭壇には、サンタ・マルタ市建設時にスペイン国王によって献納された無原罪の聖母マリア像がある。現在、聖母マリアさまは、サンタ・マルタ市および港の保護者となっている。このカテドラルでは、1975年7月29日にサンタ・マルタ建設の450年を祝う盛大なマリア祝典式が開催された。そして、現在の美しいカテドラルに修復されたのである。その時、無原罪のマリアさまが、サンタ・マルタ市の紋章に描かれることが、決定された。それほど、マリアさまが、市民から愛されている事実に感動をおぼえた。先記したメキシコの聖母グアダルーベにたいする信仰と同じようなマリア信仰がここでも強いのである。

4) 先住民タイロナ (Tairona) およびエル・ドラド伝説

タイロナ黄金美術館に展示されている金細工は、黄金の光輝く美しさもさることながら、ため息がでるような繊細な高度な美意識と精緻な技で造られたものばかりであった。サンタ・マルタの海岸沿いを北の方向にネバダ山脈がある。アンデス山脈からは離れているが、5000メートル以上の山々が連なっている。頂上ギザギザで鋸のような形を持ち、常に雪におおわれているのでシエラ・ネバダ (Sierra Nevada) と呼ばれている。その南麓に居住していたのがタイロナ民族である。

南米先住民の築いたタイロナ文化の起源については不明であるが、プエブリト (Pueblito-村落) 遺跡発掘調査により、3000軒ほどの家々が軒を連ね、宮殿や神殿として建てられた建築物があった。街をとおる大通りは、平石で舗装され、すべての集落が石敷きの道路で結ばれていた。小川には、平石製の橋がかけられていた。一軒ずつ、家の丸い輪郭の土台だけが、残されていた。それらの家には、平石を並べた出入り口が設けられていた。調理用の土器や斧、石

のすり皿、石棒などの道具は、床面から発見された。それらの家は、低い基盤の上に建てられているか、丘陵のわきをテラス状にして建てられていた。家屋の内部には、火を使用した痕跡が見られた。神殿や特別な建物は、木造で建てられていたのは、一般の家屋と同じであったが、通常より高い基壇の上に建てられ、石造りの階段がつけられ、一般の家屋より大きな建物であった。男たちや若ものたちが集会に集まったり、神聖な儀式を行う建物も同じように大きく造られた。周辺に点在している集落から、この街を訪れる人々に神々の言葉を伝えたり、タイロナ国家の伝統を教えたりする建物であった。タイロナの住民は、「町」をより大きくしようと計画し、木材の切り出しを組織的に行い、運河や貯水槽を造って町と耕地に水を供給した。テラス農耕の遺構は、経年劣化によってもたらされる亀裂や浸食を防ぐように設計されていた。タイロナの集落は、中心となる「町」に住む有力な首長の下で結びつけられていた。いくつかの人口千人くらいの町には、それぞれ首長がいて、執政官、裁判官および儀礼的な役割を果たしていた。文民統治機構に関わっていた祭司たちは、尊敬され、神々の戒めを人々に語っていた。

タイロナの人々が、金細工師、熟練手工芸師、船乗り、戦士、養蜂家、農夫、漁師、紡績工などの技能集団であったことが分かっている。というのも、タイロナの人々が住む場所は、海の近くの熱帯地方の釣りや漁業に適している場所から温暖地方、および山岳地帯のトウモロコシ栽培に適した地域まで広範囲に及んでいる。また、タイロナ人はすぐれた農夫、養蜂家であったので、パイナップルなどの果樹、豆類、アボカド、グアバなどの野菜類などが栽培され、上等な蜂蜜を収穫していた。

サンタ・マルタ港から車でおよそ1時間、山道を20分程歩いた所に遺跡が保存されているタイロナ国立公園（Parque Nacional Tairona）がある。タイ

ロナ民族は、スペイン人征服者到着以降の1550年には、80%が消滅し、20%は、奥深い山岳地帯に逃げていった。植民地時代のクロニスタがいないので明確なことが分からないが、後900年から16世紀初めまでに開花した優れた文明を持っていた。多くの要素を検証した結果、メソアメリカに由来すると考えられている。このように、メソアメリカのイデオロギーは、カリブ海を經由してコロンビアの北部に直接もたらされたようである。

前述のように、高度な技術によって金細工、土器が造られていた。特に、金による細工は完璧に近い水準であった。祭式、儀式に用いられた祭具、奉納品が多く、祭司が首にかける数珠玉、杖、飾り物、飾り板、彫像などが、先記のタイロナ国立公園の宝物館に展示されている。それらの祭具、奉納品は、種類によって安置させる場所が決められていた。たとえば、湖、神殿、個人の住居の床下、家屋の外、道端、洞窟、などの場所である。それらの品々は、人々に繁栄および生命がずっと続いていくという保証を与えていた。

現在、カルタヘーナとサンタ・マルタの間を流れているマグダレーナ川周辺の山岳地帯に居住しているコギ、イカ、サンカなどの部族がタイロナの末裔と考えられている。

ヨーロッパ人到達前のコロンビアには、タイロナを含めて、数多くの先住民民族が住んでいた。その中の主な民族は、名前をよく聞くムイスカ (Muisca) 族を筆頭に、マグダレーナ (Magdalena), キンバヤ (Quimbaya), カリマ (Calima), ゼヌ (Zenu), トリマ (Tolima), トゥマコ (Tumaco), ナリニョ (Nariño) などである。比較的距離の近いタイロナとムイスカの間には、冶金や鑄造業をとおして文化的なつながり、交流が存在していた。

それらの民族が残した石製の器、陶磁器、貴石、織物、貝および骨製品などが、コロンビア各地の黄金美術館で観賞できる。総本山は、首都ボゴタにある

黄金美術館である。1945年以來、世界中の美術館に協力して期間限定で、先コロンブス期の重要なコロンビア文化を代表する歴史的、文化的に価値のある品々を貸し出して展示を行っている。しかし、なかでもとりわけ、豪華な金細工であるムイスカの筏船など海外に輸送できないものもある。

ボゴダの黄金美術館に展示されているムイスカの黄金の筏船がエル・ドラド (El Dorado) の伝説を生み出した。南米史でも名高いエル・ドラド探しは、1539年以降、スペインのコンキスタドールたちによって本格化されたらしい。

現在、コロンビアの首都であるサンタフェ・デ・ボゴダを1538年8月、創設したヒメネス・デ・ケサーダ (Jiménez de Quesada) もその中の一人だった。ボゴダ周辺の村々からエメラルドと黄金を大量に奪ってはいるが、最終的にはエル・ドラドを発見できなかった。しかし、1570年代に64歳になっていたケサーダの執念はものすごく、エル・ドラド総督領の建設をあきらめなかった。やがて、ケサーダは「エル・ドラドの騎士」とよばれるようになっていった。コロンビアの人々は、ケサーダやその時代のエル・ドラドの狂騒物語を忘れなかった。ボゴダの国際空港の正式名称は「エル・ドラド国際空港」である。

16世紀、17世紀の年代記作家たちの間でもエル・ドラド伝説の記述には混乱が見られるが、その一人、オビエドがキト (エクアドルの首都、1534年スペイン人のコンキスタドールにより建設) の人々の間で広まったことを示唆して、「あの地域で有名になった王のことを〔金色の首長〕 (El Cacique Dorado)、あるいは、〔金色の王〕 (El Rey Dorado) と呼ぶのは、インディオによると、王は細かい金粉を裸体に塗っていつも歩き回っている。この王は朝には黄金をまとい、夜には黄金をはらって、大地に捨てる」と、インディアス一般史および自然史で述べている。

年代記作家のオビエドが述べてはいない前述のムイスカ族の黄金の筏船のエル・ドラド伝説がよりいっそう真実に聞こえる。何故ならば、タイロナやムイ

スカが話す言語はチブチャ語で、サンタ・マルタ周辺からボゴタ郊外にいたるチブチャ首長国には、大量の黄金が埋蔵されていたからである。

コロンビア各地に点在する湖で奉納の儀式が行われていた。ボゴダ郊外にあるグアタビータ (Guatavita) 湖での儀式がいちばん有名である。儀式に用いられた筏船を模した黄金の素晴らしい工芸品が20世紀に発見されたからである。その発見により、この湖での奉納の儀式が本当であったと考えられるようになった。この地の王がグアタビータ湖の真ん中まで船で漕ぎでて、そこで金銀財宝を奉納し、みずからも沐浴したという話が湖畔で暮らす先住民の間に伝わって、やがて伝説になっていく。当時のグアタビータ湖には、人によって作られた階段らしき跡が残っていた。初期におけるコンキスタドールたちは、実際に湖畔やエメラルドをしばしば発見した。

やがて、当時の人々はグアタビータ湖の伝説と金色の王の話を混同するようになり、青い湖と金色の王の幻想的な儀式をイメージのなかで膨らませていった。そして、しだいに、湖こそがエル・ドラドを発見する手がかりであると考えられるようになった。

スペイン人、ドイツ人などのエル・ドラド探しの遠征隊がつつぎと出現するが、その中でも、ドイツ人監督ヴェルナー・ヘルツォークの映画「アギーレ-神の怒り」で主人公となったスペイン人、ロペ・デ・アギーレの遠征探検の物語がいちばん面白い。1560年9月、アギーレはペドロ・デ・ウルスア総督のエル・ドラド遠征隊に参加した。およそ400人のスペイン人兵士とその家族や600人の先住民とともに帆船やカヌーによりアンデス地方からアマゾン川を下っていった。一日中、ゆらゆらとアマゾン川を下っていく場面が圧巻である。川の兩岸は鬱蒼とした広大な密林地帯で帆船からは、何がそこに隠れているかが全く見えない不気味さ、恐怖感がある。突如として密林から無数の槍が飛んできて応戦しなければならないことも度々ある。そのような緊迫した状況下で黄金もエメラルドも見つからず、船に閉じ込められている人々が徐々に追

いつめられていき、疲弊していく。アマゾン川の雄大な自然を背景にした閉鎖集団の精神的、心理的に少しずつおかしくなっていく様子をヘルツォーク監督が的確に描き出している。結局、アギーレは総督を刃にかけ、スペイン国王に反旗を翻す。この蜂起は、植民地体制を揺るがす大事件となった。それ以来、アギーレは「地獄の死者」とか「血に飢えた精神異常者」と呼ばれるようになったが、ラテンアメリカでは、アギーレは、スペイン国王への怒りや独立宣言を文書でしたためた最初の新大陸の人と見なされており、スペイン支配への反抗の象徴となって人気が高い。

5) コロンビア作家、ガブリエル・ガルシア・マルケス (Gabriel García Márquez)

サンタ・マルタの黄金美術館を出ると、まだ、陽は高く、南国のまぶしい光線が容赦なく降りそそぐ。濃密な重い、しかし透明な空気を吸いこむと、海岸に向かって歩いて行く。右側の壁一面から、おなじみのガルシア・マルケスの微笑んでいる大きな顔写真と「Gabo (Gabriel- ガブリエル) の記念日に」という文字がとびこんできた。ガボ (Gabo) は、ガブリエルの愛称らしい。その横には、出生から死去までの年譜および年毎の文学作品の名前と重要な出来事が、透明なシートに書かれて横に長く貼られている。通りかかった誰の眼をも引く大きさである。死去、2014年4月18日と書いてあるところから、2カ月後には、5周年記念日を迎えるためのものだと分かる。ほんの5年前まで生きておられたのかと、意外な思いがした。

出生、1927年の下には、赤ん坊のガボがいる。目のぱっちりした天使のような愛らしさである。説明がついていて「3月6日、アラカタカ (Aracataca-マグダレーナ県) の寒村で嵐の中、首の回りには、ヘソの緒が巻きついた状態で出生」とある。マルケスの波乱万丈の一生を予告していたようである。アラ

カタカは、カリブ海沿岸のサンタ・マルタやカルタヘーナ近くに散在している村のひとつであろうと思われる。マルケスが生まれた当時、その村には、2000ほどの人が住んでいた。翌年、1928年の項には、重要な出来事として、「米国会社のユナイテッド フルーツ カンパニーで働くコロンビア人が、ストライキをおこして、コロンビア政府が戒厳令をだしたが、誰もストライキをやめようとしなかったので、軍隊が出動した」とある。マルケスは「百年の孤独」の中で、3000人の労働者が死亡した、と書いている。当時のスキャンダルな政権は、外国からの侵入者の支持によって保たれている腐敗したものであった。

1947年の項では、首都ボゴダのコロンビア国立大学で勉強していたマルケスが、ある日、フランツ・カフカを読み、次の日には、初めての小説を書いたとある。カフカの「変身」を読んで、マルケスは、小説の書き方の手法に大きな衝撃を受け、自身の作風を確立するとともに、文学そのものに関心を持つようになった。1948年にボゴダ暴動が起こり、家族が居住していたカルタヘーナ大学に移るが、生活難により中退する。「エル・ユニヴェルサル」新聞社の記者として働き、貧乏暮らしの中でセルバンテス、カフカ、ジェイムズ・ジョイス、ウィリアム・フォークナーなどを耽読した。

1954年には、「エル・エスペクタドール」紙の記者としてボゴダに戻っていたが、翌年1955年、自由党派のこの新聞社が、当時の独裁者ロハス・ピニェリヤの弾圧によって廃刊した。職を失ってマルケスは極貧生活を送るようになるが、小説の執筆活動を本格的に始めたのがこの時期であった。

純文学の大家という名声を得たのは、かなり以前、1967年に「百年の孤独」(Cien años de soledad-1982年、ノーベル文学賞受賞)を発表してからである。

受賞の理由として「現実的なものと幻想的なものを結び合わせて、ひとつの大陸の生と葛藤の実相を反映する、豊かな想像の世界」があげられている。

その作品により、セルバンテスと並び、スペイン語による文学の最高峰に達

した。また、物語の力をよみがえらせた天性の語り部という評価を得た。魔術的リアリズムの旗手と謳われたマルケスは、世界中の読者と作家に新鮮な驚きと可能性を感じさせた。20世紀後半の世界に、それまでの小説にはない、まるでちがう原理と次元の違うパワーを持ちこんだ、あれほどの特別な説得力を發揮し、文学の高みを極めた作家を見つけるには、ディケンズまでさかのぼらなければならないと絶賛された。日本では、大江健三郎、寺山修二、中上健次、池澤夏樹など、多数の作家に影響を与えた。

ガルシア・マルケスは、物心がつきはじめた頃から噂好きな祖父母や母親から村の迷信、言い伝え、近所の噂話、土地に伝わる神話や伝承を聞かされて育った。特に、祖父は戦争体験をよく語っていた。また、物語の技法をまったく知らない母親なのに、ストーリーの中にどんでん返しをしかけたりして、人が最後に呆気にとられるように語っていた。人が一生かけて学ぶはずの技巧を母は、どこで身につけていたのかと、マルケスは不思議でならなかった。母親の天性を受け継いだのか、自分が本当に好きなのはストーリーを語ること、何かを物語りたいという幸せなマニアにかかっているんだ、と語っている。そういう語り部としての才能が存分に發揮されているのが「百年の孤独」ではなからうか。

この壮絶な物語は二つの軸を中心に、語られている；架空のマコンドの村とブエンディア家の百年に及ぶ血族の生涯である。普通でない一族の出所を基にしてめくるめく神話的な世界が、読者を飽きさせずに骨太な筆力で語られている。

マコンドの村を建設した一族の長であるホセ・アルカディオ・ブエンディアから最後の子孫であるアウレリャノ・バビロニアが、避けられない宿命を受け入れるまでの系譜小説である。

また、そこでは、人と土地が深く結びつけられているという土俗的世界がふ

たつの時間軸—前へ前へと進んでいく時間と過去に遡っていく時間—の中でさまざまな奇想天外な出来事をとおして語られる。

そういう世界の中では、語り手は創りばなしをしながら夢中で語り、聴き手は想像しながらワクワクして聴くという交流が、自然に生まれてくるのである。

物語の底辺には、ブエンディア家代々の孤独、「この世の初めから未来永劫にわたる孤独」、「一家の者がみなそうだが、どことなく淋しげな感じ」が流れている。それは、どんな人間も衰退、消滅に向かって歩いて行かなければならないという定めから来ているのだと、思う。マルケスのリアリティに富んだ「孤独」の描写に戦慄を覚えない人があるだろうか。たとえば、ある女の「希望の星はとっくに消えたが、まだ美しさをとどめている大きな目。索漠とした孤独な生活のためにひび割れた顔の皮膚。亡者のような姿……」という描写。鏡で自分の顔を見ずには、いられなくなるようなぞっとするような描写ができるのは、マルケスがこういう人たちに囲まれて見慣れているからだ、と思わずにはいられない。

小説の中では、百年かけてマコンドという架空の村と共に生き、消滅したブエンディア家の屋敷と住人たちをとおして闇のように上記に記した深い孤独が語られている。背景となっているのが、南米のすさまじい歴史とトロピカルの自然の猛威である。今までずっと見てきたように、コロンブス以降の南米では、ヨーロッパ人による征服、植民地化、スペインからの独立戦争、戦後の独裁者による寡頭政治、外国企業のフルーツカンパニーの進出、および、それと結託した腐敗政治など、一般民衆は計り知れない困難な生活を強いられてきた。

当初、マコンドの村は拓けそめた新天地に、葦と泥づくりの家が20軒ほど建っているだけの小さな村だった。低地の奥に隠れたもの憂い村だった。ブエンディア家の主人、ホセ・アルカディオ・ブエンディアは若き族長として振る

舞い、村の発展のためならば、一同への協力を惜しまなかった。彼の家は村いちばんの住居だった。栗の大木がそびえる中庭、手入れのよい野菜畑、山羊や豚や鶏が仲よく暮らしている裏庭などが、そこにはそろっていた。数年のうちにマコンドは、当時知られていた、住民3百をかぞえるどの村よりもとのった勤勉な村になっていた。そこは、ほんとうに幸せな村だった。30歳を越えた者はひとりもなく、死人も出ていなかった。

ブエンディア家の中庭には、南国のまぶしい太陽がふりそそぎ、馬屋、金網ばりの鶏舎、牛小屋まであった。やがて、歳月が経つにつれて家には、虫たちが侵入し、赤蟻は家の土台を崩そうとし、トロピカルの密林の混沌は、容赦なく族長の妻、ウルスラの秩序を呑み込もうとする。彼女は、屋敷と生活の秩序を回復しようと一生をかけて奮戦するのである。百歳を越えた勤勉で冷静な彼女も、マコンドの村に3年以上雨が降り続いた時は、正気を失ったが、雨が上がると正気を取り戻し、復活した。

しかし、長雨の最中に大きな赤蟻は、どんどん増えて家の土台を崩しつつあった。ウルスラはその赤蟻を相手に闘うが、やがて、屋敷は繁殖の激しい植物に侵略され、赤蟻に侵され解体され、密林の猛威にのみこまれて崩壊していく。

一方では、先記のマルケスの祖父が、モデルとなったブエンディア家の次男、アウレリャノ大佐をとおして当時の混沌としたコロンビアの歴史が浮きぼりにされる。

コロンビアでは、1819年のスペイン独立後も保守派と自由派が対立し、内戦（千日戦争）が続いたが、3年後の1902年に、アメリカ海軍の戦艦ウイソコンシンでネールランディア協定、休戦協定を結んだ。アウレリャノ大佐は、自由派に属し、32回も反乱を起こし、そのつど敗北した。また、14回の暗殺と73回の伏兵攻撃、1回の銃殺刑を免れた。最後には、全土を支配する革命

総司令官の地位につき、政府がもっとも恐れる人物になった。勲功章も辞退した。戦後に与えられることになった終身年金も断った。ほぼ20年にわたる内乱に終止符をうった先のネールランディア協定に署名した後で、自身の胸にピストルの弾丸をぶちこんだが、急所をはずれて背中へ抜けた。アウレリャノは、政治活動に没頭する前から、孤独な冥想癖をもち、逃避的な性格だった。しかし、すぐれた決断力があり、すべてを見通している鋭い視線を周囲に投げかけていた。老後は、マコンドの屋敷の職場でもの憂い表情を浮かべながら過ごした。

あとに残ったものは、アウレリャノ大佐の名前がついたマコンドのひとつの通りにすぎなかった。

5年近く続いた長雨、その後の10年間の早ばつでマコンドは廃墟も同然の姿になっていた。その間に、屋敷のブエンディア家の一人ひとりが老衰で、殺人で、あるいは、謎に満ちた不可思議な現象で消えていく。自然の猛威から屋敷を守れないと、家から永久に出ていった者もある。その荒廃した屋敷に残された最後の家系につながる者が、二度と自分の家系が、この地上に出現する機会を持ちえないことを悟ったその瞬間に、マコンドは、暴風によってなぎ倒され、人間の記憶から消え去っていった。浜辺の近くにうちあげられていたスペインの巨大な帆船のようにそれらは、やがで孤独と忘却の空間を占めるようになるのであろう。

あまりにも長い間、「百年の孤独」の世界に浸りすぎて、どこにいるのかが、一瞬、分からなくなってしまったが、現実の世界では、目の前に海が広がるサント・マルタの浜辺にいた。近くには、港があり、出港を待つクルージング船がまばゆい太陽の下で、船体に描かれている宝石を煌めかせていた。ふっと溜息がでた。碧く透明だが、軽やかではない空気の中で失っていた現実感覚、時

間の経過を取り戻すことができた。プエンディア家の変わり者たちと百年間も一緒にいた後では、それは、たやすくは、なかった。

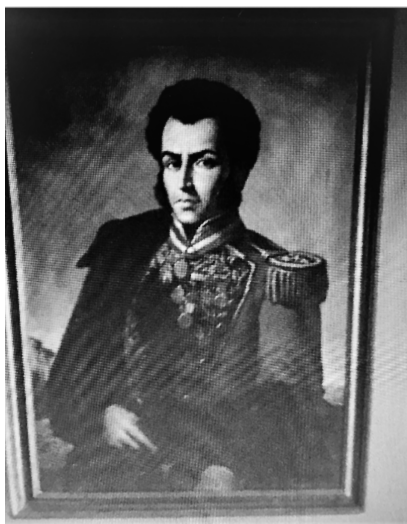
空より濃い蒼い海を背にしてすっと立っているのは、サンタ・マルタ建設者、スペインのコンキスタドール、ロドリゴ・デ・バスティーダスの銅像であった。かなり高い、一部はマルモルの真っ白な台座にいるバスティーダスは鎧をつけ、右手に兜を持ち、左手を剣にかけて威風堂々としている。先記したように、黄金を奪いあって、部下たちによって、ほとんど殺されかけてほうほうの体でキューバにたどり着いたコンキスタドールに対して下記のようなあたたかみのある銘文が刻まれている、「1460年、セビーリャ、スペインに生まれ、1527年、キューバで死亡。1524年11月6日、スペイン王室により隊長および総督に任命された。1525年7月29日、サンタ・マルタを建設した。コンキスタドールの中でもっとも人道的であり、友人たちの中でもっとも高潔であったと言われている」

スペイン人による征服の歴史およびバスティーダスを熟知しているにもかかわらず、コロンビア人が、こんなにも敬意を表した銘文をおくっているのには、驚かされた。スペイン人のラス・カサスによって非道な仕打ち、悪行にかけては優劣つけがたい隊長のひとりとして名指しされているのだが.....

まだ、日は高かったが、南米大陸からお別れする時間が迫っていた。何と濃密な長い1日だったのであろうか。スペインのコンキスタドール、解放者ボリバル、先住民タイロナ、文学者マルケス、マコンドの村、プエンディア家の一人ひとり、もちろんこの港市のサンタ・マルタたちに愛惜の情でいっぱいになりながら、船上のデッキからお別れをした。いつものように、広大な海原は、人間の些細な心情を白波を立てて抱きこんでくれた。(つづく)

参考文献

- インディアスの破壊についての簡潔な報告。ラス・カサス。染田秀藤訳。岩波書店。東京。2017年。
- インカの反乱。被征服者の声。ティトウ・クシ・ユパンギ述。染田秀藤訳。岩波書店。東京。1997年。
- 黄金郷(エルドラド)伝説。山田篤美。中公新書。東京。2008年。
- コロンブス、全航海の報告。林屋永吉。岩波文庫。東京。2011年。
- コロンブス、大航海時代の起業家。青木康征。中公新書。東京。1989年。
- マヤ文明、密林に栄えた石器文化。青山和夫。岩波新書。東京。2012年。
- 物語、スペインの歴史、海洋帝国の黄金時代。岩根隼和。中公新書。東京。2002年。
- ドン・キホーテ。セルバンテス。牛島信明訳。岩波文庫。東京。2007年。
- 百年の孤独。G・ガルシア・マルケス。鼓直訳。新潮社。東京。2019年。
- ラテンアメリカを知る事典。平凡社。東京。1987年。
- グレートジャーニー、人類5万キロの旅。関野吉晴。角川文庫。東京。2010年。
- 夜と霧。ヴィクトール・E・フランクル。池田香代子訳。みすず書房。東京。2002年。
- 誰も知らない「名画の見方」。高階秀樹。小学館。東京。2010年。
- 地球の歩き方、中米。2018 - 19。ダイヤモンド・ビッグ社。東京。2017年。
- Brevísima relación de la destrucción de las Indias. Bartolomé de las Casas. SARPE. Madrid, España. 1985.
- Cartas de la conquista de México. Hernán Cortés. SARPE. Madrid, España. 1985.
- Cristóbal Colón. Su vida y descubrimiento a la luz de sus profecías. Kay Brigham. TERRASSA. Barcelona, España. 1990.
- De Cristóbal Colón a Fidel Castro (I). Juan Bosch. SARPE. Madrid, España. 1985.
- De Cristóbal Colón a Fidel Castro (II). Juan Bosch. SARPE. Madrid, España. 1985.
- Cien años de soledad. Gabriel García Márquez. Editorial Sudamericana SA. Buenos Aires, Argentina. 1967.
- El Libertador. Augusto Mijares. Academia Nacional de la Historia. Caracas, Venezuela. 1987.



Simón Bolívar: el Libertador.
シモン・ボリバル

*Gabriel García
Márquez*



Cien años de soledad

百年の孤独
ガブリエル・ガルシア・マルケス
(Gabriel García Márquez)



Estatua de Colón. Cartagena (Colombia).
コロンブス像. カルタヘナ (コロンビア).

2. EN EL CAMINO DE LA VERDADERA IDENTIDAD CRISTIANA.

(Ensayo sobre creencias y valores cristianos) (II)

Por Bernardo Villasanz.

“...por encima de todas las gracias y de todos los dones del Espíritu Santo que Cristo concede a sus amigos, está el de vencerse a sí mismo y de sobrellevar gustosamente, por amor de Cristo Jesús, penas, injurias, oprobios e incomodidades.”

(-Florecillas de San Francisco-)

RESUMEN

En esta segunda parte (“La construcción de la identidad cristiana”) nos referimos sucintamente a la cosmovisión del paradigma cristiano intentando buscar el hilo conductor de la Palabra Revelada ante la diversidad de interpretaciones e incluso de manipulaciones del texto bíblico.

Basándonos en el texto de la Biblia mostramos cómo la verdadera identidad cristiano-católica está fundamentada en los sacramentos que, a su vez, están basados en citas bíblicas concretas. Hay una transmisión apostólica a través de la “imposición de manos” que certifica la verdadera Iglesia de Cristo y mantiene el depósito de la fe. Somos ciudadanos del Reino de Dios y su Iglesia.

Nos referimos, por otra parte, a la Tilma de Juan Diego (Virgen de Guadalupe, México) y a la Síndone o Sábana Santa de Turín (Italia) como manifestaciones evidentes de una realidad trascendente

que avalan esta razón intuitiva de la construcción de la fe cristiana.

En documento anexo aparece la lista secreta de algunos mártires japoneses encontrados en la localidad de Taketa (prefectura de Oita, Japón) bajo el dominio de Tokugawa en 1614. Es un símbolo de los recuerdos de quienes llegaron hasta el extremo para dar testimonio de su fe y que son “la sangre viva de la Iglesia”.

INTRODUCCIÓN

La interpretación del texto bíblico que hacemos como lectores nos permite cierta autonomía para desvelar el mundo de las parábolas, de los símbolos y de la doctrina cristiana para lo cual lo descontextualizamos en nuestra situación presente. Traemos su significado y su sentido a nuestra conciencia y aunque ha nacido en otras circunstancias podemos aplicarlo a la nuestra. De esta manera nos vamos comprendiéndonos a nosotros mismos por mediación del texto ya que ningún discurso está libre de presupuestos y cada autor y lector debe explicitar los suyos.

En este sentido las parábolas reclaman nuestra participación produciendo una **“observación textual participante”**, vivificando y completando la obra en el mero acto de lectura. Intentamos desvelar su sentido asumiendo que existen multiplicidad de significados. Aunque reflexionamos desde nuestra situación enajenada como sujeto crítico lo curioso es que formamos el sentido desde una interpretación creadora, un paradigma de la reflexión que expresa un doble sentido. La identidad narrativa contribuye a una ampliación de nuestra propia identidad personal.

El relato bíblico a medida que avanza la trama crea los distintos

personajes aportándoles una identidad narrativa y al identificarnos con dichos personajes ampliamos nuestra propia identidad como lectores ya que nos reconocemos en los otros. Se pasa de un conocer el texto a una manera de ser (ontología militante) que es cuando se argumenta interpretando verdadera y honestamente al elevar la razón humana hacia la Sabiduría, o sea, Dios.

Nuestra base argumentativa parte de la ***actitud de la persona en crisis*** que es lo que marca esencialmente su situación al no contar con un sistema y jerarquía de valores fijos. Experimenta la persona su límite de la tolerancia y desde este límite podemos empezar a construir una estructura de valores de acuerdo al momento histórico y la perspectiva personal. Surge algo que parecía aletargado: el compromiso de discernir una escala de valores lo que implica decidirse por una opción entre otras y la convicción de elegir con riesgo.

Es una especie de ***ética intencional*** frente a lo que antes era una moral normativa. Es un deseo de “vida buena” que depende de la acción de la persona. Empieza a estimarnos a nosotros mismos en contraposición de la anterior actitud egoísta. Es una estima que implica el reconocimiento del otro, es decir, una solicitud. También implica una referencia a una “institución justa” lo que implica derechos y deberes.

En el caso del texto bíblico además nos capacita para transformar la realidad cósmica e histórica al revelarnos la Palabra de Dios otra posible identidad personal, rompiendo con esa actitud pasiva en la que podríamos reducir dicha Palabra únicamente a una mera literatura humana. De esta manera lo importante de la lectura es nuestra respuesta pues a diferencia tal vez de otras, no se puede leer o escuchar las parábolas y la doctrina de Jesús

y seguir siendo el mismo. Comprender el texto aquí quiere decir *estar dispuestos a la conversión o a su rechazo* ya que es como un espejo donde nos descubrimos. Por una parte leemos el texto y por otra el texto nos lee a nosotros revelándonos quiénes somos.

Esto nos lleva a considerar otro punto importante en **la comunicación textual** ya que al leer en nuestro caso las parábolas esto proporciona una forma de conducta en la que el individuo puede convertirse en un objeto para sí. De hecho la característica de la persona como un objeto para sí (el *sí mismo*) indica lo que puede ser al propio tiempo sujeto y objeto. La comunicación textual en el sentido de que transmite *símbolos significantes* es una comunicación que está dirigida no sólo a los otros sino también al individuo mismo. Lo que quiere decir esto es que la persona es esencialmente una estructura social y surge de la experiencia social.

A pesar de esto los símbolos de las parábolas y de la doctrina aunque tienen que obedecer a dobles sentidos y en realidad se pueden interpretar particularmente y creativamente, no puede decirse que sea absolutamente particular ya que siempre habrá un significado social compartido se esté o no de acuerdo con él. Si nos referimos a una **verdadera comunicación** el pensamiento involucrado en el símbolo debe provocar en el lector la misma reacción que provoca en el autor y esto sería de carácter universal. Es claro que para que exista verdadera comunicación el símbolo de la narración tanto de las parábolas como del texto bíblico en general debe despertar en la persona del lector o lectores la misma reacción. Una institución se forma cuando se produce una **reacción idéntica** por parte de toda la comunidad.

No parece ser este el caso a juzgar por la diversidad de interpretaciones

e incluso manipulaciones del texto de la Biblia. La doctrina cristiana ha ido penetrando en varias sociedades con sus respectivos sistemas culturales que le han agregado sus propias versiones sobre ciertos aspectos teológicos y disciplinares. En el año 1054 en el denominado Cisma de Oriente dividió el cristianismo en la Iglesia Católica Apostólica Romana y la Iglesia Apostólica Ortodoxa. De las Iglesias ortodoxas forman parte los maronitas, griegos-católicos, iglesia oriental entre otras denominaciones.

Más tarde la Iglesia Católica sufre una nueva división por causa de la llamada Reforma Protestante iniciada en 1517 por Martín Lutero. De las Iglesias del protestantismo forman parte las tendencias evangélicas, luteranas y anglicanas.

Es el conflicto del “yo” del lector como individuo frente a la actitud del otro en la narración textual. La reacción del “yo” ante la narración es ciertamente incierta y eso es lo característico de la identidad personal, su contingencia. El “yo” proporciona una sensación de libertad, de iniciativa pero nunca es algo enteramente calculable.

La reacción de nuestra identidad personal ante el texto involucra una adaptación y al adaptarse el individuo se transforma afectando a la comunidad en la que vive. La reacción del “yo” ante el mensaje como resultado de la interpretación personal puede ser un proceso que implique una degradación del estado social o bien una integración de orden superior.

Degradación estaría relacionado con una posible “idolatría” del texto narrativo, una exaltación del contenido del mensaje como si fuese un ídolo. Y más incluso, podemos fácilmente al interpretar personalmente la Biblia, caer en la idolatría del Libro, considerando la fe cristiana como una “religión del

Libro” sustituyéndola por la Palabra de Dios. Incluso hay interpretaciones de supuestas iglesias cristianas que en sus escritos contradicen la Palabra revelada aunque no dudan en citarla y tergiversarla.

La Iglesia claramente expresa que “ -*Sin embargo, la fe cristiana **no es una “religión del Libro”. El cristianismo es la religión de la “Palabra” de Dios, “no de un verbo escrito y mudo, sino del Verbo encarnado y vivo”** (S. Bernardo, hom. miss. 4,11). Para que las Escrituras no queden en letra muerta, es preciso que Cristo, Palabra eterna del Dios vivo, por el Espíritu Santo, nos abra el espíritu a la inteligencia de las mismas (Cf. Lc 24,45).”* **(Catecismo de la Iglesia Católica, 108) Negritas del autor.**

Sobre el peligro de una interpretación personal de las Escrituras hay una advertencia clara como se señaló en la primera parte y que no está demás señalar: “*Pero, ante todo, tened presente que **ninguna profecía de la Escritura puede interpretarse por cuenta propia; porque nunca profecía alguna ha venido por voluntad humana, sino que hombres movidos por el Espíritu Santo, han hablado de parte de Dios.**”* **(2 Pedro 1, 20-21) Negritas del autor.**

Cuando el lector toma una actitud derivada de la narración del texto como por ejemplo las palabras atribuidas a Jesús (“*Ve y haz tú lo mismo” Lucas 10:37*) incitando a actuar de una determinada manera, interioriza en su personalidad lo que pertenecerá a cierta comunidad y que dicho mensaje actualizado en acto transformará su visión del mundo y las incorporará a su vez a las instituciones de dicha comunidad y a su propia conducta.

Son actitudes que adopta de la lectura textual que constituirán su

carácter. Son los principios que como actitudes reconocidas por todos los miembros de la comunidad que conformarán sus valores. Estos valores son la inferencia de tales reacciones.

La doctrina de Jesús ha cambiado notoriamente las comunidades frente a las cuales reaccionaba. Un carácter personal excepcional que siendo lo que era realizó en la comunidad judía una transformación sin precedentes. La actitud que propugna derivada de la lectura de los textos bíblicos es única y original.

El cristianismo ha facilitado el camino para el progreso social del mundo moderno convirtiendo la vida social humana en una noción más amplia y compleja, racionalmente universal y más creativa.

Al enfrentarnos a la identidad narrativa de los textos bíblicos y sumergirnos en su contenido nos encontramos con valores que si no son meditados cuidadosamente nuestra identidad personal reaccionará de una manera reactiva, influida por el ambiente y el clima social en que nos encontremos en ese momento. Se aceptarán valores o se rechazarán sin ninguna conciencia ética o moral pues se consideraría que en dicho sistema cultural no hemos tenido ninguna involucración. La identidad personal no se vería reflejada en la identidad narrativa.

En cambio si nuestra actitud valorativa considera el texto bíblico como principio considerará la identidad narrativa como expresión de una verdad profunda de aplicación universal. Esto quiere decir que el “yo” internalizará en su sistema de la personalidad la identidad narrativa como un ACTO que le otorgará el poder de crear una variedad de prácticas para discernir diferentes situaciones en el presente.

La tarea al interpretar el texto bíblico supone una dialéctica entre

explicación y comprensión. Esto despliega un doble intento: por una parte reconstruir la dinámica interna del texto siendo fiel a lo que leemos “objetivamente” considerado (*sentido inmanente de la estructura del texto*) y por otra parte un esfuerzo “subjetivo” por restituir la capacidad del texto de proyectarse hacia fuera (*acto complementario de su referencia extra-lingüística*) aplicando la referencia textual a nuestro mundo real. Intentamos comprender el texto bíblico recuperando en sí mismo el trabajo de estructuración del texto explicando en la puesta al día de los códigos.

Lo importante en el texto no es tanto lo que los personajes dicen como los significados objetivamente expresados de una manera autónoma y que no pertenecen ya a los autores respectivos. Estos significados objetivos aparecen cuando la escritura los independiza de la situación en la que acontece (productividad de la distancia). Esto supone una experiencia transformadora.

Tenemos que acabar el proceso de comunicación abierto por la escritura bíblica, como sujetos hacemos un acto completando la referencia acabando el texto en habla actual.

No recibimos pasivamente el significado sino que realizamos un nuevo acto por el que lo actualizamos. Hablamos interpretando el sistema de la lengua textual. Hacemos propio lo que parecía extraño luchando con la distancia cultural. La objetividad de la intención del texto bíblico es condición necesaria para la objetividad de la interpretación.

Resumiendo: en nuestra posición metodológica nos apropiamos del texto bíblico como un acto por el cual hacemos nuestra la realidad enteramente objetiva de la escritura que es independiente tanto del autor como del destinatario y del propio lector. De esta manera, nuestra identidad personal anclada primeramente en un “yo inferior” (ego) al leer el texto bíblico con su

estructura y sentido inmanente logra a través de un esfuerzo subjetivo de interpretación restituir su significado, transformando la propia identidad en un “yo superior”, esto es, hacemos propio lo que en principio nos parecía extraño forjando un nuevo “yo”, un verdadero “sí mismo” y acabando así definitivamente el texto en el habla actual cumpliendo la *voluntad textual* implícita tácitamente: *la verdadera conversión*.

Esto quiere decir que el lector de la Palabra Revelada no asiste pasivamente como mero espectador de la trama narrativa sino que participa activamente implicando su identidad personal como portavoz de la identidad narrativa. Internalizar en la propia personalidad los pensamientos, gestos y doctrina de Jesús da lugar a nuevas actitudes configurando una nueva identidad cristiana.

El lector deja de ser mero lector para convertirse en portavoz aplicándose a sí mismo las palabras de Jesús: “*Mi doctrina no es mía, sino del que me ha enviado.*” (*Jn 7, 16*).

Es lo que en el cristianismo se expresaría como una “verdadera iluminación” en la conciencia de la persona mediante la cual se descubre en la Persona de Cristo el designio eterno de Dios procurando comprender el significado de sus gestos, palabras, actitudes y señales realizados por Él mismo. (*Catecismo de la Iglesia Católica, 426 y ss.*)

II. LA CONSTRUCCIÓN DE LA IDENTIDAD CRISTIANA. (CIUDADANOS DEL REINO DE DIOS Y SU IGLESIA)

Es obvio que por nosotros mismos y solo con nuestras propias fuerzas no podemos construir una identidad cristiana porque desde la fe bíblica se nos dice que es el Espíritu Santo el principio de toda acción y el que actúa de múltiples maneras en la construcción y edificación de todo el Cuerpo cuya cabeza es Cristo. La Palabra de Dios revelada es la que tiene el poder de construir el edificio de la Iglesia que es comunión con Jesús (un solo cuerpo) y que es su Esposa ya que es Templo del Espíritu Santo. La Iglesia de Cristo es una, santa, católica y apostólica a pesar de las heridas de la unidad de la que cada cual tiene su responsabilidad. La construcción de la identidad cristiana es una construcción hacia la unidad mediante una renovación de los colegios apostólicos, una conversión del corazón y la oración en común.

Si tuviésemos que remontarnos a sus orígenes en el cristianismo podría hablarse de una historia sobrenatural cuyo tiempo en el cielo empíreo se mediría en eras donde la gloria de Dios gira eternamente (antes de la creación del cielo y la tierra) y de una historia propiamente natural cuyo tiempo en la tierra se mide en años. Ambas son interdependientes e interactúan de un modo sinérgico en el sentido de que el efecto es superior a la suma de los efectos individuales pues nuestros talentos se magnificarán millones de veces en el cielo.

En realidad desde el paradigma cristiano dos hechos centran la historia del género humano: la Creación y la Redención. Toda la historia de la humanidad es una lucha entre los que aceptan a Dios y los que lo rechazan.

En general las generaciones se suceden sin tener una clara conciencia de esta tragedia de la que son objeto y víctimas.

Si nos detenemos un momento a reflexionar sobre el origen del “cielo” en algunas revelaciones privadas y considerando que efectivamente es una incertidumbre hablar del cielo (**Reino de Dios**), asumiremos que precisamente en la incertidumbre se intuye la única certeza pues lo nuevo siempre suele aparecer como incierto. También es una incertidumbre el momento de nuestra muerte, no sabemos ni estamos seguros de cuando acontecerá. Cualquier momento puede ser el último. Ser uno con lo divino es experimentar la transcendencia de la muerte, es decir, que la muerte es corporal pero no espiritual.

En esa historia sobrenatural se trata de una lucha a nivel espiritual de entendimientos y voluntades humildes y obedientes contra entendimientos y voluntades rebeldes y desobedientes. Combate entre las naturalezas angélicas (fieles y rebeldes) contra el misterio de la divinización de la naturaleza humana. Los ángeles rebeldes no quisieron sujetarse a ninguna criatura encarnada pues consideraron que su naturaleza espiritual era superior a la naturaleza humana. **(1)**

Parece ser que el Plan del Altísimo era sencillo y sublime: crear a seres espirituales angélicos y a seres humanos los cuales serían su pueblo mediante la humanización del Verbo divino. Aunque los ángeles estaban en el llamado cielo empíreo y en gracia, no se les había mostrado la gloria divina cara a cara hasta que con dicha gracia la merecieran siendo obedientes a la voluntad divina.

Lucifer no obedeció considerando inadmisible que la naturaleza humana pudiese ser superior a la espiritual angélica. Esto provocó un desordenado

amor a sí mismo incluso envidiando y codiciando otros dones que no tenía y suscitando un odio mortal e indignación contra Dios, que de la nada les habría creado. Se llegó a creer incluso superior al Altísimo.

Hay que decir que esta encarnación divina tal vez se habría producido hubiesen o no desobedecido el primer hombre y mujer ya que la forma humana sería la misma en sustancia si hubiera conservado el estado de inocencia. Podría pensarse incluso felizmente que el Verbo se habría podido encarnar sin necesidad de sacrificio. (2)

Ya antes de este episodio los ángeles tuvieron inteligencia expresa del ser de Dios, uno en sustancia y trino en personas recibiendo el precepto de que le adorasen y reverenciasen a lo que Lucifer accedió más por fuerza de razón que de amor y voluntad de obedecer. Es decir, la voluntad del ángel se dividió en sí mismo provocando una fisura entre la suya y la divina. Empezaba un conato de soberbia y envidia que se expresaría abiertamente cuando les manifestó Dios su plan de crear una naturaleza humana y criaturas racionales inferiores y que la segunda persona de la Santísima Trinidad se habría de humanizar mediante la llamada *unión hipostática* (el hecho de ser hombre sin dejar de ser Dios) y al que deberían reconocer como Señor.

Se les comunicó también que no solamente deberían obedecer a este Verbo encarnado sino que habían de tener como Reina también a una mujer de la que tomaría carne humana, lo que provocó una resistencia y una indignación contra el Autor de tales misteriosas maravillas y la Rebelión declarada del Príncipe de la Mentira que persuadió a los que le siguieran de que tendrían principados independientes y separados de Cristo.

De todo esto surgió la gran batalla que San Juan nos ha descrito en el

libro del Apocalipsis (*Ap.*, 12, 7) porque los ángeles obedientes pidieron licencia para resistir y contradecir al usurpador y sus seguidores.

Una vez puestos a prueba a los seres espirituales la Mente Suprema creó al hombre y a la mujer con una ley de amor perfecta en un universo que había creado de la nada aun sabiendo que también caerían y matarían en sí mismo la Gracia y que sería despojado del cielo. Adán y Eva con su desobediencia rompió la armonía creada como cabeza de todos llevando la infelicidad.

Esto nos lleva al paradigma de la historia propiamente natural del cristianismo y su concepto del “reino de Dios”. Como se ha indicado el hecho de la Creación y el hecho de la Redención son los ejes de la historia de la humanidad a lo que se puede añadir la última fase que desarrollaría el hecho de la Redención y que sería la santificación de la humanidad.

Dios como creador está en continuo acto cerca del ser humano y así como el alma es la que infunde la vida al cuerpo si Dios se retirara de las cosas creadas quedarían sin vida. Dios está oculto en el calor del fuego, en el poder del agua para aplacar la sed, en el alimento que sacia, en el Sol con su luz, en el aire que nos permite respirar y así en todo lo demás. En todas las cosas nos visita aunque el ser humano ingratamente no sólo no lo agradece sino que le ofende ignorándole.

En el Génesis (origen) relata el comienzo del universo, del género humano. Establece la relación de Dios con el ser humano creado por él. Describe también cómo otorga felicidad y bien a cambio de obediencia. Adán desobedeció porque no estuvo atento a los deseos y gustos del alma para rechazar las pasiones humanas al igual que Eva: *“La mujer vio que el fruto del árbol era hermoso, y le dieron ganas de comerlo y de llegar a tener*

entendimiento” (*Génesis 3,6*). No retuvieron en cambio el mandato y los deseos de Dios sintiendo desagrado a todo lo que fuese contrario a la voluntad divina. Por esta desobediencia el alma fue envenenada volviéndola tan deforme que hizo desaparecer en ella la imagen divina siendo el dolor del injerto divino lo único que puede destruir este veneno haciendo un vacío en el alma que sea llenado por la Gracia divina.

Puede decirse que el símbolo de la manzana prohibida es que incitaba a tomar para sí mismo, para el ego, en vez de darlo generosamente a otros. El símbolo de la serpiente sería por su parte la encarnación de los deseos de Adán y Eva, un ser mediante el que podían hacer y obtener todo lo que deseaban sin contar con Dios.

Ambos quieren retener el saber del conocimiento del bien y del mal. Después de este primer acto egoísta Eva se acerca a Adán y le ofrece la fruta que lamentablemente no rechaza. Son instruidos así en el mal que no debieran haber conocido jamás. De esta manera al separarse de Dios la concupiscencia se estableció no sólo en ellos sino en toda la naturaleza humana que fue degradada. Empieza la dramática lucha entre la voluntad humana y la divina. Todo el dolor y sufrimiento terrenal derivado de ese acto de desobediencia tiene su origen en el desorden producido por un ángel rebelde (Lucifer: el lucero de la mañana) que se creyó semejante al Altísimo y quiso levantar su trono en el Cielo. Sedujo al hombre y la mujer para hacerlos semejantes en la rebeldía contra el Señor y Creador. Como Padre de la Mentira logró engañar a Eva y Adán mezclando confusión diciendo verdades junto a falsedades. Hay una contradicción entre lo que dice Dios (“no comas porque **morirás**) y lo que dice la serpiente (“si comes **vivirás**, se abrirán vuestros ojos”).⁽³⁾

La serpiente actúa ahora con más audacia si cabe: predica a Jesús y su doctrina de otra manera que la verdadera intentando alterar su Palabra e interpretándola falsamente. El mensaje vendría a ser la devaluación de la Eucaristía de sacramento a símbolo, de la presencia real de Jesús a un mero recuerdo, inventando una falsa fe relativa en cuanto a la presencia real de Jesucristo en el sacramento eucarístico. Ahora intenta persuadirnos para que no tomemos del antídoto eucarístico y así no podamos sanar.

Así pues, la serpiente, el espíritu maligno se presenta siempre con apariencia benéfica y aspecto común intentando venderte la Palabra de Dios pero adulterada. Si no hay una comunicación frecuente de las almas con Dios a través de la oración caen fácilmente en la celada. Ataca sobre todo a la parte moral con sus soberbias insinuando que (no es necesario humillarse en el sacramento de la confesión) se puede arrepentir uno por sí mismo tratando directamente con Dios. Después ataca al espíritu quitando el santo temor de Dios y haciendo su propia voluntad humana sin contar con la divina.

El verdadero Espíritu en el camino de la verdadera identidad cristiano católica debe reconocer tanto *la transubstanciación* en la fracción del pan como el respeto a la actitud humilde de las personas llenas de la Gracia, especialmente bendiciendo a María como Madre de Dios y nuestra.

El paradigma cristiano contempla la naturaleza humana como intrínsecamente imperfecta debido a la pérdida de la gracia en la decisión de Adán y Eva de desobedecer a Dios en el Jardín del Edén. Esta comprensión de nuestra inclinación pecadora (como una semilla dañada) es esencial para comprender nuestra naturaleza humana y nuestras actitudes. Nuestra rebelión contra Dios rechazando su Voluntad causó un cambio dramático,

trascendental, de nuestra relación con los demás e incluso con nosotros mismos.

Desde ese instante el acceso al **Reino de Dios** que debería haberse producido sin esfuerzo ni dolor debe hacerse como una conquista echando mano de la “violencia santa” contra la violencia maligna. En el ser humano existen dos naturalezas que luchan y combaten entre sí : una carnal (estímulos de la culpa) y otra espiritual (estímulos de la Gracia).

Así como la prueba de no comer del fruto prohibido era un símbolo del derecho divino y del deber a la obediencia del ser humano en la condición humana presente esa misma ley de justicia tiene establecido que la unión, la fusión con la divinidad se realice únicamente cuando se confirme en la gracia. Esto exige un esfuerzo en la construcción de la verdadera identidad por parte humana y un abandonarse a la gracia. Un conocerse a sí mismo reconociendo los propios límites.

No obstante la Voluntad Divina ya sabía que el hombre y la mujer caerían y antes de que sucediese preparó el acto de la Redención y de la unión hipostática para reparar esa desunión y cubrir todos los actos de las criaturas con dicha Voluntad. Esta Redención es también llamado el árbol de la Vida en el que todas las almas que se mantienen unidas a este árbol recibirán *vida de Gracia* en la tierra y cuando lo hayan hecho crecer *Vida de gloria* en la eternidad.

Ya desde el pacto que Dios hace con Abram es sumamente significativo que el ser humano antes de ser elevado nuevamente al estado de Gracia le sea impartida una nueva orden que después explicitará Jesucristo: “*Vosotros, pues, sed perfectos como es perfecto vuestro Padre celestial.*” (Mateo 5, 48). “*Cuando Abram tenía 99 años, se le apareció Yahveh y le dijo: «Yo soy El*

Sadday, anda en mi presencia y sé perfecto. (Génesis 17, 1)). Y hay que tener en cuenta que incluso en los libros canónicos está escrito que a los patriarcas y a los profetas que no poseían la Gracia pero eran justos fueron extasiados con la visión de Dios y oyeron su voz. (***Ezequiel 1, 26,27***).

En la historia de Jacob en el AT y su visión de la escalera que llegaba hasta el cielo en un sueño señala la existencia de una comunicación entre el cielo y la tierra. El cielo, donde se encuentra el trono de Dios y del que los ángeles forman el coro de la corte celestial son también mensajeros para cumplir misiones determinadas. Los ángeles aparecen subiendo y bajando por la escalera portando mensajes divinos a la humanidad.

Actualmente existe una comunión entre la Iglesia del Cielo y la de la Tierra. La Iglesia peregrina de la Tierra está constituida por los cristianos que todavía están en camino y la Iglesia del Cielo son las personas santas glorificadas. También existe otro estado que son los difuntos que se purifican, siendo estos testados en grados muy diversos los que participan de la voluntad divina y su amor. ⁽⁴⁾

Jacob decide erigir un monumento de piedra como memorial o recuerdo de la aparición ya que en la narración la trascendencia de Dios es patente. La visión manifiesta que Dios está en el cielo y no en la piedra que viene a representar obviamente algo sagrado.

En el Antiguo Testamento consta la Sabiduría que le fue otorgada a Salomón cuyos hechos no fueron correctos a los ojos de Dios. Se nos relata su idolatría: *“porque me ha abandonado y se ha postrado ante Astarté, diosa de los sidonios, ante Kemós, dios de Moab, y ante Milkom, dios de los ammonitas, y no ha seguido mis caminos haciendo lo que es justo a mis ojos,*

ni mis decretos ni mis sentencias como su padre David. (1 Reyes 11, 33).

Esto nos mueve a reflexión sobre la importancia de la humildad ante los dones de Dios de la que la Virgen María es el modelo a seguir. María es el instrumento operante para que por medio de Jesús fuera anulada la culpa. Nos enseña la importancia de la humildad aunque se posea la mayor Sabiduría del mundo para evitar que nos posesionemos de los dones como si fueran propios.

Una actitud sabia como la de María es humilde y mansa. Está instalada en el desinterés de las cosas mundanas, le encanta vivir el anonimato y en el silencio. No juzga ni presupone y nunca invade el santuario de las intenciones. Trata a los demás con la misma comprensión con que se trata a sí misma. Está atareada en vaciarse de sí misma eliminando la vanidad y considerando cualquier cosa sin posesionarse de ella mediante apropiaciones de ideas, personas, éxitos, cargos etc. No se apropia de nada porque comprende que es fácil transformarse en propietario de “sí mismo” mediante la propia adherencia emocional. María es la Madre de la Sabiduría.

María, la Inmaculada Concepción, concebida sin pecado original poseía la máxima pureza posible en una criatura de Dios por lo que la Santísima Trinidad descendió lo que era también para Ella “el Hijo” por misterio de gracia. El “sí” de María anuló el “no” que Eva opuso al mandato divino. Podría objetarse que María como criatura humana algo tendría que haber heredado de sus padres contaminados como todos del pecado original, pero esta argumentación no tiene en cuenta que el mal no está en la naturaleza humana sino en su voluntad. Por decirlo de alguna manera el recipiente humano no cambia sino el contenido. El alma de María era inmune de toda

culpa y la raza humana no la contaminó porque entre su voluntad y la de Dios no había división. En este sentido puede decirse que la voluntad lo es todo pudiéndose decir que lo que Dios es por naturaleza, Ella lo es por gracia.

Según revelaciones privadas (*Sor María de Jesús de Ágreda. Mística Ciudad de Dios*) el hecho de nacer el Verbo humanado en un lugar humilde y sin la más mínima ostentación obedecía entre otras razones virtuosas a la disposición divina de ocultar a Lucifer y sus ministros el misterio de la Encarnación del Verbo pues si lo hubiesen conocido es evidente que no le hubieran provocado la muerte sino que incluso la habrían impedido para evitar así la Redención humana y la apertura del cielo.

Todo este episodio bíblico del nacimiento de Jesús en Belén muestra también la ausencia de sacerdotes en la visita a la gruta, ya que aunque ellos conocían por las escrituras el tiempo y lugar de la venida del Mesías parece ser que ninguno se movió de donde estaba, es más, mientras que ellos lo señalaron a los magos, ni se inmutaron en dar un paso para ir en busca de su venida no pareciéndole tan importante. Otros asuntos mundanos (apego a las familias, al interés, a cosas exteriores...) les eran más urgentes que la Encarnación. Símbolo todo esto de la lucha entre la vanidad y la humildad, de los hijos de la soberbia de Lucifer frente a los hijos de la humildad y mansedumbre de Cristo.

Una historia del cristianismo tiene claros y oscuros. Junto a una historia sagrada de la salvación, de santos y mártires nos encontramos con dinastías cristianas de guerras y atrocidades en las que vemos en la clara intención de

los poderosos la pretensión de alcanzar también el poder temporal sirviéndose de creencias y valores religiosos, un anti-testimonio en suma de los que se presentan como “cristianos” negándolo con los hechos. Parece como si el mensaje de Jesucristo de **“Mi Reino no es de este mundo”** (*Juan 18:36*) se viese reemplazado por una dualidad de poder en la que una autoridad sagrada se complementase con la del poder real mundano. Jesús nunca fue un político y predicaba la paz.⁽⁵⁾

La historia después del nacimiento de Jesucristo puede dividirse en tres periodos básicos de la lucha entre la fe cristiana y la anticristiana. El año simbólico del 666 manifiesta un período anticristiano a través del fenómeno del Islam que *“niega directamente el misterio de la Divina Trinidad y la Divinidad de Nuestro Señor Jesucristo”*.

Después estaría el año 1332 (666 por 2) es cuando los filósofos comienzan a dar un valor exclusivo de la verdad a la razón. La reforma protestante rechazará la Tradición como fuente divina de revelación aceptando solo a la Sagrada Escritura que al ser interpretada exclusivamente por la razón desecha el Magisterio auténtico de la Iglesia a quien Cristo confió el depósito de la fe. La división de la Iglesia es otro exponente anticristiano.

El Conciliarismo (1378-1417) en que el Concilio estaría por encima del Papa es algo que tiene su origen en el Cisma de Occidente fue una de las causas de que se retrasase el Concilio de Trento (1545-1563). Todo esto unido a un fuerte nacionalismo alemán anti-romano y a un rechazo a todo lo que pudiese venir de Roma (lucha entre el imperio y el papado). Atacar la autoridad del Papa en gran medida iba unido a atacar la autoridad del emperador. Los príncipes siguieron las banderas de Lutero porque les

posibilitaba conseguir un poder mayor. Lucha entre el poder espiritual y el poder temporal. Todo esto está en el ambiente de lo que se denominó Reforma a lo que en realidad fue una Ruptura. La Cristiandad fue dividida y debilitada. El Magisterio de la Iglesia de origen divino es rechazada y solo quedaría la Escritura a la que cualquier persona puede interpretar libremente.

La Ruptura con la Iglesia se caracteriza por tres rechazos esenciales:

1) *El rechazo de las obras* como eficaces para conseguir la salvación.

No es necesario el sacramento de la confesión basta sólo la fe.

2) *El rechazo de la Tradición.*

Las Escrituras se interpretan libremente y podemos entendernos con Dios directamente.

3) *El rechazo del Magisterio.*

Sobra la Iglesia y el sacramento del orden.

Todos estos rechazos van a confluir en el de la “*transubstanciación*” (presencia real de Cristo en la eucaristía) que es el eje central de la doctrina cristiano-católica lo que es de una enorme gravedad, sustituyéndola por otra teoría llamada “*consubstanciación*” que no permite que después de la consagración pueda adorarse a Jesús en la reserva eucarística pues supuestamente ya no estaría. La fe católica cree que la presencia eucarística de Cristo comienza en el momento de la consagración y dura todo el tiempo que subsistan las especies eucarísticas.

Ruptura quiere decir romper las relaciones entre las personas y en el caso de la fe cristiano católica, ruptura es un daño, una fractura en el

depósito de la fe que Cristo hizo a su esposa la Iglesia. Reformar en cambio (volver a formar) supone una modificación con la intención de mejorar. Reformar está más cerca de “renovar” en el sentido de sustituir una cosa vieja por otra nueva de la misma clase. Renovación de la Iglesia sí, ruptura no.

Si se dice que la doctrina de los hermanos separados (o mejor: de los hermanos con los que buscamos la Verdad en la Palabra de Dios) no es correcta no quiere decir que faltemos al amor. El mismo Jesucristo trataba a los hermanos de la religión judaica como los escribas y fariseos denominándolos “hipócritas” aunque tenían las mismas Escrituras y el mismo Dios pues su interpretación difería de la de ellos. Jesucristo no violó el mandamiento del amor cuando llamó a los escribas y fariseos como “hipócritas” (*Mateo 23, 14*). Decir la verdad no falta al amor. “Hipocresía” significa propiamente una acción de desempeñar un papel teatral y por tanto referido a lo que no es verdadero. Esta falsa actitud es una postura que podemos encontrarla en cualquier persona sea del credo que sea.

Hay que recordar por otra parte, que es con el Papa S. Damaso (366-384) cuando se llevó a cabo la gran revisión de los textos evangélicos en lengua latina, realizada por el gran trabajo de S. Jerónimo lo que contribuyó a que el mensaje cristiano fuese presentado de una manera compacta.

El canon de la Biblia fue creado por la iglesia primitiva que en las cartas de San Ignacio de Antioquía a la iglesia de Esmirna la menciona concretamente como “católica” (universal) bajo el pontificado del Papa san Dámaso I, en el Sínodo de Roma del año 382. Es irracional que las iglesias separadas nieguen la autoridad del Papa en materia de fe pero aceptaron la lista y contenidos de los libros de la Biblia que fueron realizados bajo dicha

autoridad.

Otra irracionalidad sería la que hermanos separados acepten que en las bodas de Caná (S. *Juan 2*) el agua fue convertido en vino y también que la Palabra se hizo carne (*“Y aquel Verbo fue hecho carne, y habitó entre nosotros...”* S. *Juan 1, 14. Biblia Reina Valera.*) y en cambio no acepten que el vino se hace sangre de Jesucristo y el pan se hace carne. Porque no es cuestión de “entender” sino de “creer” siendo fieles a la Palabra Revelada.

Y por último llegaríamos al año 1998 (666 por 3) es el período en que la masonería se infiltrará en la Iglesia llegando al vértice de la apostasía. La apostasía es negar la fe en Jesucristo como una persona de la Santísima Trinidad que es algo que está fundamentado bíblicamente a pesar de la limitación del ser humano en la comprensión del misterio del Dios uno y trino. (6)

Para vivir en el Querer Divino y sin divisiones se necesita disponer a las almas y darle parte de los bienes divinos para hacer regresar al hombre y la mujer sobre el camino de su origen, tal y como fue creado al principio en estado de gracia. Esto lo realizó la Trinidad Sacrosanta concibiendo en una criatura humana Virgen con el germen eterno del Espíritu Santo concibiéndolo en su seno sin obra del hombre. Esta generación es pues humano-divina y posibilitó la generación de las almas. La Virgen fue el inicio, el origen, el germen de hacer la voluntad de Dios así en la tierra como en el Cielo.

Explicando el poder del Espíritu Santo en el Bautizo hay locuciones en las que se ponen las siguientes frases como Revelación pública de María:

“En el gran Misterio de Mi vientre, el Verbo se hizo Carne, tomando para Sí mismo una nueva naturaleza Humana. Él usó Su Humanidad para

revelarse a Sí mismo. El Espíritu Santo actúa de diferente manera. Él no asume una nueva naturaleza humana, sino que usa a cada persona bautizada como Su instrumento. A medida que la persona bautizada permite que el Espíritu actúe a través de ella, la Iglesia y el mundo ven la realidad del Espíritu y son bendecidos por Sus acciones.” (Director Espiritual Monseñor John Esseff Scranton, Pensilvania, USA. Locuciones para el Mundo - Año 2013.) <http://www.locutions.org/>

No todos los que dicen que tienen el Espíritu Santo hablan con verdad. Tenemos en las Escrituras el ejemplo entre otros de dos personas llenas del Espíritu Santo y su actitud humilde. El ángel Gabriel comunica a María que concebirá y dará luz un hijo y al preguntar ella cómo será posible: *“El ángel le respondió: «El **Espíritu Santo** vendrá sobre ti y el poder del Altísimo te cubrirá con su sombra; por eso el que ha de nacer será santo y será llamado Hijo de Dios.” (Lucas 1, 35)*

Más tarde cuando María visita a Isabel y al saludarla: *“Y sucedió que, en cuanto oyó Isabel el saludo de María, saltó de gozo el niño en su seno, e Isabel quedó llena de **Espíritu Santo**; y exclamando con gran voz, dijo: «Bendita tú entre las mujeres y bendito el fruto de tu seno; y ¿de dónde a mí que la madre de mi Señor venga a mí?” (Lucas 1, 41-43). Negritas del autor.*

La finalidad de la Creación la expresó claramente Jesucristo en la oración por excelencia del *Padrenuestro* en la que se pide que todos santifiquen el nombre del Padre a fin de que venga su reino haciéndose su Voluntad tanto en el Cielo como en la tierra. Jesucristo enseñó que siempre que oremos debemos repetir su oración tal y como Él hizo: *“Los dejó y se fue*

a orar por tercera vez, repitiendo las mismas palabras.” (Mateo 26, 44)

-“*Padre nuestro*” es el Padre del Verbo. No nos cansamos de repetir y pronunciar esta palabra porque somos los pequeñuelos de Dios “que está en los cielos”. -“*Santificado sea tu Nombre*” que por un exceso de amor ha creado la Humanidad. -“*Venga a nosotros tu Reino*” en los corazones, en las familias, en las naciones. Trabajemos por este Reino. -“*Hágase tu Voluntad así en la tierra como en el cielo*” para ello anulamos nuestra voluntad en la divina teniendo como ideal las virtudes teologales. -“*Danos nuestro pan de cada día*” es una insistencia necesaria en esta vida porque en el cielo sólo nos alimentaremos de Dios. -“*Perdónanos nuestras deudas como nosotros perdonamos a nuestros deudores*” ya que tenemos deudas con todos. Perdonar para ser perdonados. -“*No nos dejes caer en la tentación, mas líbranos del Maligno*” porque queremos reconocer humildemente como realmente somos tan débiles que necesitamos la ayuda en la tentación.

La misión de Jesús al encarnarse era además de redimir a los hombres, la de devolver el equilibrio en la creación universal, equilibrio que había sido roto por Lucifer al rebelarse con su voluntad llena de odio contra la voluntad divina.

Estamos en el exilio terrestre con una voluntad humana desordenada fruto de las debilidades y miserias del pecado original de desobediencia a la voluntad divina. Somos potencialmente ciudadanos del Reino de Dios que para conseguir el pasaporte correspondiente que nos permita entrar, necesitamos hacer un ACTO decidido y verdadero de nuestra voluntad sino la divina. Este ACTO es la buena voluntad resuelta de no hacer jamás la propia voluntad incluso a costa de la propia vida y sacrificio, con el dolor y padecimiento que ello supone. (7)

Una vez obtenido este pasaporte y como hemos simbolizado anteriormente hemos permitido ser injertados por la voluntad divina tenemos que aprender el idioma celestial y sus costumbres con una nueva mentalidad. Después de este estudio de la Palabra revelada y de su práctica podrán declararnos “ciudadanos” del reino de la Divina Voluntad. Derecho que incluye la propiedad y el de vivir en él como si fuese nuestra propia patria.

“Ciudadanos del Reino” quiere decir que nos convertimos en pacificadores entre Dios y las criaturas aunque nos sintamos como ciudadanos extraviados de la patria celestial pero sin perder los derechos de ciudadanía.

El privilegio de tener una identidad cristiana injertada es que trabajamos en el mismo campo de nuestras almas junto al Agricultor celeste. Trabajar juntos garantiza a ambos la cosecha en el mismo reino. Es absurdo pensar que si cosechamos con Jesús en su terreno cosecharemos en campo extraño.

Cuando construimos la identidad cristiana en el campo del alma está como siempre el peligro de la cizaña porque la bondad y el bien lamentablemente no desarma a la mala voluntad; y no la hace inocua porque hay almas que han caído en manos del Enemigo y son insensibles a todo lo superior y sobrenatural. La interpretación del que tiene mala voluntad es considerar que la bondad es debilidad y que es lícito pisotearla agudizando aún más su mala voluntad. La identidad cristiana constituirá en su unión con la Humanidad del Hijo de Dios esa *“Humanidad perfecta por participación”* que realizará la plenitud de Cristo. Símbolo de ello es el fuego del Espíritu

Santo en Pentecostés⁽⁸⁾.

En el drama de la historia de la salvación la identidad humana sometida al pecado tiende a disgregarse, en cambio la identidad cristiana injertada en la gracia santificante tiende a unir y a convocar. Analogía de esto sería la “torre de Babel” en el que el orgullo humano dispersó a la humanidad en lenguas distintas. En cambio la gracia de Pentecostés contrariamente congrega y nos une en el mismo Espíritu.

Existía una incapacidad ente los primeros discípulos cristianos, a pesar de tener el mejor Maestro y estar con Él, para recibir sus enseñanzas. Era necesaria una transformación radical que se reservaba para Pentecostés como momento inicial de la iluminación de lo que podríamos denominar la visita del “super-iluminador espiritual” (el Paráclito, el Abogado). Esta ayuda sobrenatural es necesaria y vital para la formación de la identidad cristiana en el tiempo y para profundizar en la enseñanza de Cristo.

La Iglesia tiene como cabeza mística a Jesús siendo Pedro la cabeza visible. Jesús es una única cosa con su Iglesia. La Iglesia Católica, Apostólica y Romana es la única iglesia fundada por Jesucristo y tiene como garantía las verdades enseñadas. En cualquier organismo es indiscutible el principio de jerarquía.⁽⁹⁾

En el evangelio de Juan, antes de Pentecostés, se nos dice que en la tarde del primer día de la semana Jesús se aparece a los discípulos (excepto Tomás que estaba ausente) y según Lucas mostrando las manos y el costado para que no duden ni se turbaran.

Esta aparición es de excepcional importancia y una escena de transcendental alcance teológico en el sentido de que se trata de conocer más profundamente la divinidad de Jesucristo y su misión. Así como el Padre

envía a Jesús, sus discípulos van a ser enviados como “apóstoles” (*Mt 28, 19; Jn 17, 18*) El hecho de recibir poder para perdonar los pecados era algo insólito pues sólo Dios en el Antiguo Testamento perdonaba los pecados. Aquí el Espíritu Santo da a los apóstoles una misión de “perdón” que exige un juicio lo que se refiere al poder sacramental.

La catolicidad de la identidad cristiana está fundamentada bíblicamente. El Señor no quiere ninguna división en su Iglesia y para ello no podemos dejar que ni los errados ni los que tergiversan nos convenzan con sus falsas doctrinas pues sostendrán unas verdades parciales que parecen justas pero que en realidad buscan sus propios intereses mundanos. La gran tribulación de la Iglesia se refiere a los pastores que han desobedecido y han sido desleales. Se hace necesario apartarlos para que no causen mayores estragos. La Iglesia necesita un Nuevo Pentecostés. **(10)**

Porque la identidad cristiana es la actitud que continua las enseñanzas de Jesús y no le abandona cuando pregunta “¿*También vosotros queréis marcharos?*” (**Juan 6,67**) cuando anuncia la Eucaristía y los discípulos se dividen porque acoger la Eucaristía es acogerlo a Él mismo. Cuando decimos “creo en la Eucaristía” hacemos un ACTO de fe ya que tomamos a Dios en el espíritu. Los sacramentos son canales de la gracia para nuestra salvación. No son símbolos sino instrumentos de salvación.

Un ídolo es una figura o imagen que representa a un ser sobrenatural y al que se adora y se rinde culto como si fuera la divinidad misma. Si consideramos la Eucaristía como una mera representación de la divinidad a la que se adora incurrimos en “idolatría”. Tampoco podemos considerar la Eucaristía como un “talisman” al que se le atribuye un poder mágico capaz de dar suerte o salud para beneficio de la persona que lo tenga

En el cristianismo en cambio la Eucaristía es un don concedido por Dios en beneficio de la comunidad, un carisma. Nuestro Carisma es la Eucaristía. Nos “dejamos moler”, “desaparecemos” y al mismo tiempo “brillamos”, “somos luz”. Transmitimos a Dios no a nosotros mismos.

La Eucaristía es: o todo o nada, es el sol de la fe. Es el Universo, es la fuerza que crea y puede destruir el Universo. La Eucaristía es también además de Jesús, Espíritu Santo y Dios Padre porque en Jesús está la Trinidad. Es el Cielo hecho materia. (*Véase: El reinado Eucarístico. Dictados de Jesús a Marga. www.vdcj.org. Mensajes 09-11-2013: 11-03-2015*)

¿Por qué decimos que la Iglesia católica (universal) es la Iglesia que fundó Jesucristo? Ya nos hemos referido a la declaración de Pedro que afirma claramente que Jesús es el Mesías.⁽¹¹⁾ Jesús le da el mandato a Pedro de apacentar las ovejas y los corderos (*Juan 21, 15*) y siempre hay un claro respaldo a Pedro como jefe de los apóstoles « *...y lo que ates en la tierra quedará atado en los cielos, y lo que desates en la tierra quedará desatado en los cielos.* » como autoridad y en Pentecostés es cuando el Espíritu Santo le da fuego a la Iglesia naciente en Jerusalén estando todos los apóstoles junto con María, la madre de Jesús en oración. (*Hechos 1, 12-14*) El día de Pentecostés estaban reunidos y había gentes de todas las naciones (universal, católica) que podían entenderse entre ellos sin dificultad (***Hechos 2, 1-8***)

Es significativo que ese mismo día de Pentecostés junto a los apóstoles estuviese María, un icono escatológico, una imagen de la Iglesia pues podemos contemplar en ella la Iglesia naciente en su “peregrinación de la fe”. María como Madre de Dios, nueva Eva, Madre de la Iglesia. La importancia

de la actitud de María para la identidad cristiana es tomarla como ejemplo ya que aunque vivió en un mundo corrompido (a diferencia de Eva) como nosotros no quiso lesionar su pureza ni siquiera con un pensamiento impuro. Además la Virgen es imagen de la Iglesia de Jesús (“*Ahí tienes a tu madre...Cuídala*”) y el legado más precioso.



El Papa Francisco mantuvo una reunión privada con el emperador de Japón, Naruhito, en el Palacio Imperial de Tokyo. (25 de noviembre de 2019. Foto: Vatican Media)

La Eucaristía está relacionada con la fiesta de los Panes sin Levadura (*Hag Ha-Matzah*, en hebreo), una fiesta que comenzó cuando se celebró la primera Pascua de los judíos como una conmemoración del éxodo de la esclavitud en Egipto, siendo esta fiesta una de las tres fiestas de purificación. El término “levadura” ha sido utilizado por Jesús con una connotación

negativa: («*Abrid los ojos y guardaos de la levadura de los fariseos y de la levadura de Herodes.*» Marcos 8,15; «*Guardaos de la levadura de los fariseos, que es la hipocresía.* Lucas 12, 1) El Antiguo Testamento recalca la importancia de que nuestra casa esté limpia de toda levadura y junto a este significado el deseo de Dios que su pueblo sea santo, al igual que Él es santo. Supone una consagración del pueblo a Dios. Desde los comienzos del cristianismo su identidad esencial estaba siempre ligada a la Eucaristía (fracción del pan).

En la cultura judía cuando se celebra la Pascua encontramos una mesa con un mantel, dos candelabros con dos velas, una copa especial llamada de la Pascua muy valorada en la familia. En la cena pascual judía tenemos además un plato que hace juego con la copa, y encima de este plato un paño en el que está envuelto tres panes “sin levadura”. Asimismo está un libro llamado *el Hagada* que cuenta la historia de la Pascua. Esta cena pascual no es una comida más festiva sino que sigue un orden relatado en dicho libro que hay que seguir fielmente siendo un símbolo litúrgico. También se coloca una pequeña gorra (el *hipa*) usada por los varones judíos significando la limitación humana. Y, por fin, está el manto simbolizando la Ley con una inscripción referente a la santidad.

Cuando los judíos iban subiendo a Jerusalén para la Pascua y la expiación lo primero que encontraban era el monte Sión y cantaban de alegría al saber que estaban cerca del Templo. La identidad cristiana ve en estas palabras un símbolo pues al igual que en el Templo había un Sumo sacerdote terrenal nuestro sacerdote Jesucristo está en el Cielo. Participar en la Eucaristía es tener esa alegría que sentían los judíos al ver el monte Sión. **(12)**

El sacrificio de la Eucaristía es una renovación no una repetición porque el sacrificio de Jesús todavía no se ha terminado. Cristo es el Sumo Sacerdote y nosotros vamos al Padre por medio de Jesús. En el Templo judío era prefigura del Cielo. Antes en el Antiguo pacto el sumo sacerdote era un hombre, ahora es Jesucristo como verdadero Dios y como verdadero hombre. Cristo entró al Cielo para siempre pero el sacrificio continua y con su sangre ora por nuestros pecados. El sacrificio de Jesús está vigente ministrando por nosotros. La Eucaristía no solo es Pascua judía sino sacrificio memorial. El mismo Jesús está con nosotros en la Eucaristía.

No es lo mismo “memorial” que “figurado”. “Memorial” tiene relación con la palabra “anámnesis” (memoria, recuerdo) y la connotación de sacrificio. Los sacrificios memoriales en Israel eran sacrificios de animales para que Dios se acordara del pacto con su pueblo. Mas que referirse a un recuerdo de los fieles se trata de que Dios recuerde el pacto. Se celebra la Eucaristía no para acordarse de Jesús meramente sino como memorial de que hay una Nueva Alianza en el sacrificio de Cristo. En el Antiguo Testamento los sacrificios eran “sacrificios de comunión” para que Dios se acuerde de nosotros. **(13)**

En el Cenáculo las palabras en la última cena parece referirse Jesús al hecho de que no da sólo su cuerpo sino todo su ser ya que la Eucaristía no es solo presencia sino alimento espiritual. Esta manera misteriosa de “alimentarse” de Jesús se llama “sacramento” (*mystérium*). Humanamente y racionalmente no podemos comprender la *transubstanciación* (conversión del pan y vino en el cuerpo y la sangre de Jesús) pero como dijo Pedro Él es el que tiene Palabras de vida eterna. El libro de los Hechos de los Apóstoles

nos dice que según la promesa del Señor, recibieron el Espíritu Santo, y que tenían la misión de llevar a plenitud la consagración bautismal por medio del don del Espíritu. Pablo lo hizo imponiendo las manos sobre los que habían sido bautizados, y sobre ellos vino el Espíritu Santo y empezaron a hablar en lenguas y profetizar. Los Obispos como sucesores de los Apóstoles (con la ayuda de los presbíteros) han recibido también esta misión. El Espíritu Santo actúa invisiblemente a través de carismas y vocaciones diversas, confesando una misma fe en la unidad. (14)

Él nos da a través del sacramento eucarístico las “arras” o las “primicias” de nuestra herencia en el cielo (*Cf. Rm 8, 23; 2 Co 1, 21*) pues gracias a este poder del Espíritu Santo injertados en la Vid verdadera hará que podamos dar frutos y nos restablece como seres espirituales en el Paraíso. Asimismo por la efusión del Espíritu la Iglesia se manifiesta al mundo actuando por los sacramentos (economía sacramental). Son los dones de su Espíritu de Amor, de sabiduría, entendimientos, consejo, fortaleza, piedad y temor de Dios.

Nos preparamos para recibir el don prodigioso del segundo Pentecostés que vendrá para hacer volver a esta humanidad que se ha vuelto pagana a la plena comunión con su Creador.

En la cosmovisión judaica se entendía por «reino de Dios» la demostración de su señorío y poder terrenal al final de la historia y su reconocimiento por toda la creación. En cambio, con la mayor parte de la enseñanza de Jesús especialmente mediante las parábolas, Jesús pretendía que el pueblo profundizase en otra comprensión sobrenatural del reino de Dios. Incluso sus curaciones aparecen como anticipaciones de lo que sería la

vida en el reino de Dios. Este reino está ahora oculto, aunque se inaugura y se anticipa en Jesús. Jesús enseñaba el reino de Dios mediante las parábolas, pero su vida era realmente la parábola del reino por antonomasia.

El **Reino de Dios** exigirá una reorientación de la vida, una reconstrucción de la identidad humana, una llamada a «creer en la buena noticia» relaciona la predicación de Jesús y expresada en los términos «fe», y «*evangelio*» (buena noticia) que tanta relevancia tienen en todo el NT. El Reino de los cielos es semejante a un tesoro. La Iglesia se renovará a través del tiempo a través de los colegios apostólicos para la transmisión de esta fe. (15)

La autoridad de la Iglesia de Cristo (no las iglesias de Cristo) está fuera de cuestión también cuando el mismo Pablo ilustra la unidad de los creyentes con una analogía: el cuerpo (la Iglesia con Cristo como cabeza) la del edificio como piedra principal y la Iglesia como esposa de Cristo: “*Bajo sus pies sometió todas las cosas y le constituyó Cabeza suprema de la Iglesia, que es su Cuerpo, la Plenitud del que lo llena todo en todo.*” (Efesios 1, 22-23)

Pero desgraciadamente hasta en los países llamados católicos el Dios de la Eucaristía es con bastante frecuencia *el Dios desconocido*, cuando tristemente no es el Dios abandonado. Ese Dios desconocido que en sombra y bajo imágenes es buscado en todas las religiones. Aunque es cierto que ríos de sangre de mártires fueron en su mayor parte gentiles convertidos a Cristo pues Jesús llama a todos a su Reino al que pueden pertenecer los que quieran no teniéndoseles en cuenta su pasado.

Para que el alma sea iluminada se necesita un iluminador y en el

cristianismo el Espíritu Santo es el iluminador superespiritual que revela al ser humano su dignidad real, esto es, la de ser un dios por participación. Esto quiere decir completando toda la exposición anterior que para ser de Jesús tenemos que “regenerarnos”, esto es, hay que hacerse un alma nueva, un nuevo yo despojándonos de los compromisos e ideas del mundo y abrazar la Idea de Jesús para vivirla integralmente. Esto es un nuevo nacer como le indicó Jesús a Nicodemo y confirmado por Pablo:

“Dejando, pues, vuestra antigua conducta, despojados del hombre viejo, viciado por la concupiscencias seductoras; renovaos en el espíritu de vuestra mente y vestíos del hombre nuevo creado según Dios en justicia y santidad verdaderas”. (Efesios 4, 22-24. Nuevo Testamento. Eloíno Nácar Fuster y Alberto Colunga Cueto, O.P.)

Se ha teorizado mucho sobre el hecho de hablar en parábolas como si se tratase de ocultar el misterio del reino de Dios, pero esto obviamente no tiene sentido dado que Jesús en los evangelios siempre intenta hacer comprender su camino y adaptándose a la capacidad de los oyentes. La parábola como analogía suscita de por sí una iniciativa individual de intento de comprensión, en lugar de un discurso normativo. La persona tiene que definirse y posicionarse ante ella.

Parece que de lo que se trata es de enfatizar que la conversión depende de la actitud de la propia voluntad humana y de su recepción de la Palabra. Jesús les hablaba en parábolas para que viendo y oyendo sólo perciban lo que les ilumina su voluntad, que es incompleta. **(16)**

Además cuando los apóstoles reciben la explicación se les dice que el que recibe todo de Dios debe dar todo. El que da todo de la gracia recibida

le será dado y con abundancia, en cambio el que sólo da parcialmente o no da nada, incluso lo que tenga le será quitado.

Somos todos potencialmente **ciudadanos del Reino** sean hermanos alejados, cismáticos, orientales o de cualquier religión necesitando para conseguir el pasaporte hacer un acto de buena voluntad aceptando el injerto de la Voluntad divina en nuestros corazones mediante el renacer de la conversión a la fe cristiano católica expresamente o mediante la conciencia moral que ordena practicar el bien.⁽¹⁷⁾

Por otra parte no podemos narrar constantemente el momento de nuestra conversión al recibir la “gracia tumbativa” sin tener en cuenta que estamos siempre en proceso de convertirnos y que francamente hablando en nuestro corazón todavía no reina plenamente Jesús como quisiéramos. No podemos llorar nuestros pecados complacidamente esperando el efecto que pudiera tener en los demás al ver el gran pecador o pecadora que éramos antes. Si nos congratulamos de tal experiencia es porque realmente todavía existe en nosotros. No debemos regodearnos en nuestros pecados y considerar que el más mínimo pecado venial lacera el corazón de Jesús. (*Véase sobre esto el mensaje 13-2-2015: “El Reinado Eucarístico”. Dictados de Jesús a Marga. www.vdcj.org*)

El Reino de Dios se instaurará con la segunda venida de Jesucristo. Los dogmas de la fe católica sobre este tema según el Catecismo de la Iglesia Católica:⁽¹⁸⁾

1) Dogma de la segunda venida de Cristo: “*Cristo vendrá de nuevo con gloria para juzgar a vivos y muertos*” (números 670 a 679) que incluye la predicación del Evangelio por todo el mundo, la conversión de los judíos, la apostasía de la fe, la aparición y el éxito del Anticristo junto a grandes

calamidades naturales provocadas por el hombre.

2) El dogma de la resurrección de los muertos: *“Todos los hombres, réprobos y elegidos, resucitarán con sus cuerpos en el último día.”* (número 997 al 101)

3) Dogma del Juicio Final Universal: *“En el día del juicio comparecerán todos los hombres con sus cuerpos ante el tribunal de Cristo para dar cuenta de sus actos, a fin de que cada uno reciba según lo que haya hecho de bien o haya dejado de hacer durante su vida terrena.”* (números 1038 a 1041)

Mientras tanto estamos todavía como miembros de la Iglesia peregrina en este mundo y contemplamos la Creación. Observando la Creación podemos pensar en el Creador y su origen. Es una obra ordenada y de tiempos sucesivos. El hombre antes de obtener resultados pasa por fracasos antes de progresar. Todo es en base a la paciencia. No se consigue nada con la violencia que es contrario al orden. Las plantas y los animales son nuestro libro vivo al igual que Jesús manifiesta pues quien sabe ver también sabe creer pues tiene siempre delante los cimientos de la fe en el Génesis que vive en la naturaleza.⁽¹⁹⁾

En la creación según el Génesis cuando al principio Dios creó el cielo y la tierra que era un caos, confusión y oscuridad y al hacer la luz, el firmamento, las aguas y todo se nos dice que *“un viento de Dios aleteaba por encima de las aguas.”* (Génesis 1, 2) Más tarde cuando crea al hombre: *“Entonces Yahveh Dios formó al hombre con polvo del suelo, e insufló en sus narices aliento de vida, y resultó el hombre un ser viviente.”* (Génesis 2, 7)

El don del alma es un soplo de Dios que está dentro de la carne generada por los padres. Se trata de conseguir la gracia para que nuestra identidad humana pueda ser injertada por la voluntad divina. Feliz culpa que

nos otorgó tal Redentor a través del cual y su Iglesia podamos adquirir esa identidad cristiana para poder hablar familiarmente con el Padre. Si Cristo vive en nosotros el espíritu vive y si el Espíritu de aquel que resucitó a Jesús vive en nosotros dará nueva vida a nuestros cuerpos mortales por medio del Espíritu de Dios.

En la construcción de la identidad cristiana nos encontramos con signos y símbolos significativos. Si *la Síndone* o Sábana Santa de Turín es el lienzo que según la tradición, envolvió el cuerpo de Jesús cuando fue depositado en el sepulcro y que puede considerarse a la luz de la fe como símbolo y signo de la existencia de Dios, la *tilma* de Juan Diego a quien se le apareció la Virgen que es donde se conserva la imagen impresa sobrenaturalmente de la Virgen de Guadalupe, es asimismo símbolo y signo de la existencia de María. Una imagen no es un ídolo.

Nos encontramos aquí con el tema tan debatido de las imágenes, representaciones sagradas que pueden ser consideradas y tratadas como “ídolos” al dárseles un culto que sólo a Dios puede atribuirse. “Adorar” es reconocer con respeto y sumisión absolutos que la criatura existe por Dios. Si tratásemos a las imágenes o representaciones religiosas como si fuera Dios, o sea, divinizando lo que no es Dios, entonces estaríamos “idolatrando”.

Adorar es una actitud que se caracteriza por el hecho de creer que lo que se adora es Dios. Estamos convencidos de que tal cosa o persona es Dios pues reconocemos un rango superior. Creemos en Dios como Ser Supremo, como divinidad o deidad.

Cuando nos acercamos a *la Tilma* o incluso a *la Sábana Santa* creyendo que es Dios estaríamos incurriendo en grave pecado de idolatría. No podemos

creer que tales objetos inertes en sí mismos sean obviamente Dios. Hay representaciones de la divinidad. Veneramos estas representaciones o signos con sumo respeto por la dignidad que representan, pero no las adoramos.

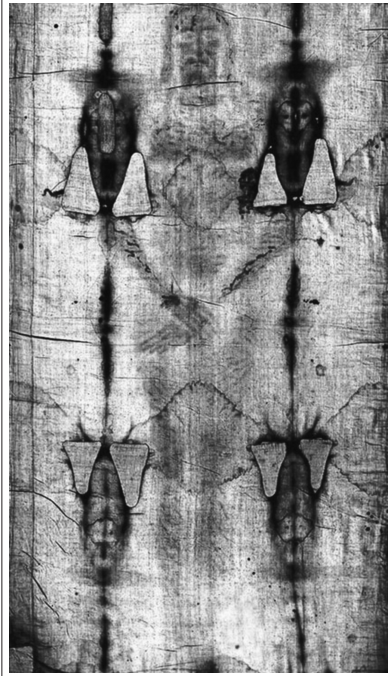
Con respecto a la Tilma de Juan Diego la ciencia ha demostrado que la tela parece ser prácticamente indestructible y que no es obra humana sino de origen sobrenatural (por ejemplo el fenómeno de las pupilas ya que si bien sus dimensiones son microscópicas, el iris y las pupilas de los ojos de la imagen tienen impresa al menos la imagen sumamente detallada de trece personajes). No obstante esto, los escépticos y los que no quieren creer siguen aportando argumentaciones en su contra al igual que con la Sábana Santa.

Aunque parte importante de la investigación científica infiere de sus estudios que la imagen de la Síndone no puede existir dado que parece imposible un método natural o artificial de producción de una imagen con tales características, el espíritu humano-científico parece más bien que continúan buscando una posible explicación para demostrar su increencia.

Desde el punto de vista de un acto de fe sincera es más sencillo: la Síndone es una manifestación visible de que Jesucristo se hizo hombre como segunda persona de la Trinidad, conservando las características humanas y es un claro signo de la existencia de Dios.



Virgen de Guadalupe (México). Tilma de Juan Diego.



La Síndone o Sábana Santa de Turín (Italia).

“Creemos en un solo Dios, Padre Todopoderoso creador del Cielo y de la Tierra...” según proclamamos en el Credo de Nicea-Constantinopla. Las imágenes no son Dios. Un “ídolo” es un dios que no es Dios pero que lo llaman “dios” porque la persona lo cree (es un dios falso).

En cambio, el Dios verdadero no necesita de la creencia de la persona para serlo. Dios es Dios no porque creamos en Él, sino porque verdaderamente lo es. Aunque no lo creamos el Dios verdadero cristiano sigue siendo Dios. Los dioses falsos no son dioses hasta que no crean que lo son porque son productos humanos.

También puede caerse en la idolatría del ministerio creyendo que los que tienen que ser adorados son los pastores o sacerdotes en vez del Señor Dios. A los apóstoles les corresponde la obra de salvación pero a Dios sólo la gloria de los salvación. El único incentivo para el trabajo es la satisfacción apostólica no la autoadulación.

Lo importante es comprender que para todos, incluso para los paganos y ateos, la Misericordia de Dios pasa y le toca por así decirlo intuitivamente el corazón y depende del alma responder con su voluntad. Si el alma acoge esta luz de la conciencia comenzará la primera purificación para seguidamente ir confrontando su ser humano con el Ser divino que se ha revelado. Como explica Jesús:

“La Misericordia pasa y ofrece la criba... La primera: hecha con breves verdades fundamentales, necesarias para ser comprendidas por uno que está en la red de la completa ignorancia, del vicio, del paganismo. Si el alma lo acoge, comienza la primera purificación. La segunda es la criba del alma en sí, que confronta su ser con el Ser que se ha revelado, y se horroriza. Y comienza su obra. Por medio de una operación cada vez más minuciosa, después de las piedras, de la arena y de la ceniza, llega incluso a quitar lo que ya es harina pero con granitos todavía grandes, demasiado grandes para producir un óptimo pan. Cuando ya está completamente dispuesta, vuelve a pasar la Misericordia y se introduce en esa harina preparada - también ésta es una preparación, Judas - y la hace fermentar y la hace pan. Pero es una operación larga y de “voluntad” del alma.” (El Evangelio como me ha sido revelado. Valtorta, Maria. Italia, Centro Editoriales Valtortano, 2002.

Volumen 2, pág. 6.)

Se podría objetar la imposibilidad de la fe cristiana a todos los nacidos antes del nacimiento de Jesucristo y que pertenecían a diferentes culturas y religiones. Pero incluso en los grandes filósofos aunque eran paganos y a pesar de convivir en el error cuando se encontraron en su conciencia ante el dilema de la virtud o el vicio, la honestidad o deshonestidad, con voluntad de gigante supieron querer el Bien que no es sino Dios. Lo mismo podría mantenerse de los que asumieron religiones paganas tanto en oriente como en occidente, pues a pesar de estar en una fe errada decidieron en su conciencia seguir honestamente el bien.

No está de más aclarar en honor a la búsqueda de la Verdad que desde ciertas creencias religiosas o planteamientos filosóficos tendentes al sincretismo panteísta suele sostenerse que una idea fundamental de todas las religiones es la de que Dios y los seres humanos tienen la misma naturaleza. Incluso se llega a afirmar que las enseñanzas de los Vedas de la India, el neoplatonismo y la Senda Sagrada del Budismo aunque tienen sus rasgos distintivos en esencia son idénticas. Esto es contradictorio e incompatible con los principios de tales creencias.

Ciertamente el ser humano recuerda con su parte mejor que es el alma a través de hombres virtuosos de todos los pueblos y razas una tendencia natural hacia la Verdad por medio de espontáneos recuerdos que intentan sistematizar a través de diferentes doctrinas humanas.

Pero no pueden equipararse las doctrinas humanas con la Palabra Revelada. Podremos intentar aproximarnos analógicamente en cuanto al

proceso de transformación de la persona en el camino del peregrinar de la vida en el sendero de conversión religiosa, pero es evidente que hay diferencias radicales en ciertos temas como la reencarnación-resurrección, concepciones diferentes en la escatología referentes a la creencia del cielo y el infierno, así como en la cosmovisión del mundo entre otros.

Un diálogo sincero debe partir de una actitud sincera y honesta. Hay puntos en los que la identidad personal debe elegir libremente según su libre voluntad ante las diversas opciones según su responsabilidad. No todas las religiones son esencialmente iguales. El nuevo yo cristiano desea la unión con la divinidad pero trascender el yo no quiere decir ser Dios, sino que sigue siendo una criatura participando de la divinidad aunque ciertamente el deseo de Dios está inscrito en el corazón del hombre y sale a su encuentro siendo Jesucristo el mediador y la plenitud de toda la revelación.

Desde el cristianismo se sostiene que Dios es el Todo pero distinto a todo lo existente que ha sido creado de la nada, lo que no concuerda con la creencia panteísta o la animista. Incluso puede decirse que Dios es el Todo en el sentido que es absolutamente perfecto y que también es la Nada porque ningún espíritu creado podría tocarlo dado que es el Creador y la Perfección.

Renunciar es algo virtuoso cuando se refiere al propio egoísmo pero no necesariamente a las cosas creadas que son buenas: (19. *“Por consiguiente, la doctrina de aquellos maestros que recomiendan “vaciar” el espíritu de toda representación sensible y de todo concepto, deberá ser correctamente interpretada, manteniendo sin embargo una actitud de amorosa atención a Dios, de tal forma que permanezca, en la persona que hace oración, un vacío*

susceptible de llenarse con la riqueza divina. El vacío que Dios necesita es la renuncia del propio egoísmo, no necesariamente la renuncia a las cosas creadas que nos ha dado y entre las cuales nos ha colocado”. (Carta a los Obispos de la Iglesia Católica sobre algunos aspectos de la meditación cristiana. Por la Congregación para la Doctrina de la Fe. web)

Es un pensamiento justo el que sólo debe ser admirado Dios pero también es cierto que se puede admirar a Dios también en una flor, reconociendo que Él es el verdadero artífice de la Creación. En todo lo creado y en las conciencias se oye pronunciar la voz: “Yo soy el Señor tu Dios”.

En cuanto al apego no es bueno el apego a las cosas y a las personas pero sí lo es en cambio la unión entre los miembros de las familias y de los ciudadanos. Hay ideologías y creencias que llegan al absurdo de que conviven en una realidad de opuestos: se vive en un antagonismo diciendo en cada momento un “sí” o un “no” a la misma cuestión según convenga. Al no tener principios se sostiene que nada es como parece y por tanto la realidad existe y no existe a la vez. Esto hace que la persona esté rota en su interior separando la realidad y creando división a su alrededor. (*véase mensaje 30-12-2015. El Reinado Eucarístico, pág. 454. www.vdcj.org*) Siempre teniendo en cuenta como se ha mencionado en la primera parte y volvemos a reiterar “no podemos juzgar” pues cada cual será justificado de acuerdo a su fe y según su comportamiento hacia el bien. **(20)**

Así pues, asistimos a una situación en la que los cimientos de la Iglesia se están tambaleando y necesitamos refugiarnos en los Templos familiares ya que la Iglesia donde el centro no es la Eucaristía son iglesias vacías de

oración, es un centro de “reunión fraterna” donde se le hace el juego al Enemigo pues se niega seguir el plan de Dios. Bajo apariencia de planes con Cristo en realidad se tiene como “su Cristo” al cabeza de esas comunidades, son los pastores ídolos.

“¿Qué Iglesia es entonces esa? Es una Iglesia donde son consideradas “herejías” las verdades insondables de la fe. Son iglesias vacías de oración. Almas huérfanas de directores espirituales. Iglesia que ha olvidado el sacrificio y el ayuno, y corre por el camino de los placeres mundanos, entregada a ellos. Es Iglesia donde la Eucaristía es relegada al último rincón del Templo. Iglesia en donde se cometen los sacrilegios.” (El Reinado Eucarístico. www.vdcj.org)

Toda esta situación nos lleva a recordar las palabras de John Henry Newman cuando expresa que hay que temer que una nación a pesar de que sus habitantes hayan sido bautizados en realidad se encuentra en una situación tal de incredulidad que si Jesús viniese de nuevo a vivir entre nosotros no existiría la menor sintonía entre el espíritu mundano y el espíritu suave y celestial de Cristo. Nos negamos a admitir una doctrina que está en claro contraste con lo que nos enseña la práctica mundana que se caracteriza por una mentalidad liberal, escéptica y cerrada a todo lo que sea sobrenatural. El individualismo lo pone todo en tela de juicio y duda que puedan existir otros principios que sean más importantes que los meramente materialistas. (*Newman, J.H. “Jesús sacerdote y víctima” Burgos, editorial Monte Carmelo, 2002*)

Podríamos concluir en esta parte dedicada a la construcción de la

identidad cristiana expresando el ideal de inmersión en la voluntad divina. Nuestra alma tiene un cuerpo que será glorificado en la resurrección y que por tanto simboliza un templo. Tenemos una cita con Dios por un camino único para cada uno de nosotros. Estamos emocionados por pensar que algún día lo veremos y que tendremos nuestro propio hogar celestial de acuerdo a la gloria que obtiene Dios de nuestras obras. La muerte del viejo yo y el renacimiento en el nuevo es altamente valorado así como la oración honesta para recibir recompensas celestiales.

Recordando las palabras del Santo Henry Newman “Dios nos llama” (*God calls us in Meditations and Devotions*) y hemos sido creados para hacer algo o ser algo para lo que ningún otro ha sido creado. Cada uno de nosotros tiene una misión que cumplir y nos ha encargado un trabajo que no ha encargado a otros pues Dios no hace nada en vano ya estemos enfermos o no, estemos con amigos o solos, estemos felices o nos sintamos hundidos, prolonguemos nuestra vida o la acortemos.

Nadie puede poner límites al Espíritu Santo que incluso puede visitar nuestro alma y producir en ella manifestaciones divinas aunque no las percibamos plenamente dada nuestra actual limitación humana. Nuestra esperanza gozosa es que sólo en virtud de la fe nos damos cuenta de su presencia en la Eucaristía ya que no lo reconocemos por la vista. Nos ha privado de su presencia visible para dejarnos un memorial de sí mismo. Y todo para tener una comunión misteriosa con Cristo sin ser conscientes de ella dado que *“ésa es probablemente la clase de comunión que ahora se nos concede tener a nosotros, dado que Cristo inició con la Iglesia una relación que perdura hasta hoy en día, y probablemente pretendía darnos a entender con ello cuál iba a ser ahora su presencia entre nosotros”*. (*La presencia*

espiritual de Cristo en la Iglesia.. Newman, J.H. Trad. Manuel Ordóñez Villarroel. Op. cit.)

Por esto no pedimos comprender sus designios en nosotros pues quizás no lo sepamos en esta vida pero nos lo dirán en la otra. Somos anillos en la cadena de la voluntad divina y sólo pedimos ser usados a su servicio. Preparemos la Nueva Civilización del Amor.

Aquí nos unimos con Jesús-Luz y en el cielo lo poseeremos. Este templo una vez resucitado glorioso, confiando en la promesa de Jesucristo, reflejará su Luz como una llama de fuego:

*¡Cómo arde sin preocupación nuestra alma
en el templo de su cuerpo!
¡Qué delicadamente refleja la Luz
como pura llama de fuego!*

CITAS BÍBLICAS Y BIBLIOGRÁFICAS RELACIONADAS (*)

III. LA CONSTRUCCIÓN DE LA IDENTIDAD CRISTIANA. (CIUDADANOS DEL REINO DE DIOS Y SU IGLESIA)

- (1) En la Revelación a San Juan vemos que en el cielo se entabló un combate entre las fuerzas del bien y del mal: *“Y se entabló un gran combate en el cielo: Miguel y sus ángeles lucharon contra el dragón. También lucharon el dragón y sus ángeles, pero no prevalecieron, ni hubo ya para ellos un lugar en el cielo. Fue arrojado aquel gran dragón, la serpiente antigua, llamado Diablo y Satanás, que seduce a todo el universo. Fue arrojado a la tierra y sus ángeles fueron arrojados con él”.*

(*) **Negritas del autor.**

(*Apocalipsis: 12, 7-10*)

- (2) “Y para que mejor entiendas la respuesta de tu duda, debes advertir que, como en mis decretos no hay sucesión de tiempo, ni yo necesito de él para obrar y entender, los que dicen que encarnó el Verbo para redimir el mundo, dicen bien; y los que dicen que encarnara si el hombre no pecara, también hablan bien, si con verdad se entiende; porque, si no pecara Adán, descendiera del cielo en la forma que para aquel estado conviniera y, porque pecó, tuve aquel decreto segundo que bajara pasible, porque, visto el pecado, convenía que le reparase en la forma que lo hizo. Y porque deseas saber cómo se ejecutara este misterio de encarnar el Verbo, si conservara el hombre el estado de la inocencia, advierte que la forma humana fuera la misma en la sustancia pero con el don de la impassibilidad e inmortalidad; cual estuvo mi Unigénito después que resucitó hasta que subió a los cielos, viviera y conversara con los hombres; y los misterios y sacramentos fueran a todos manifestos; y muchas veces hiciera patente su gloria, como la hizo sola una vez cuando vivió mortal (Mt., 7, Iss); y delante de todos hiciera en aquel estado de inocencia lo que obró delante de tres Apóstoles en el que fue mortal; y vieran todos los viadores a mi Unigénito con grande gloria y con su conversación se consolaran; y no pusieran óbice a sus divinos efectos, porque estuvieran sin pecado; pero todo lo impidió y estragó la culpa y por ella fue conveniente que viniera pasible y mortal.”
(*Sor María de Jesús de Ágreda. Mística Ciudad de Dios. Libro electrónico, capítulo 6, número 74*)

- (3) Pero detengámonos en la táctica del diablo para mentir, es decir, engañar diciendo medias verdades mezclando lo verdadero con lo falso o descaradamente decir lo contrario: Y dijo a la mujer: «¿Cómo es que Dios os ha dicho: **No comáis de ninguno de los árboles del jardín?**» (*Génesis 3, 1*) cuando la realidad es que Dios les había dicho: “Y Dios impuso al hombre este mandamiento: «De cualquier árbol del jardín **puedes comer**, mas del árbol de la ciencia del bien y del mal no comerás, porque el día que comieres de él, **morirás sin remedio.**»” (*Génesis 2,*

16- 17)

Eva le advierte del mandato de Dios pero el Padre de la Mentira vuelve a la carga mezclando lo cierto con lo falso: *“Replicó la serpiente a la mujer: «De ninguna manera moriréis. Es que Dios sabe muy bien que el día en que comiereis de él, se os abrirán los ojos y seréis como dioses, conocedores del bien y del mal.»”* (*Génesis 3, 4-5*). Ciertamente el anhelo era el de llegar a ser como “dioses por participación” estaba reflejado en el hecho de que creó a Adán y Eva a imagen y semejanza divinas, pero la advertencia era la muerte ante la desobediencia.

Hay una oposición entre lo que dice Dios (“no comas porque morirás”) y lo que dice la serpiente (“si comes vivirás, se abrirán vuestros ojos”). Dios se hace hombre y nos da el mandato contrario: *“Jesús les dijo: «En verdad, en verdad os digo: si no coméis la carne del Hijo del hombre, y no bebéis su sangre, no tenéis vida en vosotros. El que come mi carne y bebe mi sangre, tiene vida eterna, y yo le resucitaré el último día.”* (*Juan 6, 53*)

Aquí se hace necesario el discernimiento: *“Queridos, no os fiéis de cualquier espíritu, sino examinad si los espíritus vienen de Dios, pues muchos falsos profetas han salido al mundo.”* (*1 Juan 4, 1*). La preocupación y el temor de poder ser otra vez engañados: *“Pero temo que, al igual que la serpiente engañó a Eva con su astucia, se perviertan vuestras mentes apartándose de la sinceridad con Cristo. Pues, cualquiera que se presenta predicando otro Jesús del que os prediqué, y os proponga recibir un Espíritu diferente del que recibisteis, y un Evangelio diferente del que abrazasteis ¡lo toleráis tan bien!”* (*2 Corintios 11, 3-4*)

-“Las dos vías más comunes que Satanás toma para llegar a las almas son la sensualidad y la gula. Empieza siempre por la materia; una vez que la ha desmantelado y subyugado, pasa a atacar a la parte superior: primero, lo moral (el pensamiento con sus soberbias y deseos desenfrenados); después, el espíritu, quitándole no sólo el amor — que ya no existe cuando el hombre ha substituido el amor divino por otros amores humanos — sino también el temor de Dios. Es

*entonces cuando el hombre se abandona en cuerpo y alma a Satanás, con tal de llegar a gozar de lo que desea, de gozar cada vez más. Has visto cómo me he comportado Yo. Silencio y oración. Silencio. Efectivamente, si Satanás lleva a cabo su obra de seductor y se nos acerca, se le debe soportar sin impacencias necias ni miedos mezquinos. Pero reaccionar: ante su presencia, con entereza; ante su seducción, con la oración. **Es inútil discutir con Satanás. Vencería él**, porque es fuerte en su dialéctica. **Sólo Dios puede vencerlo**. Entonces, recurrir a Dios, que hable por nosotros, a través de nosotros. Mostrar a Satanás ese Nombre y ese Signo, no tanto escritos en un papel o grabados en un trozo de madera, cuanto escritos y grabados en el corazón. Mi Nombre, mi Signo. Rebatir a Satanás únicamente cuando insinúa que es como Dios, rebatirle usando la palabra de Dios; no la soporta.” (Maria Valtorta. **El Evangelio como me ha sido revelado. Op. cit. Tomo 1. Pág. 257.**)*

- (4) “957 *La comunión con los santos.* “No veneramos el recuerdo de los del cielo tan sólo como modelos nuestros, sino, sobre todo, para que la unión de toda la Iglesia en el Espíritu se vea reforzada por la práctica del amor fraterno. En efecto, así como la unión entre los cristianos todavía en camino nos lleva más cerca de Cristo, así la comunión con los santos nos une a Cristo, del que mana, como de Fuente y Cabeza, toda la gracia y la vida del Pueblo de Dios” (LG 50): *Nosotros adoramos a Cristo porque es el Hijo de Dios: en cuanto a los mártires, los amamos como discípulos e imitadores del Señor, y es justo, a causa de su devoción incomparable hacia su rey y maestro; que podamos nosotros, también nosotros, ser sus compañeros y sus condiscípulos* (San Policarpo, mart. 17).

958 *La comunión con los difuntos.* “La Iglesia peregrina, perfectamente consciente de esta comunión de todo el Cuerpo místico de Jesucristo, desde los primeros tiempos del cristianismo honró con gran piedad el recuerdo de los difuntos y también ofreció por ellos oraciones pues es una idea santa y provechosa orar por los difuntos para que se vean libres de sus pecados” (2 M 12, 45)” (LG 50).

Nuestra oración por ellos puede no solamente ayudarles sino también hacer eficaz su intercesión en nuestro favor.” (Catecismo de la Iglesia Católica)

-“ El cielo y la tierra están más “conectados” de lo que la mayoría de la gente cree, y de formas que superan nuestra comprensión. La naturaleza del cielo es un involucramiento completo en los planes de Dios para la eternidad. Todo tiene un propósito eterno.

El cielo y la tierra se unen a veces cuando la atmósfera espiritual y la alabanza y adoración fluyen juntas en perfecta armonía. Cuando ocurre esto, estamos “participando” en la atmósfera del cielo mismo. Ningún pecado, enfermedad o dolencia puede habitar ahí. Estamos morando cerca del trono de Dios.

Para acceder a este flujo de vida, debemos estar abandonados totalmente a Dios en adoración y alabanza, ya que sólo entonces somos capaces de estar en completa unión en este aspecto de la provisión de Dios para el espíritu humano eterno. Con la ayuda del Espíritu Santo, todos podemos aspirar ahí.” (Richard Sigmund. “Mi tiempo en el Cielo”. Epílogo: Donde se juntan el cielo y la tierra. Libro electrónico, pág. 140).

- (5) En la escena del prendimiento en Getsemaní uno de los que estaban con Jesús sacó su espada e hirió a un siervo del Sumo Sacerdote: *“Dícele entonces Jesús: Vuelve tu espada a su sitio, porque todos los que empuñen espada, a espada perecerán.” (Mateo 26, 52)*, lo que pone de manifiesto la clara actitud pacífica que proclamaba. No solamente esto sino que cura la oreja ordenando guardar las armas ante lo cual los discípulos desconcertados creen que Jesús ha perdido la razón, cuesta creer en lo que ven e incluso se oye alguna que otra voz diciendo que Jesús ha traicionado a los discípulos. Resultado: Jesús queda solo y el que no grita huye.

Esto pone de manifiesto la incompreensión de los seres humanos acerca de la identidad de Jesús. Todos parecen fiarse de sí mismos y de sus fuerzas tal es la soberbia humana.

- (6) *“Si el 333 es el número que indica la Divinidad, aquel que quiere ponerse por encima del mismo Dios es indicado con el número 666. El 666 enunciado una vez, es decir por 1, expresa el año 666 seiscientos sesenta y seis. En este período histórico el Anticristo se manifiesta a través del fenómeno del Islam, que niega directamente el misterio de la Divina Trinidad y la Divinidad de Nuestro Señor Jesucristo. El islamismo, con su fuerza militar, se desencadena por doquier, destruyendo todas las antiguas comunidades cristianas, invade Europa y sólo por una intervención maternal y extraordinaria Mía, solicitada fuertemente por el Santo Padre, no logra destruir completamente la Cristiandad. El 666 indicado dos veces, es decir por 2, expresa el año 1332, mil trescientos treinta y dos. En este período de tiempo histórico **el Anticristo** se manifiesta con un radical ataque a la fe en la Palabra de Dios. A través de los filósofos, que comenzaron a dar exclusivo valor a la ciencia y luego a la razón, se tiende gradualmente a constituir como único criterio de verdad a la sola inteligencia humana. Nacen los grandes errores filosóficos que se prolongan a través de los siglos hasta vuestros días. La **importancia exagerada dada a la razón**, como criterio exclusivo de verdad, lleva necesariamente a la destrucción de la fe en la Palabra de Dios. En efecto, con la reforma protestante se rechaza la Tradición como fuente de la Divina Revelación, y se acepta sólo la Sagrada Escritura. Pero también ésta debe ser interpretada por medio de la razón, y **se rechaza obstinadamente el Magisterio auténtico de la Iglesia Jerárquica, a quien Cristo ha confiado la custodia del depósito de la fe. Cada uno es libre para leer y para comprender la Sagrada Escritura, según su personal interpretación.** De esta manera la fe en la Palabra de Dios es destruida. Obra del Anticristo, en este período histórico, es la división de la Iglesia, la consiguiente formación de nuevas y numerosas confesiones cristianas, que gradualmente son impulsadas a una pérdida creciente de la verdadera fe en la Palabra de Dios. El 666 enunciado 3 veces, es decir por 3, expresa el año 1998, mil novecientos noventa y ocho. En este período histórico, la masonería, ayudada por la eclesiástica, logrará su gran objetivo: construir un ídolo para ponerlo en lugar de Cristo y de su Iglesia. Un falso Cristo y una falsa Iglesia.*

Por lo tanto, la estatua construida en honor de la primera bestia, para ser adorada por todos los habitantes de la tierra y que marcará con su sello a todos aquellos que quieran comprar o vender, es la del Anticristo. Habréis llegado así al vértice de la purificación, de la gran tribulación y de la apostasia. (A los sacerdotes hijos predilectos de la Santísima Virgen. Centro Internazionale. Movimento Sacerdotal Mariano. 23 edición, pág. 777).

Con respecto a la Trinidad hasta donde puede captarlo el entendimiento humano hay varias citas que aluden a ello:

- “*En el principio existía la Palabra y la Palabra estaba con Dios, y la Palabra era Dios*”. (San Juan 1, 1)

- “*Y dijo Dios: «Hagamos al ser humano a nuestra imagen, como semejanza nuestra,..»* (Génesis 1, 26)

- “*Y en vuestra Ley está escrito que el testimonio de dos personas es válido. Yo soy el que doy testimonio de mí mismo y también el que me ha enviado, el Padre, da testimonio de mí.*» Entonces le decían: «¿Dónde está tu Padre?» Respondió Jesús: «No me conocéis ni a mí ni a mi Padre; si me conocierais a mí, conoceríais también a mi Padre.» (Juan 8, 17-18)

- “*... para que todos honren al Hijo como honran al Padre. El que no honra al Hijo no honra al Padre que lo ha enviado.*” (San Juan 5, 23)

- “*Si me amarais, os alegraríais de que me fuera al Padre, porque el Padre es más grande que yo.*” (San Juan 14, 28)

- “*Si me amáis, guardaréis mis mandamientos; y yo pediré al Padre y os dará otro Paráclito, para que esté con vosotros para siempre, el Espíritu de la verdad, a quien el mundo no puede recibir, porque no le ve ni le conoce. Pero vosotros le conocéis, porque mora con vosotros.*” (San Juan 14, 15-17)

- “*Pues, ¿quién es el que vence al mundo sino el que cree que Jesús es el Hijo de Dios? Este es el que vino por el agua y por la sangre: Jesucristo; no solamente en el agua, sino en el agua y en la sangre. Y el Espíritu es el que da testimonio,*

porque el Espíritu es la Verdad. Pues tres son los que dan testimonio: el Espíritu, el agua y la sangre, y los tres convienen en lo mismo.” (1 San Juan 5, 5-8). El agua en que Cristo fue bautizado y la sangre que derramó en la cruz atestiguan la realidad de su Humanidad. Por otra parte podría interpretarse el agua como símbolo de la Voluntad de Dios.

- *En la versión Reina Valera: “Porque tres son los que dan testimonio en el cielo, el Padre, el Verbo, y el Espíritu Santo: y estos tres son uno.”* (1 Juan 5, 7)

En la Vulgata Clementina dicen así estos versículos: «Porque tres son los que dan testimonio en el cielo: el Padre, el Verbo y el Espíritu Santo, y estos tres son una sola cosa.» (1 San Juan 5, 7-8) (Según nota a pie de página en la Santa Biblia. Barcelona, Editorial Planeta, 1967, pág. 236)

- *“Les dijo, pues, Jesús: «Cuando hayáis levantado al Hijo del hombre, entonces sabréis que Yo Soy, y que no hago nada por mi propia cuenta; sino que, lo que el Padre me ha enseñado, eso es lo que hablo.»* (San Juan 8, 28)

- *Ahora bien, cuando hay uno solo no hay mediador, y Dios es uno solo.* (Gálatas 3, 20)

- *“Id, pues, y haced discípulos a todas las gentes bautizándolas en el nombre del Padre y del Hijo y del Espíritu Santo, y enseñándoles a guardar todo lo que yo os he mandado. Y he aquí que yo estoy con vosotros todos los días hasta el fin del mundo.»* (Mateo 28, 19-29)

- *“Pero cuando venga el Defensor, el Espíritu de la verdad, que yo voy a enviar de parte del Padre, él será mi testigo.”* (San Juan 15, 26)

- *“Que la gracia del Señor Jesucristo, el amor de Dios y la presencia constante del Espíritu Santo estén con todos ustedes.”* (2 Corintios 13, 14)

De todo el contenido bíblico sobre el misterio de la Trinidad el Magisterio de la Iglesia declara:

“253 La Trinidad es una. No confesamos tres dioses sino un solo Dios en tres

personas: “la Trinidad consubstancial” (Cc. Constantinopla II, año 553: DS 421). Las personas divinas no se reparten la única divinidad, sino que cada una de ellas es enteramente Dios: “El Padre es lo mismo que es el Hijo, el Hijo lo mismo que es el Padre, el Padre y el Hijo lo mismo que el Espíritu Santo, es decir, un solo Dios por naturaleza” (Cc. de Toledo XI, año 675: DS 530). “Cada una de las tres personas es esta realidad, es decir, la substancia, la esencia o la naturaleza divina” (Cc. de Letrán IV, año 1215: DS 804).

254 Las personas divinas son realmente distintas entre sí. “Dios es único pero no solitario” (Fides Damasi: DS 71). “Padre”, “Hijo”, “Espíritu Santo” no son simplemente nombres que designan modalidades del ser divino, pues son realmente distintos entre sí: “El que es el Hijo no es el Padre, y el que es el Padre no es el Hijo, ni el Espíritu Santo el que es el Padre o el Hijo” (Cc. de Toledo XI, año 675: DS 530). Son distintos entre sí por sus relaciones de origen: “El Padre es quien engendra, el Hijo quien es engendrado, y el Espíritu Santo es quien procede” (Cc. Letrán IV, año 1215: DS 804). La Unidad divina es Trina.” (Catecismo de la Iglesia Católica)

- (7) ***“Y alegraos de participar en mis padecimientos para poder estar después conmigo en la gloria. “Yo seré vuestra desmesurada recompensa” promete en Abraham (Génesis 15, 1) el Señor a todos sus siervos fieles. Sabéis cómo se conquista el Reino de los Cielos: con la fuerza; y a él se llega a través de muchas tribulaciones. Pero el que persevere como Yo he perseverado estará donde estoy Yo. Ya os he dicho cuál es el camino y la puerta que llevan al Reino de los Cielos, y Yo he sido el primero en caminar por ese camino y en volver al Padre por esa puerta. Si existieran otros os los habría mostrado, porque siento compasión de vuestra debilidad de hombres. Pero no existen otros... Al señalarlos como único camino y única puerta, también os digo, os repito, cuál es la medicina que da fuerza para recorrerlo y entrar. Es el amor. Siempre el amor. Todo se hace posible cuando en nosotros está el amor. Y el Amor, que os ama, os dará todo el amor, si pedís en mi Nombre tanto amor como para hacerlos atletas en la santidad.” (El Evangelio***

como me ha sido revelado. Valtorta, María. El Evangelio como me ha sido revelado. Italia, Centro Editoriales Valtortano, 2002. 10 Tomos. Volumen 10)

- (8) Jesús dirá: *“He venido a traer fuego sobre la tierra y ¡cuánto desearía que ya estuviese encendido!” (Lc 12, 49).*

Jesús pide al Padre que les dé otro «abogado» (Paráclito) en su ausencia, lo que quiere decir que Jesús es un «abogado» (Paráclito) y por tanto el Espíritu Santo como abogado es otro Cristo que le sustituirá. Incluso aclara que *“el Paráclito, el Espíritu Santo, que el Padre enviará en mi nombre, os lo enseñará todo y os recordará todo lo que yo os he dicho.” (Juan 14, 26)*

Hay aquí una obra docente del Espíritu Santo que enseñará la verdad así como el Espíritu de Cristo es la verdad y *“...cuando él venga, convencerá al mundo en lo referente al pecado, en lo referente a la justicia y en lo referente al juicio;...” (Juan 16, 8).*

El Espíritu Santo es el que guía, conduce pues *«Cuando venga él, el Espíritu de la verdad, os guiará hasta la verdad completa; pues no hablará por su cuenta, sino que hablará lo que oiga, y os anunciará lo que ha de venir. El me dará gloria, porque recibirá de lo mío y os lo anunciará a vosotros. Todo lo que tiene el Padre es mío. Por eso he dicho: Recibirá de lo mío y os lo anunciará a vosotros.» (Jn 16,13-15).*

La escena de Pentecostés es relatada en Hechos: *“ Al llegar el día de Pentecostés, estaban todos reunidos en un mismo lugar. De repente vino del cielo un ruido como el de una ráfaga de viento impetuoso, que llenó toda la casa en la que se encontraban. Se les aparecieron unas lenguas como de fuego que se repartieron y se posaron sobre cada uno de ellos; quedaron todos llenos del Espíritu Santo y se pusieron a hablar en otras lenguas, según el Espíritu les concedía expresarse. (Hechos 2, 1-4)*

- (9) *“La mente tiene necesidad de órganos y miembros para cumplir y hacer cumplir*

las operaciones que el pensamiento piensa. De la misma manera, en el cuerpo espiritual que es mi Iglesia, Yo seré el Intelecto, o sea, la cabeza, sede del intelecto. Pedro y sus colaboradores serán los que observen las reacciones y perciban las sensaciones y las transmitan a la mente para que ella ilumine y ordene lo que debe hacerse para el bien de todo el cuerpo, y luego, iluminados y dirigidos por mi orden, hablen y guíen a las otras partes del cuerpo. La mano que rechaza el objeto que puede herir el cuerpo, o aleja aquello que, corrompido, puede corromper, el pie que salva el obstáculo sin chocarse y caer y herirse, han recibido orden de hacerlo de la parte que dirige. El niño, y también el hombre, que se han salvado de un peligro o que, por un consejo recibido, por una palabra dicha, obtienen un beneficio de cualquier especie (instrucción, negocios buenos, matrimonio, buena alianza), es por ese consejo y esa palabra por lo que o no sufren un daño o ganan un bien. Pues lo mismo sucederá en mi Iglesia. La cabeza y los que son cabeza, guiados por el divino Pensamiento e iluminados por la divina Luz e instruidos por la eterna Palabra, darán las órdenes y los consejos, y los miembros lo harán, recibiendo espiritual salud y espiritual beneficio. Mi Iglesia ya existe, porque ya posee su Cabeza sobrenatural y su Cabeza divina, y tiene sus miembros: los discípulos. Pequeña todavía: semilla que se está formando; perfecta sólo en la Cabeza que la dirige, imperfecta en el resto, que necesita el toque de Dios para ser perfecta, y tiempo para crecer. Pero, en verdad os digo que ya existe, y que es santa por Aquel que constituye su Cabeza y por la buena voluntad de los justos que la componen. Santa e invencible. Contra ella arremeterá, una y mil veces, y con mil formas de batalla, el infierno compuesto de demonios y hombres-demonios. Pero éstos no prevalecerán. El edificio será indestructible.” (El Evangelio como me ha sido revelado. Valtorta, Maria. Italia, Centro Editoriales Valtortano, 2002. Volumen 9, pág. 364)

La Iglesia Católica reafirma la primacía de Pedro junto a la constitución del Colegio Apostólico: “881 El Señor hizo de Simón, al que dio el nombre de Pedro, y solamente de él, la piedra de su Iglesia. Le entregó las llaves de ella (Cf. Mt 16, 18-19); lo instituyó pastor de todo el rebaño (Cf. Jn 21, 15-17). “Está claro que

también el Colegio de los Apóstoles, unido a su Cabeza, recibió la función de atar y desatar dada a Pedro” (LG 22). Este oficio pastoral de Pedro y de los demás apóstoles pertenece a los cimientos de la Iglesia. Se continúa por los obispos bajo el primado del Papa.” (Catecismo de la Iglesia Católica)

*“Los nombres de los doce Apóstoles son éstos: **primero** Simón, llamado Pedro, y su hermano Andrés; Santiago el de Zebedeo y su hermano Juan; 3 Felipe y Bartolomé; Tomás y Mateo el publicano; Santiago el de Alfeo y Tadeo; 4 Simón el Cananeo y Judas el Iscariote, el mismo que le entregó. (Mateo 10, 2-4)*

- (10) Ante la diversidad de interpretaciones de las diferentes sectas que vienen predicando de otra manera el Evangelio (otros Evangelios) y con verdades a medias, San Pablo sale al paso diciendo: *“Me maravillo de que abandonando al que os llamó por la gracia de Cristo, os paséis tan pronto a otro evangelio - no que haya otro, sino que hay algunos que os perturban y **quieren deformar el Evangelio de Cristo** -. Pero aun cuando nosotros mismos o un ángel del cielo os anunciara un evangelio distinto del que os hemos anunciado, ¡sea anatema! Como lo tenemos dicho, también ahora lo repito: Si alguno os anuncia un evangelio distinto del que habéis recibido, ¡sea anatema! (Gálatas 1, 6-9)*

La enseñanza de Jesús no puede ser alterada según las diversas interpretaciones sectarias ya que su oración es *“para que todos sean uno; como tú, oh Padre, en mí y yo en tí, que también ellos **sean uno en nosotros**; para que el mundo crea que tú me enviaste.” (S. Juan 17, 20-21)*

Si bien la profecía de los últimos tiempos se está cumpliendo en cuanto a la proliferación de las falsas iglesias, también está la profecía triunfante final: *“También tengo otras ovejas que no son de este redil; y también a ellas debo traerlas. Ellas me obedecerán y **habrá un solo rebaño y un solo pastor.**” (San Juan 10, 16)*

No podemos mancillar nuestra fe recibiendo cualquier interpretación subjetiva lo que significaría que no estamos firmes en los principios de la fe cristiano-católica: *“Ten presente que en los últimos días sobrevendrán momentos difíciles; los hombres serán egoístas, avaros, fanfarrones, soberbios, difamadores, rebeldes a los padres, ingratos, irreligiosos, desnaturalizados, implacables, calumniadores, disolutos, despiadados, enemigos del bien, 4 traidores, temerarios, infatuados, más amantes de los placeres que de Dios, que tendrán la apariencia de piedad, pero desmentirán su eficacia. Guárdate también de ellos. A éstos pertenecen esos que **se introducen en las casas** y conquistan a mujerzuelas cargadas de pecados y agitadas por toda clase de pasiones, que siempre están aprendiendo y **no son capaces de llegar al pleno conocimiento de la verdad**. Del mismo modo que Jannés y Jambrés se enfrentaron a Moisés, así también estos se oponen a la verdad; son hombres de mente corrompida, **descalificados en la fe.**” (2 Timoteo 3, 1-8)*

“Que el Señor nos enseñe a no manipular ni diluir su santa palabra, y a no comentarla según las falsas interpretaciones de los hombres, buscando razones para huir de lo que tiene de exigencia y para reducir la religión a un simple lugar común, sin que él nos conceda comprenderla tal cual es en realidad: una realidad misteriosa y sobrenatural, tan distinta de todo lo que existe sobre la faz de la tierra como distintos son el día de la noche, el cielo y la tierra”. (John Henry Newman. Parochial and Plain Sermons, VI, pp. 69-82)

Que haya una Institución que vele por la pureza de la fe cristiana es fundamental para no incurrir en contradicciones máxime cuando tendemos a una interpretación subjetiva del texto: *“A menudo pensamos que lo que contiene la Palabra es la suma total de lo que Dios hará por nosotros, pero no es así. En un sentido, Dios se limitó a sí mismo cuando escribió su Palabra para nosotros. No incluyó todo lo que Él es y todo lo que puede hacer, porque Él es infinito. Mientras estemos en la tierra no podremos entender o recibir lo que ha planeado para*

nosotros finalmente.” (Richard Sigmund. “*Mi tiempo en el Cielo*”. *La ciudad de Dios. Libro electrónico, pásg. 89-90*).

- (11) En la respuesta de Jesús: “*Y yo a mi vez te digo que tú eres Pedro, y sobre esta piedra edificaré mi Iglesia, y las puertas del Hades no prevalecerán contra ella.*” (**Mateo 16, 18**) expresa claramente que su Iglesia es una: “mi iglesia” y no varias tal y como sería “mis iglesias” siendo pues la afirmación de Pedro verdadera. Esta singularidad de la Iglesia está corroborada también en la primera de las cartas llamadas pastorales en la que San Pablo dice a Timoteo: “*Espero ir pronto a verte; pero te escribo esto para que, si me retraso, sepas cómo debe uno portarse en la familia de Dios, que es la iglesia del Dios viviente, la cual sostiene y defiende la verdad.*” (**1 Timoteo 3, 14-15**).

Aquí claramente se alude a “la iglesia del Dios viviente” y no a “las iglesias”. Por tanto es preferible siempre cuando hablamos de las distintas denominaciones cristianas hacerlo en singular refiriéndonos a *la Iglesia de Cristo separada* sea cual sea la denominación y no a las iglesias de Cristo separadas.

Evidentemente cuando Jesús, fijando su mirada en Pedro le dice: «*Tú eres Simón, el hijo de Juan; tú te llamarás Cefas*» - que quiere decir, “*Piedra*” (**Juan 1, 42**) esto no quiere decir que Pedro sea la Piedra angular la cual es Cristo: “*siendo la piedra angular Cristo mismo*”. (**Efesios 2, 20**)

Además al edificar su Iglesia Cristo dice expresamente a Pedro que: «*A ti te daré las llaves del Reino de los Cielos; y lo que ates en la tierra quedará atado en los cielos, y lo que desates en la tierra quedará desatado en los cielos.*» (**Mateo 16, 19**)

Esta idea de las llaves la encontramos como analogía en Isaías que relata cómo el rey le daba el poder al mayordomo cuando se ausentaba, el jefe le entregaba las llaves en público significando que cuando el rey no estuviera el mayordomo hacia las veces del rey y todos tenían que obedecerle y respetarle. (**Isaías 22, 22**)

El día de Pentecostés se les aparecieron lenguas como de fuego y quedaron llenos del Espíritu Santo (**Hechos 2, 1 y ss.**) Pedro les contestó: «*Convertíos y que cada uno de vosotros se haga bautizar en el nombre de Jesucristo, para remisión de vuestros pecados; y recibiréis el don del Espíritu Santo; (Hechos 2, 38)*

La edificación de la Iglesia se corrobora cuando:

- “*Los que acogieron su Palabra fueron bautizados. Aquel día se les unieron unas 3.000 almas. Acudían asiduamente a la enseñanza de los apóstoles, a la comunión, a la fracción del pan y a las oraciones.*” (**Hechos 2, 41-42**)

La construcción de la identidad cristiana se edifica cuando:

- “*Acudían al Templo todos los días con perseverancia y con un mismo espíritu, partían el pan por las casas y tomaban el alimento con alegría y sencillez de corazón. Alababan a Dios y gozaban de la simpatía de todo el pueblo. El Señor agregaba cada día a la comunidad a los que se habían de salvar.*” (**Hechos 2, 46-47**)

La Iglesia naciente está dirigido por un hombre que hace milagros en el nombre de Jesús : “*Pedro, que andaba recorriendo todos los lugares, bajó también a visitar a los santos que habitaban en Lida. Encontró allí a un hombre llamado Eneas, tendido en una camilla desde hacía ocho años, pues estaba paralítico. Pedro le dijo: «Eneas, Jesucristo te cura; levántate y arregla tu lecho.» Y al instante se levantó.*” (**Hechos 9, 32-34**)

(12) Jesucristo es el mediador de la nueva Alianza: “*Vosotros, en cambio, os habéis acercado al monte Sión, a la ciudad de Dios vivo, la Jerusalén celestial, y a miríadas de ángeles, reunión solemne y asamblea de los primogénitos inscritos en los cielos, y a Dios, juez universal, y a los espíritus de los justos llegados ya a su consumación, y a Jesús, mediador de una nueva Alianza, y a la aspersion purificadora de una sangre que habla mejor que la de Abel.*” (**Hebreos 12, 22-24**)

Esta Nueva Alianza quita la primera y restablece mediante la ofrenda de la sangre de Jesucristo: “*Dice primero: Sacrificios y oblacones y holocaustos y*

*sacrificios por el pecado no los quisiste ni te agradaron cosas todas ofrecidas conforme a la Ley entonces añade : He aquí que vengo a hacer tu voluntad. Abroga lo primero **para establecer el segundo**. Y en virtud de esta voluntad somos santificados, merced a la oblación de una vez para siempre del cuerpo de Jesucristo.” (Hebreos 10, 8-11)*

- (13) *“En vuestros días de fiesta, solemnidades, neomenias, tocaréis las trompetas durante vuestros holocaustos y sacrificios de comunión. Así haréis que vuestro Dios se acuerde de vosotros. Yo, Yahveh, vuestro Dios.» (Números 10, 10)* San Pablo hace diferencia clara entre la Cena del Señor y las cenas humanas cuando se hacen en reuniones: *“Cuando os reunís, pues, en común, eso ya no es comer la Cena del Señor; porque cada uno come primero su propia cena, y mientras uno pasa hambre, otro se embriaga.” (I Corintios 11, 20-21)* y expresa claramente el mandato recibido: *“Porque yo recibí del Señor lo que os he transmitido: que el Señor Jesús, la noche en que fue entregado, tomó pan, y después de dar gracias, lo partió y dijo: «Este es mi cuerpo que se da por vosotros; haced esto en recuerdo mío.» (I Corintios 11, 23-24)*

Las cartas de Ignacio a los esmirnitas especifica claramente que los que: *“Se apartan de la Eucaristía y de la oración, pues no confiesan que **la Eucaristía es la carne de nuestro Salvador Jesucristo** que padeció por nuestros pecados, a la cual resucitó el Padre por su bondad. Así pues, los que contradicen el don de Dios mueren en sus disputas. Les convenía amar para resucitar. 2. Por tanto, es conveniente apartarse de los tales y no hablar de ellos, ni en privado ni en público, y acercarse a los profetas, especialmente al evangelio en el que se nos ha manifestado la pasión y se ha consumado la resurrección. Huid de las divisiones como principio de males.” (Fuentes Patrísticas. Ignacio de Antioquía. Cartas a los esmirnitas. Vii. 1. Editorial Ciudad Nueva. Madrid 1991, pág. 175)*

Texto también citado en *“Los Padres Apostólicos” J.B. Lightfoot. Editorial Clie. Terrassa (Barcelona), 1990, págs. 200-201*: *“Se abstienen*

de la eucaristía (acción de gracias) y de la oración, porque ellos no admiten que la eucaristía sea la carne de nuestro Salvador Jesucristo.”

- (14) *“Porque yo recibí del Señor lo que os he transmitido: que el Señor Jesús, la noche en que fue entregado, tomó pan, y después de dar gracias, lo partió y dijo: «Este es mi cuerpo que se da por vosotros; haced esto en recuerdo mío.» Asimismo también la copa después de cenar diciendo: «Esta copa es la Nueva Alianza en mi sangre. Cuantas veces la bebiereis, hacedlo en recuerdo mío.» (I Corintios 11, 23)* Estas palabras de Pablo a la iglesia de Corinto que había fundado y en los que se presentaron serios problemas de doctrina aclaran y ratifican las palabras de Jesús en la última Cena.

La construcción de la identidad cristiana está fundamentada en la transmisión apostólica de la doctrina de Jesús y en la “imposición de manos” que los apóstoles realizaban con la fuerza del Espíritu Santo : *“Al enterarse los apóstoles que estaban en Jerusalén de que Samaria había aceptado la Palabra de Dios, les enviaron a Pedro y a Juan. Estos bajaron y oraron por ellos para que recibieran el Espíritu Santo; pues todavía no había descendido sobre ninguno de ellos; únicamente habían sido bautizados en el nombre del Señor Jesús. Entonces les imponían las manos y recibían el Espíritu Santo.” (Hechos 8, 15-17)* La imposición de manos para recibir el Espíritu Santo se reafirma con Pablo: *“Pablo añadió: «Juan bautizó con un bautismo de conversión, diciendo al pueblo que creyesen en el que había de venir después de él, o sea en Jesús.» Cuando oyeron esto, fueron bautizados en el nombre del Señor Jesús. Y, habiéndoles Pablo impuesto las manos, vino sobre ellos el Espíritu Santo y se pusieron a hablar en lenguas y a profetizar.” (Hechos 19, 4-6)* *“El que a vosotros oye, a mí me oye; y el que a vosotros desecha, a mí deshecha; y el que me deshecha a mí, deshecha al que me envió.” (S. Lucas 10, 16) Biblia Reina Valera.* -*“Y muchos de los que habían creído venían, confesando y dando cuenta de sus hechos.” (Hechos 19, 18) Biblia Reina Valera.* -*“Y todo esto proviene de Dios, quien nos reconcilió consigo mismo por Cristo, y*

nos dio el ministerio de la reconciliación.” (2 Corintios 5, 18) Biblia Reina Valera.—*Y habiendo dicho esto, sopló, y les dijo: Recibid el Espíritu Santo. A quienes remitiereis los pecados, les son remitidos; y a quienes se los retuviereis, les son retenidos.” (S. Juan 20, 22-23) Biblia Reina Valera.*

Así pues, la verdadera identidad cristiano-católica está fundamentada en los sacramentos que, a su vez, están basados en la Biblia. Sin ser exhaustivos repasemos las bases bíblicas de los dones sacramentales:

1. BAUTISMO. *“Respondió Jesús: «En verdad, en verdad te digo: el que no nazca de agua y de Espíritu no puede entrar en el Reino de Dios.” (Juan 3, 5) Biblia de Jerusalén.*

“Y les dijo: «Id por todo el mundo y proclamad la Buena Nueva a toda la creación. El que crea y sea bautizado, se salvará; el que no crea, se condenará.” (Mateo 16, 15) Biblia de Jerusalén.

2. CONFIRMACIÓN. *“Cuando oyeron esto, fueron bautizados en el nombre del Señor Jesús. Y, habiéndoles Pablo impuesto las manos, vino sobre ellos el Espíritu Santo y se pusieron a hablar en lenguas y a profetizar.” (Hechos 19, 5-6) Biblia de Jerusalén.*

3. CONFESIÓN. *“Dicho esto, sopló sobre ellos y les dijo: «Recibid el Espíritu Santo. A quienes perdonéis los pecados, les quedan perdonados; a quienes se los retengáis, les quedan retenidos.» (Juan 20, 23) Biblia de Jerusalén.*

4. EUCARISTÍA. *“Mientras estaban comiendo, tomó Jesús pan y lo bendijo, lo partió y, dándoselo a sus discípulos, dijo: «Tomad, comed, éste es mi cuerpo.» Tomó luego una copa y, dadas las gracias, se la dio diciendo: «Bebed de ella todos, porque ésta es mi sangre de la Alianza, que es derramada por muchos para perdón de los pecados. (Mateo 26, 26-28) Biblia de Jerusalén.*

5. MATRIMONIO. *“...y que dijo: Por eso dejará el hombre a su padre y a su madre y se unirá a su mujer, y los dos se harán una sola carne? De manera que ya no son dos, sino una sola carne. Pues bien, lo que Dios unió no lo separe el hombre.» (Mateo 19, 6) Biblia de Jerusalén.*

6. ORDEN SACERDOTAL. *“Subió al monte y llamó a los que él quiso; y*

*vinieron donde él. Instituyó Doce, para que estuvieran con él, y para enviarlos a predicar con poder de expulsar los demonios. Instituyó a los Doce y puso a Simón el nombre de Pedro; a Santiago el de Zebedeo y a Juan, el hermano de Santiago, a quienes puso por nombre Boanerges, es decir, hijos del trueno; a Andrés, Felipe, Bartolomé, Mateo, Tomás, Santiago el de Alfeo, Tadeo, Simón el Cananeo y Judas Iscariote, el mismo que le entregó.” (Marcos 3, 13-19) **Biblia de Jerusalén.***

7. UNCIÓN DE LOS ENFERMOS. *¿Está enfermo alguno entre vosotros? Llame a los presbíteros de la Iglesia, que oren sobre él y le unjan con óleo en el nombre del Señor. Y la oración de la fe salvará al enfermo, y el Señor hará que se levante, y si hubiera cometido pecados, le serán perdonados.” (Santiago 5, 14-15) **Biblia de Jerusalén.***

- (15) Jesús dice que **el Reino de Dios** ya ha llegado a nosotros porque “...*si por el Espíritu de Dios expulso yo los demonios, es que ha llegado a vosotros el Reino de Dios. (Mateo, 12, 28)* por esto «*El tiempo se ha cumplido y el Reino de Dios está cerca; convertíos y creed en la Buena Nueva.*» (Marcos 1, 20)

El misterio de Dios se nos ha dado en la Palabra revelada y se nos ha presentado en parábolas según dijo Jesús: «*A vosotros se os ha dado el misterio del Reino de Dios, pero a los que están fuera todo se les presenta en parábolas, (Marcos 4, 11)* y para entender es necesario ser como niños, recibir la Palabra con humildad porque claramente dijo: «*Dejad que los niños vengan a mí, no se lo impidáis, porque de los que son como éstos es el Reino de Dios. Yo os aseguro: el que no reciba el Reino de Dios como niño, no entrará en él.*» (Marcos 10, 14-15)

- «*El Reino de los Cielos es semejante a un tesoro escondido en un campo que, al encontrarlo un hombre, vuelve a esconderlo y, por la alegría que le da, va, vende todo lo que tiene y compra el campo aquel.*» (Mateo 13, 44)

Reorientación, reconstrucción e incluso renovación no quieren decir “ruptura” dentro de la Iglesia según palabras de Jesús a Juan y Pedro:

“ -¡Hombre, Simón! Ven aquí. Hablábamos de la futura Iglesia. Estaba explicando que, al contrario de vuestras prisas, cansancios, desánimos, etc. requiere calma, constancia, esfuerzo, confianza. Estaba explicando que requiere el sacrificio de todos sus miembros. Desde mí, que soy su Fundador, su Cabeza mística, hasta vosotros, hasta todos los discípulos, hasta todos **aquellos que lleven el nombre de cristianos y el de pertenecientes a la Iglesia universal**. Y, en verdad, los que harán verdaderamente vital a la Iglesia, no pocas veces, serán los más humildes de la gran escala de las jerarquías, es decir, aquellos que parezcan simplemente “números”. Verdaderamente, no pocas veces tendré que refugiarme en éstos para seguir manteniendo viva la fe y la fuerza de los colegios apostólicos que se renovarán siempre; y tendré que hacer de estos apóstoles personas atormentadas por Satanás y por los hombres envidiosos, soberbios e incrédulos. Y su martirio moral no será menos penoso que el martirio material: sí, se verán entre la voluntad activa de Dios, y la voluntad mala del hombre, instrumento de Satanás, que tratará con todas las artes y violencias de presentarlos embusteros, locos, obsesos, para paralizar mi obra en ellos y los frutos de mi obra, cada uno de los cuales es un golpe victorioso contra la Bestia.” **(El Evangelio como me ha sido revelado. María Valtorta. 362. La misión de las “voces” en la Iglesia futura. Libro electrónico)**

- (16) “ Porque a quien tiene se le dará y le sobraré; pero a quien no tiene, aun lo que tiene se le quitará. Por eso les hablo en parábolas, porque viendo no ven, y oyendo no oyen ni entienden..” (Mateo 13, 12:13). Lo que quiere decir que debemos vivir de Dios como si fuese el único pan de vida y que sólo apoyarnos en nuestras propias fuerzas e inteligencia no es el camino adecuado. Sólo Dios puede revelar el sentido de las palabras del Verbo a través de Jesucristo y cuando su luz se retira la incapacidad de comprender se manifiesta claramente: “Oiréis con los oídos pero no comprenderéis, miraréis con los ojos pero no veréis”. **(Isaías 6, 9:10)**

- (17) “1777 *Presente en el corazón de la persona, la conciencia moral* (Cf. Rm 2, 14-16) le ordena, en el momento oportuno, practicar el bien y evitar el mal. Juzga también las opciones concretas aprobando las que son buenas y denunciando las que son malas (Cf. Rm 1, 32). Atestigua la autoridad de la verdad con referencia al Bien supremo por el cual la persona humana se siente atraída y cuyos mandamientos acoge. El hombre prudente, cuando escucha la conciencia moral, puede oír a Dios que le habla.” (-*Catecismo de la Iglesia Católica*-)

Según esto en modo alguno se ha de condenar a los hermanos alejados de la Casa del Padre que obstinadamente se privan de los bienes de la Única Iglesia Católica y Apostólica porque:

“Sí, el hombre, o mejor, muchos de los hombres que, ciertamente, conocen a Cristo por ser evangélicos o bien ortodoxos, orientales, griegos, cismáticos, maronitas, como asimismo luteranos, calvinistas y valdenses -por citar algunas de las ramas separadas más importantes- menosprecian hasta la prueba de amor que Cristo dio para su salvación: sus humillaciones y **prefieren seguir decaídos cuando podrían ser ennoblecidos; prefieren estar “muertos” cuando podrían estar “vivos”**; y todo por su obstinada voluntad de continuar “separados”. ¿Se les ha de condenar? En modo alguno. Son siempre vuestros hermanos, pobres hermanos alejados de la Casa del Padre, que comen pan que no sacia, que viven dentro de una caligine que les impide ver la Verdad radiante, y que acuden a apagar su sed a fuentes que no proporcionan el Agua que viene del Cielo y al Cielo conduce.”(*María Valtorta. Libro de Azarías. 5, 5, 46. Libro electrónico.*)

- (18) Sobre la segunda venida de Jesucristo a la tierra (Parusía) puede consultarse: “*El Reino de Dios se instaura con la segunda venida de Jesucristo*. Estudio sobre la Segunda Venida de Jesucristo a la tierra, o “Parusía”. (**Juan Franco Benedetto**, www.laparusiaviene.com.ar).

(19) Le pregunta Gamaliel y Jesús le responde:

Gamaliel -Quieres mucho a las plantas y a los animales, ¿no?

Jesús -Sí, mucho; es mi libro vivo. El hombre tiene siempre ante sus ojos los cimientos de la fe. El Génesis vive en la naturaleza. Y quien sabe ver sabe también creer. ¿Puede, acaso, esta flor de tan delicado perfume y delicada materia de sus colgantes corolas, y tan en con-traste con este espinado enebro y con aquella aulaga de punzantes hojas, haberse hecho sola? Y, mira allí, ¿puede, acaso, haberse hecho así, solo, aquel petirrojo, con esa pincelada de sangre seca en su blando cuello? ¿Y aquellas dos tórtolas?: ¿cómo van a haber podido pintarse ese collar de ónix sobre el velo de las plumas grises? ¿Y allí, esas dos mariposas?: una, negra con su dibujo de grandes ojos de oro y rubí; blanca con rayas azules la otra: ¿dónde habrán encontrado las gemas y cintas para sus alas? ¿Y este riachuelo?: es agua, sí, pero ¿de dónde proviene?, ¿cuál es la fuente primera del agua elemento? ¡Ah, mirar quiere decir creer, si se sabe ver! (Valtorta, Maria. El Evangelio como me ha sido revelado. 160 Encuentro con Gamaliel en el camino de Neftalí a Yiscala. Libro electrónico)

(20) Todo depende de la buena voluntad y fe que tenga el creyente “Porque si uno, aunque sea de la iglesia cismática o separada tal vez, cree firmemente hallarse en la verdadera fe, **su fe le justifica, y si obra el bien para conseguir a Dios, Bien supremo, recibirá un día el premio de su fe y de la rectitud de sus obras con mayor benignidad divina que la concedida a los católicos.** Porque Dios ponderará cuánto mayor esfuerzo, habrán tenido que realizar para ser justos los separados del Cuerpo místico, los mahometanos, brahmánicos, budistas, paganos, esos en los que no se hallan la Gracia ni la Vida y con ellas mis dones y las virtudes que de dichos dones se derivan. Para Dios no hay acepción de personas ÉL juzgará por los actos realizados, no por el origen humano de los hombres. Y habrá muchos que creyéndose elegidos por ser católicos, se verán precedidos por otros muchos que, al practicar la justicia, sirvieron al Dios verdadero en el suyo desconocido.” (Valtorta, Maria. Lecciones sobre la Epístola de San Pablo. Italia, Libro electrónico.)

*-Dice(Jesús): -El pecado original es común a todos, de Israel y no de Israel. No es particularidad de los paganos. El culto pagano constituirá culpa cuando la Ley de Cristo esté difundida en el mundo. La virtud será siempre virtud a los ojos de Dios. Y, por la unión mía con el Padre, digo -y lo digo en su Nombre, traduciendo en palabras el Pensamiento santísimo- que los caminos del poder misericordioso de Dios son tantos y tan totalmente orientados a la dicha de los virtuosos, que serán eliminadas las barreras entre las almas, y los que merecieron paz paz tendrán. No sólo esto, sino que digo **que en el futuro los que, convencidos de estar en la Verdad, sigan la religión de sus padres con justicia y santidad, no serán malquistos de Dios ni castigados por El.** Es la malicia, la falta de buena voluntad, el rechazar deliberadamente la Verdad conocida, es, sobre todo, el impugnar la Verdad revelada y luchar contra ella, es el vivir vicioso lo que realmente separará para siempre las almas de los justos de las de los pecadores. Alza el espíritu abatido, Síntica. Estas melancolías son un asalto infernal por la ira que Satanás siente hacia ti, presa para siempre perdida. El Hades no existe. Existe mi Paraíso. Pero no es causa de dolor, sino de dicha. Nada de la Verdad debe ser causa de abatimiento o duda; antes al contrario, fuerza para creer cada vez más y con gozosa seguridad. Pero tú manifiéstame siempre tus razones. Quiero que tengas luz segura y firme como la del Sol.” (Valtorta, María. *El Evangelio como me ha sido revelado*. 289. *El sábado a Gerasa*. Pág. 404. *Op. cit.*)*

BIBLIOGRAFÍA DE LA INTRODUCCIÓN

Conocimiento y razón práctica. Un recorrido por la filosofía de Paul Ricoeur.

Marcelino Agís Villaverde. Salamanca.

Fundación Emmanuel Mounier. Imprenta KADMOS, 2011.

Espíritu, persona y sociedad. George H. Mead.

Barcelona, ediciones Paidós, 1982.

Fenomenología, hermenéutica, reflexión. Los caminos de Paul Ricoeur.

Felipe Martín Ignacio Silvero.

Tesis doctoral. Universidad Complutense de Madrid. Facultad de Filosofía. Madrid, 2016.

Sí mismo como otro. Paul Ricoeur.

México. Siglo XXI editores. 2006.

Teoría de la interpretación. Paul Ricoeur.

México. Siglo XXI editores. 2003.

Tiempo y Narración. (I, III) Configuración del tiempo en el relato histórico.

Paul Ricoeur.

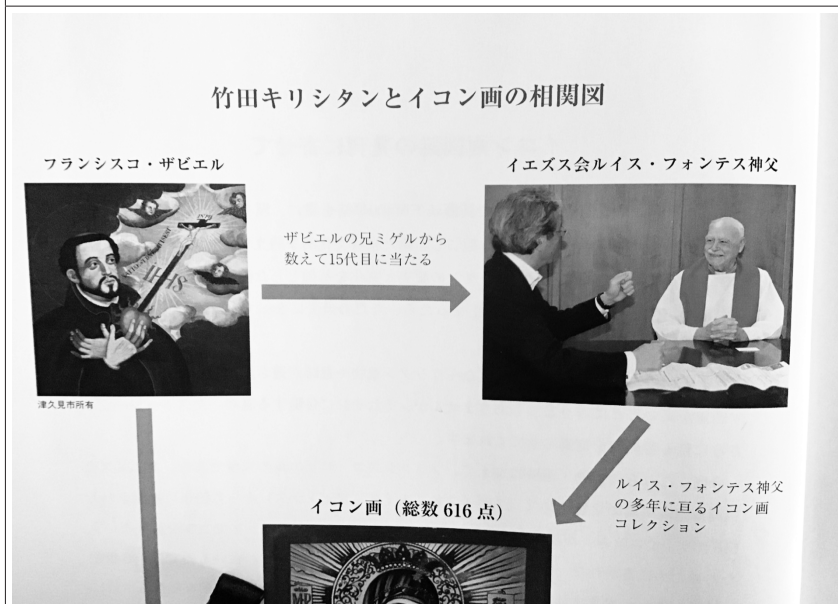
México. Siglo XXI editores. 2004.

- *El autor agradece a todos los que directa o indirectamente han contribuido a la realización de este ensayo en el que se han utilizado ideas publicadas en anteriores escritos así como videos, entre otros los de www.ESCUELADEBIBLIA.COM.; los del padre Ignacio Larrañaga, los de EWTN y los del CATECISMO de Mons. José Ignacio Munilla. Asimismo expresa su adhesión al Magisterio de la Iglesia Católica.*

DOCUMENTO ANEXO

Copias de documentos facilitados por Luis Fontes S.J. actualmente en la Residencia de la Compañía de Jesús y adscrito al Museo de los 26 mártires de Nagasaki (Japón).

La siguiente lista de mártires estaba localizada en el archivo secreto del Municipio de Taketa (según consta estaba prohibida la divulgación en su época) . Transcrita personalmente de los documentos originales en japonés antiguo por el responsable de turismo de la misma ciudad (Goto Atsumi) con la autorización del Alcalde Sr. Katsuji Shuto.



Información sobre la colección de iconos donados por Luis Fontes S.J. a la ciudad de Taketa en la prefectura de Oita (Japón) y nombrado *ciudadano de honor* de dicha ciudad. En la foto Luis Fontes S.J. con el Excmo. Señor Katsuji Shuto Alcalde de Taketa.

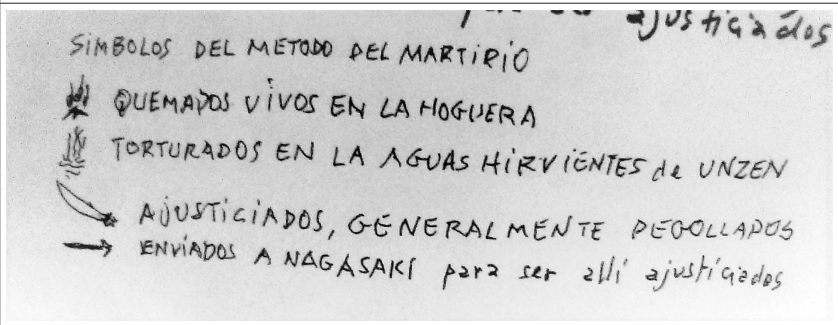
Las actas de los mártires son descripciones de las condiciones en las que se produjo los juicios de los mártires y son documentos de la iglesia

cristiana de personas que dieron testimonio supremo de su fe.

Como una muestra del testimonio simbólico de los mártires cristianos en Japón encontramos lo que parece ser un documento inédito (no tenemos constancia de que se haya publicado hasta la fecha) de una lista secreta de 89 personas conservada en los archivos municipales de la Prefectura de Oita (Japón).

De acuerdo con la prescripción de Shogun (Generalísimo) Tokugawa Ieyasu en 1614 y según los edictos conservados en los museos:

- los cristianos delatados que sean martirizados y degollados si no renuncian a su fe cristiana, esposo y esposa, así como los hijos de ambos.
- la ejecución en secreto sin testigos excepto los ejecutores del castigo.
- los nombres y edad y origen se conserve en archivos secretos para evitar propaganda, a perpetuidad.
- los delatores sean pagados en monedas de oro (para fomentar el espionaje)



Solamente del primer grupo del año 1614 consta con nombres y apellidos japoneses y su correspondiente edad junto al nombre de bautismo ya que hubo testigos cristianos según consta en el Instituto Histórico S.J. de Roma.

岡藩キリシタン殉教者

現竹田市内だけではなく、当時の飛び地、領内全域を含む

JOHARA BENITO WIFE AGATA child AGATA

1614年 城原 夫ベネディクトノ 妻アガタ 子アガタ
MELCHIOR de 3 años 子メルシオールほか3名 合計7名

(火あぶり6名 俵詰め1名)

城原 ミカエル 忠兵衛 39歳 (火あぶり)
MIGUEL chūbyōue de 39 años
 城原 ミカエルの妻マキゼンシャ 39歳 (斬首)
wife MAJENCIA de 39 años
 Hijo de clemente LINO 子クレメンツの子リノ 太郎左衛門 25歳 (火あぶり)
tarō gisemon de 25 años















1648年 山川 伊三郎 (雲仙地獄) YAMA GAWA ISABUROU




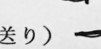






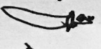


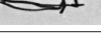
1648年 山川 伊三郎 (雲仙地獄) YAMA GAWA ISABUROU
MIGUEL 忠兵衛 39歳 (火あぶり)
wife MAJENCIA de 39 años
 ミカエルの妻マキゼンシャ 39歳 (斬首)
Hijo de clemente LINO tarō gisemon de 25 años
 クレメンツの子リノ 太郎左衛門 25歳 (火あぶり)












1657年 横平村 松右衛門 (火あぶり) YOKOHIRAMURA MASUEMON






辻村 久左衛門 (火あぶり)
TSUJIMURA KUYASUEMON
 1660年 入田村 作右衛門とその家族
IRITAMURA SAKUEMON
 入田村 庄七とその家族
IRITAMURA SHOSICHI
 入田村 善兵衛とその家族
IRITAMURA ZENBE
 上記三家族合計27名 (火あぶり)

下平田村 総兵衛 (雲仙地獄) SHIMOHIRATAMURA SOUBE
 1661年 矢田村 重兵衛 (火あぶり) YA TAMURA JYUBE
 社家村 金右衛門 (火あぶり) SHAKAMURA KINBE
 1662年 北ノ崎村 善兵衛の妻 79歳 (長崎送り) KITANOSAKIMURA ZENBE
 北ノ崎村 平兵衛 57歳 (長崎送り) 平兵衛
北ノ崎村 HEI BE
 北ノ崎村 庄三郎 53歳 (長崎送り) 庄三郎
北ノ崎村 SHOZABUROU

1660年	入田村 IRITAMURA	作右衛門とその家族 SAKUEMON	
	入田村	庄七とその家族 SHOSHITEI	
	入田村	善兵衛とその家族 ZENBE	
	上記三家族合計27名(火あぶり)		
	下平田村 SIMOHIRATAMURA	総兵衛(雲仙地獄) SOUBE	
1661年	矢田村 YADAMURA	重兵衛(火あぶり) JUUBE	
	社家村 SHAKAMURA	金右衛門(火あぶり) KINBE	
1662年	北ノ崎村 KITANOSAKIMURA	善兵衛の妻79歳(長崎送り) ZENBE	
	北ノ崎村	平兵衛57歳(長崎送り) HEIHEI	
	北ノ崎村	庄三郎53歳(長崎送り) SHOZABUROU	
	北ノ崎村	八左エ門46歳(長崎送り) YASAEEMON	
	北ノ崎村	庄二郎36歳(竹田で処刑) SHOUJIROU	
	北ノ崎村	庄二郎36歳(竹田で処刑) SHOUJIROU	
1665年	恵良原村 ERAHARAMURA	伝之丞(長崎送り) DENNOTOU	
	宮園村 MIYAZONOMURA	勘左衛門(長崎送り) KANZAEEMON	
	宮園村	次郎兵衛(長崎送り) JIROBE	

	宮園村	五郎作(長崎送り) GOROUSAKU	
	宮園村	六之介(長崎送り) MITSUNOSUKE	
	鳴田村 SIGITAMURA	九右衛門(死罪) KUFUEMON	
	鳴田村	又右衛門(死罪) MATAEMON	
	恵良原村 ERAHARAMURA	弥五郎左衛門(長崎送り) YASOROUZAEEMON	
	恵良原村	二郎右衛門(長崎送り) JIROEMON	
1666年	田町 TA MACHI	喜助(自害) KISUKE	
1667年	緒方町 GATA MACHI	古庄与兵衛(長崎送り) FURUSHOUYOHET	
	郡山村 KOORIYAMAMURA	又右衛門の妻62歳(長崎送り) MATAEMON	
	郡山村	庄左衛門妻つる(長崎送り) SHOUZAEEMON + TSURU	
	北ノ崎村 KITANOSAKIMURA	かめ43歳(竹田で処刑) KAME	
	北ノ崎村	たつ41歳(長崎送り) TATSU	
	郡山 KOORIYAMA	ふて3歳(竹田で処刑) FUTE	
	郡山	佐右衛門の妻65歳(竹田で処刑) SAEEMON	

1671年	岡城下 OKAJYOUKA	佐太郎 (自害) SATAROU	
	河内谷 KAWASHITANI	横田儀左衛門 (獄門) YOKOTA GIZAEMON	
	河内谷	こまん (獄門) KOMAN	>
1675年	犬飼町 INUKAIMACHI	喜三郎 (火あぶり) KISABUROU	
	犬飼町	伊三衛門 (火あぶり) IZAEMON	>
1679年	十川村 TOKAWAMURA	如閑 (斬首) IKKAN	
	十川村	如閑の妻 53歳 (斬首) IKKAN + WIFE(?)	
	十川村	如閑の娘まん 25歳 (斬首) IKKAN + DAUGHTER MAN	
	十川村	如閑の息子八郎 12歳 (斬首) IKKAN + SON HACHIROU	
1681年	朽網仲村 KUCHITSUNAKAMURA	太右衛門 (火あぶり) TAEMON	
	朽網仲村	与吉 (火あぶり) YOKICHI	
1682年	岡城下 OKAJYOUKA	小山田弥一郎 (獄門) OYAMATA YAICHIROU	
	直入梨子原	吉之丞 (火あぶり) KICHINOJYOU	
	NAOIRI NASHIFARA		

1691年	清田村 KIYOTAMURA	吉十郎 (斬首) KICHIJYUROU	
	仲尾村 NAKAOUMURA	三之丞 (斬首) SANNOJYOU	
	仲尾村	喜平 (斬首) KIHEI	
1694年	岡城下 OKAJYOUKA	小幡三郎右衛門 (長崎送り) OBATASABUROUEMON	
1701年	冬原村 FUYUHARAMURA	市兵衛 (長崎送り) ICHIBE	
1713年	岡城下 OKAJYOUKA	総之助 (火あぶり) SOUNOSUKE	
1719年	木浦 KIURA	氏名不詳 (長崎送り)	
	尾平 OHIRA	氏名不詳 (長崎送り)	
1738年	古町 FURUMACHI	垂水屋平兵衛 (長崎送り) TARUMIYAHEIBE	
	峰越村 MINAKOSHIMURA	金之丞 (水責め) KINNOJYOU	> Sulficio del agua
1745年	古殿村 FURUDONOMURA	藤右衛門 (水責め) TOUEMON	
		合計 89名	

De algunas fechas